

一貫東遺跡

—津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告9—

1992

津山市土地開発公社
津山市教育委員会

一貫東遺跡

-津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告9-

1992

津山市土地開発公社
津山市教育委員会

題字：津山市長 永礼達造

序

一貫東遺跡は、津山中核工業団地造成に伴い、本委員会が発掘調査を実施したものである。工事計画段階の分布調査では、前方後円墳1基、方墳・円墳各1基が確認されていたのみであったが、その後の立木伐採等により古墳8基とそれ以外にも弥生時代集落の存在が予想された。工事主体者である津山市土地開発公社との協議の結果、前方後円墳1基とその周辺を緑地公園として現状保存することとし、それ以外については全面的に発掘調査による記録措置を行うこととした。

調査の結果、弥生時代後期を主体とする約280箇所の遺構とコンテナ約180箱の遺物が出土した。このうち弥生時代の遺構は、堅穴住居・掘立柱建物・貯蔵穴・墓などからり、当時の集落の構造や変遷を知る上で貴重な資料である。また、古墳群は5世紀頃の小集団の性格を研究する好資料である。しかし、種々の事情により、本書では個々の資料の報告やその歴史的究明については委曲をつくすことができなかつた。これらについては他日を期すこととしたい。又、調査の成果についても、報告書の刊行で終わることなく、津山郷土博物館や津山弥生の里文化財センターの活動を通じて市民に還元するよう努めたい。

最後に、発掘調査の開始から報告書の作成まで多大なる御協力をいただいた津山市土地開発公社、ならびに地元津山市金井・瓜生原・西吉田各町内会をはじめ関係各位に厚く御礼申し上げる次第である。

平成4年3月31日

津山市教育委員会

教育長 森 定 貞 雄

例　　言

1. 本書は津山中核工業団地造成に伴う一貫東遺跡の発掘調査報告書である。
1. 調査は津山市土地開発公社の委託を受けて、津山市教育委員会が1985年3月7日から1986年12月2日まで実施した。
1. 発掘調査は津山市教育委員会文化課主事　湊　哲夫が担当した。
1. 本書に使用した座標値は、 $B = 36^{\circ} 0'$ 、 $L = 134^{\circ} 20'$ を原点とする平面直角座標系第V系に属する座標値を表わす。ただし、本書ではX軸が上3桁、Y軸が上1桁をそれぞれ省略している。例えば、X軸312は-106,312.00m、Y軸5,016は-25,016.00mを示す。またNは座標系の北を、高さの数値は海拔高を表す。
1. 遺構は調査順に通し番号を付し、種別によって次の記号で区別した。

S H : 積穴住居	S B : 挖立柱建物	S C : 貯蔵穴	S Z : 住居状遺構
S S : 段状遺構	S G : 木棺墓・堀立柱墓・土壙墓		S K : 土坑
S D : 溝	S P : 柱穴	S T : 落し穴状遺構	S M : 古墳
S X : 性格不明の遺構			
1. 遺物は次の番号に区分して、実測順に通し番号を付した。

1~100 : 須恵器	101~500 : 弥生土器	501~600 : 上師器
701~800 : 石器		
1. 本書図2に使用した地形図は、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図「津山東部」を複製したものである。
1. 本書の作成は湊　哲夫が行った。ただし、弥生時代の遺物及び上師器(504・505)の実測・製図は今石和美による。
1. 一貫東遺跡から出土した遺物、遺構実測図、遺構写真などは、津山弥生の里文化財センターで保管している。

目 次

I 立地と調査の経過	1
II 遺構・遺物	7
1 弥生時代の遺構・遺物	7
A 壇穴住居	7
B 掘立柱建物	29
C 貯蔵穴	31
D 住居状遺構	56
E 段状遺構	56
F 木棺墓・甕棺墓	57
2 古墳時代の遺構・遺物	72
3 その他	86
III 結語	87

図版目次

図版1上 遺跡周辺空中写真	下 同 左	図版29上 豊棺墓SG224	下 豊棺墓SG240
2 遺跡空中写真		30上 弥生土器壺(253)	下 弥生土器壺(127)
3 遺跡から北東方向を望む		31上 弥生土器鉢(123)	下 弥生土器壺(107)
4 上 穴穴住居SH124	下 穴穴住居SH141	32上 弥生土器菱形器台(104)	下 弥生土器壺(122)
5 上 穴穴住居SH146	下 穴穴住居SH169	33上 弥生土器高杯(106)	下 弥生土器壺(122)
6 上 穴穴住居SH33	下 穴穴住居SH41	34上 弥生土器器台(114)	下 弥生土器高杯(325)
7 上 穴穴住居SH39	下 穴穴住居SH29	35上 弥生土器鉢(101)	下 弥生土器壺(357)
8 上 穴穴住居SH159	下 穴穴住居SH74	36上 弥生土器鉢(124)	下 弥生土器壺(319)
9 上 穴穴住居SH74	下 据立柱建物SB127	37上 弥生土器鉢(116)	下 弥生土器壺(110)
10上 貯蔵穴北群全景	下 貯蔵穴SC114	38上 弥生土器壺(117)	下 弥生土器壺(118)
11上 貯蔵穴SC209	下 貯蔵穴SC15	39上 弥生土器鉢(356)	下 弥生土器壺(113)
12上 貯蔵穴SC10	下 貯蔵穴SC10	40左上 弥生土器壺(115)	左下 砥石(702・703)
13上 貯蔵穴SC111	下 貯蔵穴SC30	右上 石槍(768)	右下 砥石(707)
14上 貯蔵穴SC96	下 貯蔵穴SC109	41 古墳SM2	
15上 貯蔵穴SC112	下 貯蔵穴SC42	42 古墳SM3	
16上 貯蔵穴SC95	下 貯蔵穴南群	43 古墳SM4・SM5・SM6	
17上 貯蔵穴SC36	下 貯蔵穴SC37	44上 下 古墳SM4	
18上 住居状遺構SZ120	下 段状遺構SS184	45上 古墳SM5	下 古墳SM6
19上 段状遺構SS199	下 段状遺構SS162	46上 古墳SM6	下 古墳SM6中心主体
20上 上坑SK126	下 不明遺構SX151	47上 下 古墳SM6箱式石棺	
21 木棺墓SG142		48上 下 古墳SM6龜石築或狀況	
22 木棺墓SG213		49上下 古墳SM8	
23 木棺墓SG217		50上 古墳SM8	下 古墳SM7 豊棺
24上 木棺墓SG217他	下 木棺墓SG233	51上 須恵器壺(1)	下 上篠器壺(502)
25上 木棺墓SG236	下 木棺墓SG234	52上 土師器高杯(503)	下 上篠器高杯(501)
26上 木棺墓SG225他	下 木棺墓SG232	53 土壙壺SG45	
27上 木棺墓SG153他	下 豊棺墓SG66	54上 須恵器壺蓋(2)	中 須恵器壺身(3)
28上 豊棺墓SG231	下 豊棺墓SG237	下 須恵器壺身(4)	

插 図 目 次

図 1 中国地方要図（・印 一貫東遺跡）	1
2 一貫東遺跡周辺の主要遺跡 (1:50,000)	2
3 津山中核工業団地内の遺跡分布 (1:10,000)	3
4 一貫東遺跡全体図 (1:1,000)	8
5 壊穴住居 S H124 (1:50)	9
6 壊穴住居 S H141 (1:60)	11
7 壊穴住居 S H124・S H141出土遺物 (1:4)	12
8 壊穴住居 S H146 (1:50)	14
9 壊穴住居 S H159 (1:50)	15
10 壊穴住居 S H146・S H159出土遺物 (1:4)	16
11 壊穴住居 S H169 (1:60)	18
12 壊穴住居 S H169・S H33・S H41出土遺物 (1:4)	20
13 壊穴住居 S H33 (1:50)	21
14 壊穴住居 S H41 (1:50)	23
15 壊穴住居 S H39 (1:60)	24
16 壊穴住居 S H39・S H29・S H74出土遺物 (1:4)	25
17 壊穴住居 S H29 (1:50)	27
18 壊穴住居 S H74・掘立柱建物 S B101 (1:60)	28
19 掘立柱建物 S B127 (1:75)	29
20 掘立柱建物 S B281 (1:50)	30
21 掘立柱建物 S B84 (1:50)	30
22 貯藏穴 S C13・S C238・S C114・S C239・S C209・S C11・S C210・S C113・ S C10・S C112・S C97、土坑 SK9 (1:50)	32
23 貯藏穴 S C114出土遺物 (1:4)	33
24 貯藏穴 S C113・S C15出土遺物 (1:4)	36
25 貯藏穴 S C10出土遺物 (1:4)	37
26 貯藏穴 S C15・S C21・S C111・S C98・S C42・S C44・S C100・S C208・ S C19 (1:50)	40
27 貯藏穴 S C21・S C111・S C42・S C22出土遺物 (1:4)	42

図28 貯蔵穴 S C 98出土遺物 (1:4)	44
29 貯蔵穴 S C 98・S C 97 出土遺物 (1:4)	45
30 貯蔵穴 S C 22・S C 94・S C 264・S C 265・S C 267・S C 16・S C 17・ S C 263・S C 18 (1:50)	48
31 貯蔵穴 S C 96・S C 18出土遺物 (1:4)	49
32 貯蔵穴 S C 110・S C 106・S C 105・住居状遺構 S Z 108 (1:50)	51
33 貯蔵穴 S C 204・S C 207・S C 30・S C 109・S C 96・S C 95 (1:50)	52
34 貯蔵穴 S C 35・S C 36・S C 37・S C 38・S C 81・S C 34・S C 78出土遺物 (1:4)	54
35 木棺墓 S G 143・S G 132・S G 133・S G 142 (1:50)	58
36 木棺墓 S G 241・S G 214・S G 222・S G 223・S G 229・S G 213・S G 230・ S G 228・S G 135・S G 134・S G 212・S G 218・S G 217・S G 216・ 妻棺墓 S G 224・S G 231 (1:50)	59
37 妻棺墓 S G 224・S G 231、木棺墓 S G 232出土遺物 (1:4)	60
38 妻棺墓 S G 237、木棺墓 S G 227・S G 248・S G 249・S G 225・S G 226・ S G 247 (1:50)	63
39 妻棺墓 S G 237・S G 66、木棺墓 S G 221出土遺物 (1:4)	64
40 木棺墓 S G 244・S G 236・S G 149・S G 150・S G 233・S G 234・S G 254・ S G 243・S G 242・S G 235・S G 245・S G 152・S G 153・S G 154・ 妻棺墓 S G 240 (1:50)	66
41 妻棺墓 S G 240、遺構 S X 219出土遺物 (1:4)	68
42 木棺墓 S G 220・S G 232・S G 276・S G 257・S G 251・S G 253・S G 252・S G 255、 妻棺墓 S G 221、遺構 S X 219 (1:50)	70
43 古墳群の分布 (1:2,500)	73
44 古墳 S M 1 墳丘測量図 (1:300)	74
45 古墳 S M 2 (1:100)	75
46 古墳 S M 2 構造式石室 (1:20)	76
47 古墳 S M 3 (1:125)	77
48 古墳 S M 4 (1:80)	79
49 古墳 S M 5 (1:80)	80
50 古墳 S M 6 (1:80)	81
51 古墳 S M 6 箱式石棺 (1:25)	82
52 古墳 S M 7 (1:100)	83
53 古墳 S M 8 (1:80)	84
54 古墳 S M 2・S M 7・S M 8 出土遺物 (1:4)	85

I 立地と調査の経過

遺跡の立地 一貫東遺跡は、津山盆地のほぼ中央、吉井川と加茂川との合流点東南東約3.3kmの丘陵上にある。行政区画は、岡山県津山市金井字一貫472番地他である。津山盆地は北に標高1,000m前後の中国山地、南に標高500m前後の吉備高原にはさまれた東西約40km、南北10数kmにおよぶ内陸地帯である。この盆地はおおづかみには、中国山地から南に派生してくる標高120~300m程の低丘陵と吉井川とその支流に添って形成されたいいくつかの小冲積平地とから構成されている。このうち、津山市と橋原町と画する標高332mの通称和気山から、吉井川の小支流広戸川に向かって北に延びる丘陵群がある。遺跡はこの丘陵群の先端部の逆S字形を呈する標高128m程の南北丘陵上に位置する。小さな谷をはさんだ西側の丘陵にも遺跡があり、小字が同じく一貫であるので、それを一貫西遺跡として区別した。遺跡の北東には、広戸川と肘川とによって沖積された方2km程の小平野が開けている。

周辺の遺跡 本遺跡のある広戸川下流域と加茂川と吉井川の合流点周辺には、おびただしい遺跡が存在する。ところが弥生時代前期以前には顕著な遺跡ではなく、遺跡数が飛躍的に増大するのは弥生時代中期以降である。中期後半の集落遺跡に、本遺跡に西接する一貫西遺跡⁽¹⁾、北に隣接する西吉山遺跡⁽²⁾、加茂川右岸丘陵上の押入西遺跡⁽³⁾がある。後期には、加茂川左岸丘陵上の天神原遺跡⁽⁴⁾（集落遺跡）と集落と墓地からなる本遺跡がある。古墳時代前半期には、



図1 中国地方要図（・印 一貫東遺跡）

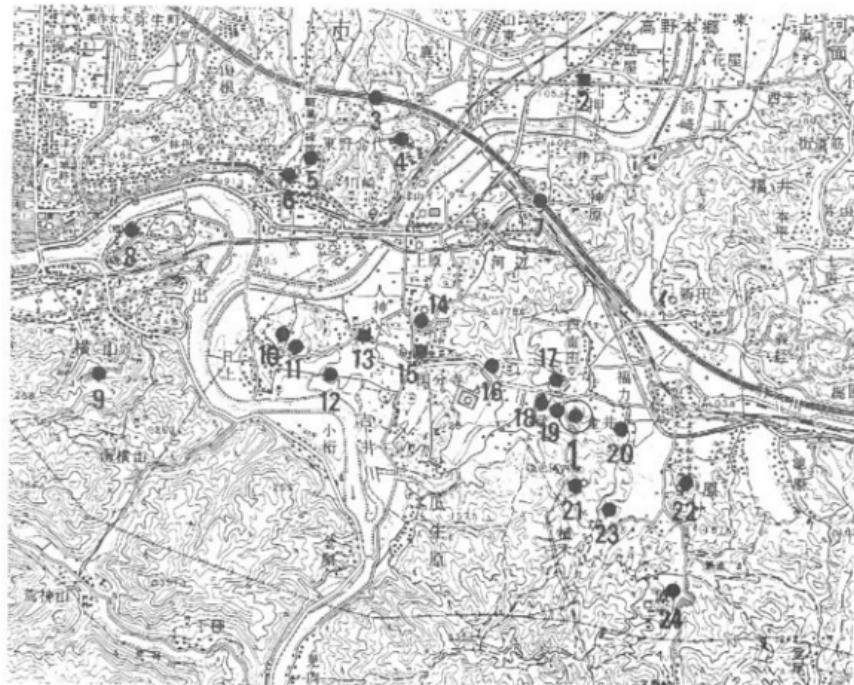


図2 一貫東遺跡周辺の主要遺跡（1:50,000）

1 一貫東遺跡	7 天神原遺跡	13 美作國分尼寺跡	19 一貫西遺跡
2 勅使遺跡	8 観山遺跡	14 飯塚古墳	20 金井古墳群
3 押入西遺跡	9 明見峠古墳群	15 美作國分寺跡	21 別所遺跡
4 狐塚遺跡	10 歓山古墳群	16 長歎山北古墳群	22 稲千古墳群
5 六ツ塚古墳群	11 天王山古墳	17 西吉田遺跡	23 仏里古墳群
6 玉琳大塚古墳	12 和田古墳	18 茶山古墳	24 真中原古墳群

加茂川左岸に、天王山古墳（前方後円墳、全長55m）、飯塚古墳（円墳、直径35m）などの単独墳の他に、本遺跡、金井古墳群、稻千古墳群、まいまい塚古墳群など前方後円墳や帆立貝式古墳を盟主とする群集墳が築かれる。また5世紀後半頃から6世紀前半頃にかけては、吉井川左岸の歓山古墳群、広戸川右岸の長歎山北古墳群⁵¹など円墳からなる群集墳がある。古墳時代後半期には、本遺跡に西隣する茶山古墳⁵²（前方後円墳、全長21m）、吉井川左岸の玉琳大塚古墳（前方後円墳、全長36m）などの首長墓とともに、六ツ塚古墳群、明見峠古墳群などの群集墳も築かれる。また、加茂川右岸の狐塚遺跡⁵³は、7世紀初頭頃の製鉄関連遺跡であり、本遺跡周辺にも一貫西遺跡、崩レ塚遺跡⁵⁴、小原遺跡⁵⁵、大畠遺跡といった7～9世紀の製鉄ないしその関連遺跡が分布する。白鳳時代には、加茂川右岸平地に寺院跡と推定される勅使遺跡があり、奈良・平安時代にも官立寺院である美作國分寺跡⁵⁶・國分尼寺跡⁵⁷が加茂川左岸段丘



図3 津山中核工業団地内の遺跡分布（1:10,000）

- | | | | |
|----------|----------|----------|---------|
| 1 一貫西遺跡 | 2 一貫東遺跡 | 3 深田河内遺跡 | 4 別所谷遺跡 |
| 5 崩レ塚古墳群 | 6 クズレ塚古墳 | 7 崩レ塚遺跡 | 8 柳谷古墳 |
| 9 大畠遺跡 | 10 小原遺跡 | | |

上に造営される。なお、奈良・平安時代には、本遺跡の北裾を通り、美作国分寺跡南門前を通じて、美作国府に至る官道が存在したと推定される。

調査に至る経過 文化財保護法第57条の3にもとづき、津山市土地開発公社理事長永礼達造から、津山市金井、津山中核工業団地造成工事にかかる「埋蔵文化財に関する協議について（通知）」が、昭和59年5月10日付文書で文化庁長官に提出された。これは、後に判明する一貫東遺跡、同西遺跡を含む中核工業団地第一期工事分約123,000m²に相当する地区であった。同地区は標高125m前後の南北に延びる丘陵群からなり、小さい谷をはさんで東区と西区にわかれる。西地区については、1984年6月27日～7月5日の津山市教育委員会による確認調査で遺跡が発見され、同年11月26日から全面調査が開始された。

さて、東地区については、事前協議の段階で3基の古墳(SM1~3)の存在が判明しており、その後の立木伐採で新たに5基の古墳(SM4~8)が確認された。さらに、丘陵北東斜面と東側面で、工事用道路の開削により多くの弥生土器片が採取されたので、弥生時代集落の存在が予想された。そこで、土地開発公社との協議の結果、丘陵最高部にある前方後円墳(SM1)を現状保存とし、他は全面的に発掘調査による記録措置を行うこととした。東西地区とも小字が一貫であるので、東地区を一貫東遺跡、西地区を一貫西遺跡と命名して区別した。なお、第Ⅱ期工事分462,000m²についても、昭和60年11月27日付文書で事前協議がなされ、確認調査により8箇所の遺跡が確認された。これらについても、津山市教育委員会により順次発掘調査が実施された。なお、発掘調査及び調査報告書作成に要する経費は、全額津山市土地開発公社が負担した。

調査経過 発掘調査は、津山市土地開発公社から委託を受けて、津山市教育委員会(教育長 福島祐一)が主体となり、1985年3月7日から1986年12月2日まで1年9箇月間実施した。調査面積は約20,000m²である。この間の調査事務は文化課(課長 内田康雄)が行い、現地調査は文化課上事 渡哲夫が担当した。まず、3月初旬に測量会社に委託して、古墳SM2~8周辺の縮尺50分の1の地形測量を実施し、引き続き調査と平行して、遺跡全体の500分の1の地形測量を行った。調査はSM5~7のトレンチ調査から開始した。調査方針として、古墳のある丘陵頂部は人力による排土を行い、他は重機による排土を行うこととした。そこで、古墳の調査と平行して、遺構を確認を目的とするトレンチを西斜面に5箇所設定して、5月4日まで実施した。その結果、遺構は地山面で検出されることを確認した。当初の計画では、このトレンチを北から東斜面に及ぼす予定であったが、作業が進展しなかったので、5月27日から6月13日まで、パワーショベル2台、ブルドーザー1台で丘陵頂部を除く全面の地山面上までの排土作業を実施した。ところが、後になって北東斜面に木棺墓群が検出され、それに伴う遺物は墓壙上面に供獻されることが多いことが判明した。この地区的排土は人力で行うべきであった。事前にトレンチ調査により遺構の分布傾向を充分に把握していなかったことを反省する。

重機による排土後、測量会社に委託して国土座標に基づく5m方眼のグリッド杭兼測量基準杭を、調査区全面に設置した。その後は、調査区南端の西斜面を起点に順序北進し、北端で折り返し南進して南端東斜面に至る調査計画を立て、6月17日から開始した。調査区の西及び北側に農業用水路があり、また北東下には数枚の水田を経て民家もあったので、雨期の集中豪雨時にはこれらとのトラブルに苦慮させられた。調査作業員は10数名で、調査員が1名であるので、どうしても実測が遅延しがちとなった。そこで大学の夏休み及び春休み期間に、10名程の学生アルバイトを動員し、集中的に実測作業を行った。冬には北西の季節風が強いため、西斜面の調査が困難で、東斜面は比較的はかどった。遺構の密度が西斜面に薄く、東斜面に濃いのも、この冬期の季節風に一原因があるようと思われた。調査がある程度進展した1986年6月9

日には、気球による空中写真撮影を実施した。5月21日からは北東斜面の木棺墓群の発掘に着手したが、当初の調査区外に広がると思われたので、7月17日から7月22日までパワーショベルにより、堆土の除去と表皮の除去を行い調査区を拡張した。同年の秋頃には調査がある程度煮詰まってきたので、11月24日に現地説明会（参加者52人）を開催し、調査の概要を紹介した。11月27日にはSM3の実測を完了し、発掘調査を終え、さらに12月2日には現状保存のSM1の墳丘測量を実施し、すべての調査を完了した。

報告書の作成 出土遺物の整理は、和田（旧姓飯田）和江、杉山紀子2名により、調査の当初より現場事務所において進めた。発掘終了の時点で、洗浄、注記、復元をほぼ完了した。これらの遺物は調査後、津市二宮の埋蔵文化財整理事務所に移した。ところが、調査担当の湊が1987年6月から文化課郷土博物館開館準備室、翌年4月からは津山郷土博物館に転じたので報告書作成に専念することはできなくなった。そこで、遺物、実測図、写真を博物館に移し、1988年10月から本務の傍ら断続的に報告書作成作業を行ったが、はかばかしく進展しなかった。1991年8月からは同館嘱託学芸員今石和美の援助を受け、同年10月から1992年3月までやや集中的に実施した。しかし、時間的な事情により、弥生時代遺構のうち、住居状遺構、段状遺構、その他の土坑・溝などと、弥生・古墳時代以外の遺構については、全面的に割愛せざるをえなかつた。また、納語についても単に問題点を羅列するにとどまり、本遺跡のもつ豊かな内容を展開することはできなかつた。これらについては、後日別の形で貴を果たしたいと思う。

注

- (1) 行田裕美『一貫西遺跡』（津市埋蔵文化財発掘調査報告第33集）津市土地開発公社・津市教育委員会 1990年
- (2) 行田裕美『西古田遺跡』（津市埋蔵文化財発掘調査報告第17集）津市教育委員会 1985年
- (3) 河本清・橋本惣司・下沢公明・井上弘・柳瀬昭彦「押入西遺跡」（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』）岡山県教育委員会 1973年
- (4) 河本清・橋本惣司・下沢公明・柳瀬昭彦「天神原遺跡」（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7』）岡山県教育委員会 1975年
- (5) 行田裕美・木村祐子『長歛山北古墳群』（津市埋蔵文化財発掘調査報告第45集）津市教育委員会 1992年
- (6) 保田義治『茶山古墳群』（津市埋蔵文化財発掘調査報告第27集）津市教育委員会 1989年
- (7) 河本清『狐塚遺跡』（津市埋蔵文化財発掘調査報告第2集）津市教育委員会 1974年
- (8) 保田義治・行田裕美『崩レ塚遺跡』（津市埋蔵文化財発掘調査報告第28集）

津山市土地開発公社・津山市教育委員会 1989年

- (9) 行田裕美・小郷利幸・木村祐子『小原遺跡』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告第38集)
 津山市土地開発公社・津山市教育委員会 1991年
- (10) 渡哲夫・安川豊史・行山裕美『美作国分寺跡発掘調査報告』津山市教育委員会 1980年
- (11) 渡哲夫『美作国分尼寺跡発掘調査報告』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告第12集)
 津山市教育委員会 1983年

番号	遺跡名	調査面積	調査期間	調査担当者	調査報告書
1	一貴西遺跡	22,000m ²	1984.11.26 ～1985.5.26	行田裕美	津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告 3 1990年(既刊)
2	一貴東遺跡	20,000m ²	1985.3.7 ～1986.12.2	渡哲夫	同 上 9 1992年(既刊)
3	深田河内遺跡	3,300m ²	1986.2.24～4.23 5.21～7.30	行田裕美	同 上 2 1988年(既刊)
4	別所谷遺跡	9,400m ²	1986.7.26～10.23	行田裕美	同 上 6 (未刊)
5	崩レ塚古墳群	1,400m ²	1987.8.28～10.19	小郷利幸	同 上
6	ケズレ塚古墳	200m ²	1987.8.4～11.6	小郷利幸	4 1990年(既刊)
7	崩レ塚遺跡	5,100m ²	1987.10.7 ～1988.1.30	保田義治	同 上 5 1989年(既刊)
8	柳谷古墳	100m ²	1987.10.9～11.2	保田義治	同 上 1 1988年(既刊)
9	大畑遺跡	18,000m ²	1986.10.24～12.23, 1987.4.1～10.6, 1987.11.20～12.12, 1988.1.26～3.31	行田裕美 小郷利幸 保田義治	同 上 7 (未刊)
10	小原遺跡	12,000m ²	1986.12.24～1987.4.14 1987.7.13～8.3, 1987.11.5～1988.5.8	行田裕美 小郷利幸 木村裕子	同 上 8 1991年(既刊)

津山中核工業団地内遺跡発掘調査一覧

II 遺構・遺物

発掘調査により検出された遺構は、竪穴住居、掘立柱建物、貯蔵穴、段状遺構、木棺墓、古墳など277箇所である。これらは、弥生時代、古墳時代、鎌倉時代、その他の時代に大別される。弥生時代の遺構は調査区の北半に密に分布する。古墳時代の遺構は8基の古墳が尾根上に並ぶ。鎌倉時代の遺構は調査区の南半部で3箇所検出された。その他の時代の遺構は、調査区南半部にある白鳳時代の土壙墓1基と時期不明の落とし穴状遺構10箇所である。以下、時代別に解説する。

1 弥生時代の遺構・遺物

弥生時代の遺構は、竪穴住居、掘立柱建物、貯蔵穴、住居状遺構、段状遺構、木棺墓・壺棺墓、土壙、溝、柱穴等約200箇所である。

A 竪穴住居

竪穴住居は丘陵頂部に8棟、東斜面に1棟、西斜面に1棟、計10棟が検出された。

S H 124 (図5・7、図版4上) 竪穴住居S H 124は、調査区の北辺の丘陵頂部にある。隅丸方形で6.22m×5.72m。検出面から床面までの深さは29cmを測るが、西端部は削平されている。周溝は現状で2重。外周溝は幅18cm、深さ4cm。西端部は削平され消失する。内周溝は5.16×4.54cmで、北西辺に2箇所、東北辺に1箇所の切れ目がある。幅24cm、深さ5cm。柱穴は内周溝の四隅に1箇所づつある。直径40~50cm、深さ48~57cm。中央穴は円形で段をもつ。上段直径73cm、下段直径39cm、上段からの深さ54cm。周溝の北東辺に貯蔵穴がある。住居と切り合い関係は認められないので、住居に伴うものと考えられる。不整円形を呈し、上面径1.44m、底面径1.45m、底部最大径1.58mを測り、断面は袋状を呈する。

住居埋積土から弥生土器数10片、南柱穴埋積土から弥生土器數片、貯蔵穴埋積土から弥生土器数10片が出土した。143は壺の口縁部破片。復元口径129cm。直立する二重口縁を呈する。141は壺の底部破片。復元底径45cm。142は高杯の杯部破片。唇曲部をもち大きく外反する。内外面は丹塗り。139は蓋。上面端部を欠く。底部径83cm。脚部内面は不調整。143が貯蔵穴埋積土出土、他は住居埋積土出土。II期に該当すると思われる。

S H 141 (図6・7、図版4下) 竪穴住居S H 141は、S H 124の南東約18mの丘陵頂部にある。2回の建替えがある。Aは円形プランで、5.40m×5.32m。周溝は幅17~35cm、深さ9~15cm。主柱は4~7の4か所で、径22~35cm、深さ47~67cmを測る。中央穴1は長径60、深さ36cm。周溝を南北方向に拡張して、長辺5.95mの梢円形となる。拡張時に西方方向に幅約35

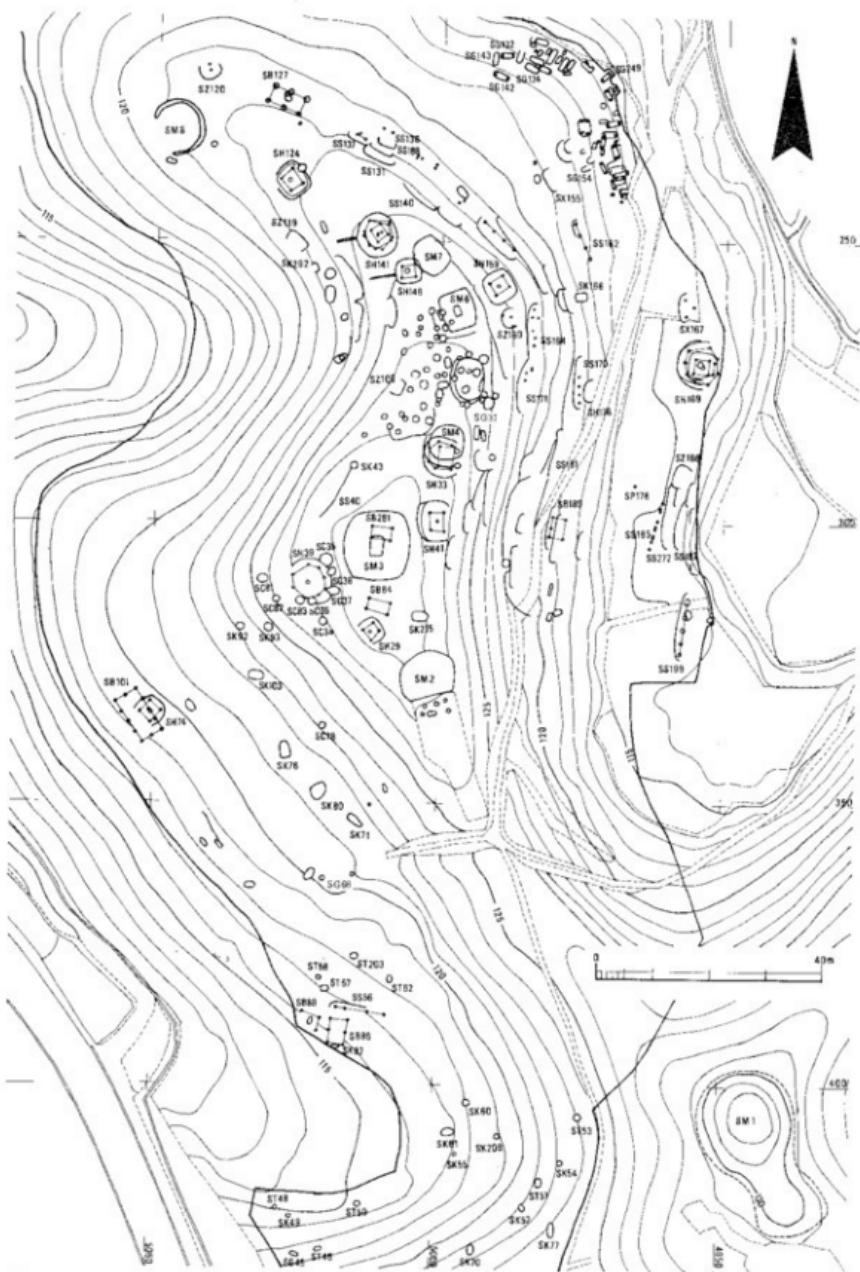


図4 一貫東道跡全体図 (1:1,000)

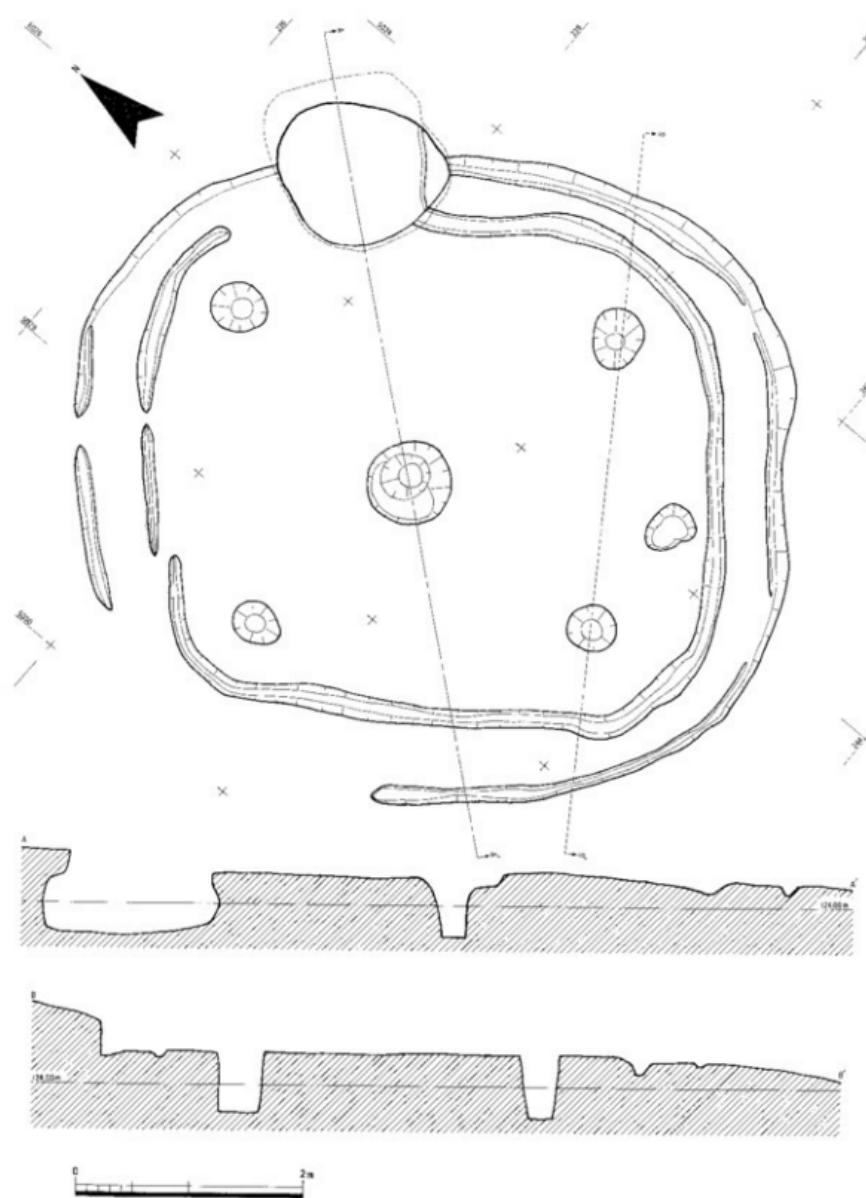


図5 堅穴住居SH124 (1:50)

cm、深さ約25cmの排水溝を設ける。Bは円形プランで、径7.15m。周溝は幅15~28cm、深さ5~12cm。主柱は5箇所で、柱穴8~12が該当する。径45~50cm、深さ41~56cm。中央穴2は径46cm、深さ50cm。Cは南西部を一部拡張するのみで、Bとプランをほとんど共有させる。主柱は6か所で、柱穴13~17と11が該当する。柱穴11はBと共有する。柱穴は径12~46cm、深さ36~42cm。中央穴3は径42cm、深さ60cmで、周囲に上面幅20cm程の土堤をもつ。ほぼ上堤の範囲に灰層が分布する。中央穴3から柱穴8に向かって幅約15cm、深さ約6cmの床溝がある。

住居埋積土などからコンテナ4箱分の弥生土器と石器4個が出土した。166・146・162・158・164・157・161・165・167は甕・壺の口縁部破片である。164は復元口径約14cm、口縁端部がわずかに上方に拡張する。口縁部外面には3条の浅い凹線がめぐる。157は復元口径約17cm、口縁部外面に凹線文はない。胴部内面はヘラ削り。165は復元口径約15cm、口縁端部を上下にわずかに拡張する。口縁部外面には3条の浅い凹線がめぐる。167は甕。復元口径約15cm、口縁端部が上方に拡張する。口縁部外面には7条の櫛搔沈線がめぐる。口縁部内面は横ナデ。胴部内面はヘラ削り。胴部外面には煤が付着する。170は甕の底部破片。底部径4.8cm、内外面に煤が付着。147は小型甕の底部と思われる。底部内面を押圧し、底を小さく突出させる。内外面はヘラ磨き。B・C南東区周溝から出土。胎土はよく精選されている。151は鉢の破片だが、ほぼ完形に復元しうる。復元口径約26cm、同高約28cm。口頭部に把手を貼り付ける。底部は平底。外面はヘラ磨き。外面とも丹彩。胴部外面下半部に煤が付着する。東壁脣部から出土した。152・144・153は椀である。152はほぼ完形品。復元口径9.5cm、高4.6cm。心もち内湾する。高台は底部をつまみ出し、粘土を充填したもの。144もほぼ完形品。復元口径約10cm、高5.5cm。椀部はかなり内湾する。高台は貼り付けによる。B・C東北区周溝埋積土より出土した。153は底部破片である。高台径7.0cm、高台は八字方に外反する。外面に丹彩。145・160・148・153は高杯の破片である。145は杯部。復元口径約22cm。屈曲しながら大きく外反する。内外面ともヘラ磨き。148は筒部径4.6cmで、内外面ともヘラ磨き。外面は放射状暗文脈となる。筒部内面はヘラ削り。東北区A周溝とB・C周溝の間の床面から出土した。154・155は蓋の破片。163は甕の破片。器形は楕形土器である。口縁部がく字状に外反する。底部に径6mmの焼成前の穿孔がある。穿孔に接して径5mmの未貫通の穿孔がある。高台はつまみ出しによる。外面はヘラ磨き、内面はヘラ削り。159・168は器台の口縁部破片。どちらも口縁端部が上方に少し立ち上がる。159には同心円文、168には鋸歯文が施される。ミニチュア上器は3個出土した。149は口径3.4cm、高3.7cm。鉢形を呈す。150は胴部最大径4.6cm、復元高3.7cm。無頭壺形である。図示していない他の1個は、復元口径2.2cm、高2.0cm。碗形を呈する。171は円筒形の土製品。径2.4cm、高1.9cm。径4cmの焼成前の穿孔がある。

704は石庵丁の破片である。幅4.2cm、厚6cm。材質は緑色片岩。東北区のAとB・Cの間の床面から出土した。702・703(図版40左下)は砥石である。どちらも4面を砥面とする。材質

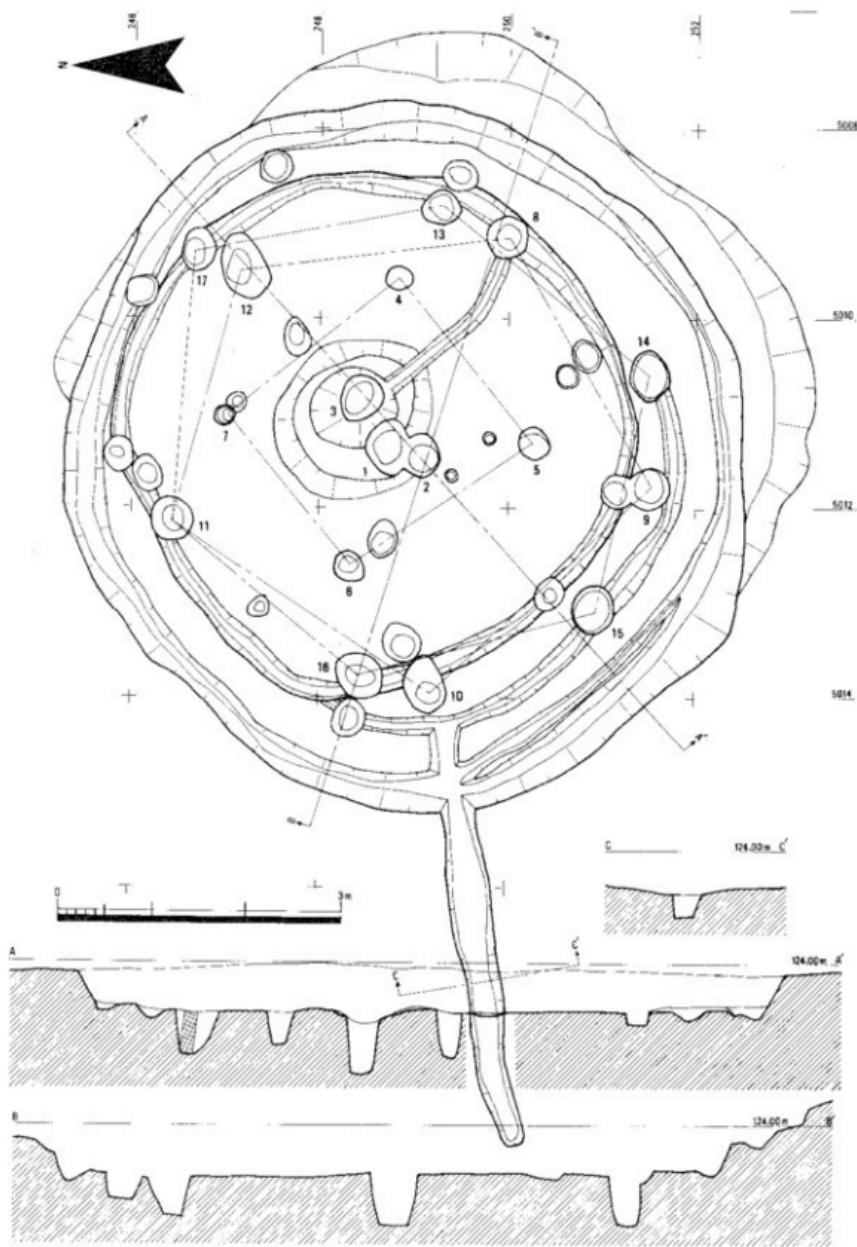


図6 堅穴住居SH141 (1:60)

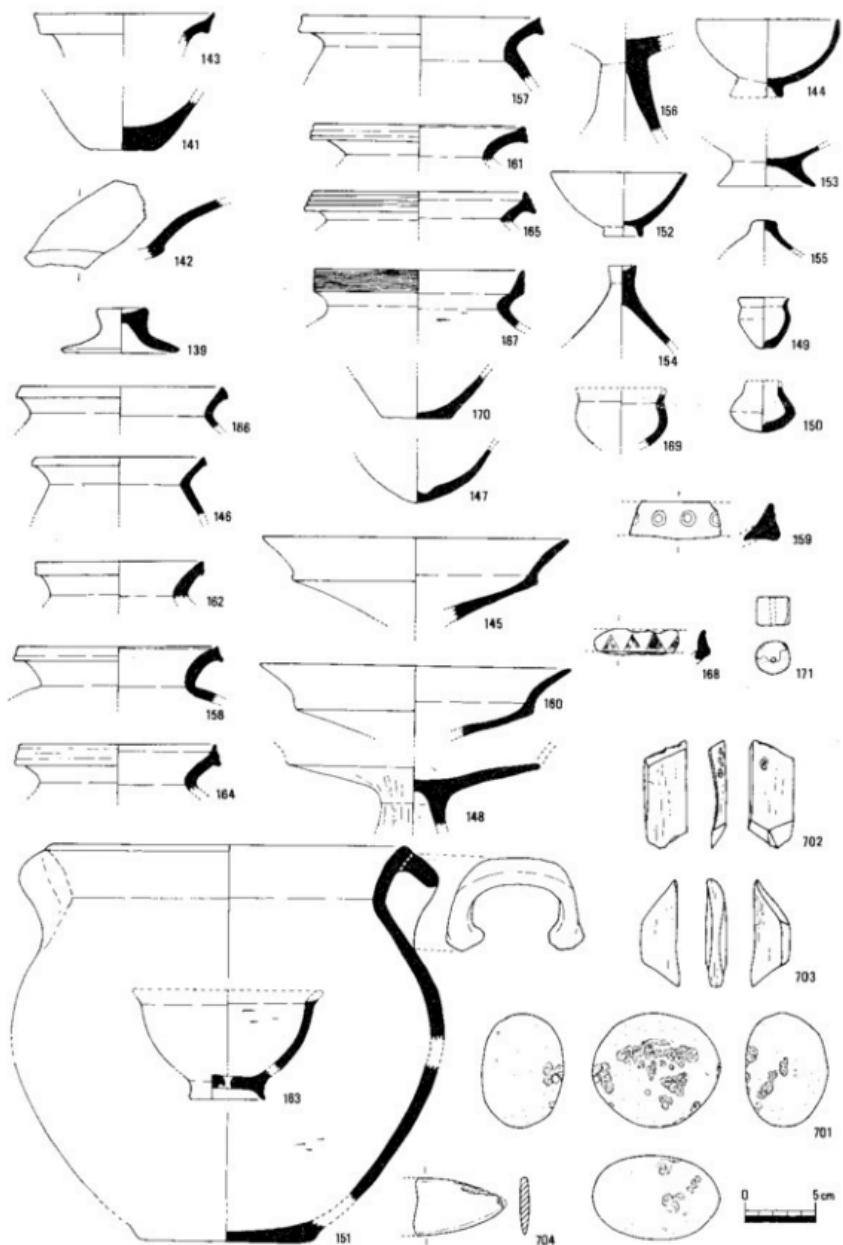


図7 塗穴住居SH124・SH141出土遺物 (1:4) (143・141・142・139はSH124, 他はSH141)

は頁岩である。703は704と同じ部位から、702は東南区埋積土から出土した。701は磨石である。砂岩製の自然石をそのまま再利用したもの。扁平な片面に使用痕が認められる。東区B・C周溝埋積土から出土した。

以上の遺物のうち、164・165の壺はⅠ期の特徴をもち、167の壺、145・160の高杯はⅡ期の特徴を有する。これらの遺物は最終期のC住居に伴うか、あるいはその廃絶後のものと考えられる。従って、C住居の年代はⅡ期と思われる。

S H 146 (図8・10、図版5上) 竪穴住居S H 146はS H 141の南東約9mの丘陵頂部にある。平面形は隅丸方形で、南北辺4.45m、東西辺4.73mを測る。周溝は幅12~27cm、深さ7~10cm。柱穴は4か所で、径24~40cm、深さ42~45cm。中央穴は段掘りで、上段平面は不整格円形、下段は円形となる。上段長径1.10m、同短径85cm、同深さ11cm、下段径32cm、深さ28cm。下段には炭・焼土を多数含む。中央穴の周囲2×2m程の範囲には灰層が分布する。中央穴から東と西に幅約25cm、深さ約15cmの床溝が延び周溝にとりつく。床幅は暗渠で、上面に灰層がかぶる。西床溝はそのまま壁面をくり抜いて排水溝となる。長さ4.65m、幅約20cm、深さ約35cmでV字状を呈する。住居堆積土上方約30cmは、古墳S M 7築成時の盛土によって埋められている。

盛土を含む堆積土などから、コンテナ1箱分の弥生土器が出土した。177・174・179・175・178・172は壺・甕類の口縁部破片である。177は口縁端部が外方に拡張し、口縁部に3条の凹線文がめぐる。盛土から出土。179は口縁部に凹線をもたない。胴部内面はヘラ削り。堆積土出土。172は壺。復元底径約17cm。口縁端部が外方に拡張する。口縁部外面に6条の凹線文がめぐる。胴部外表面はヘラ磨き。頸部内面は指頭圧痕。胴部内面はヘラ削り。堆積土出土。182は甕の底部破片。復元底径5.4cm。堆積土出土。183は高杯の脚筒部破片。筒部最小径3.0cm。埋積土出土。181は高杯の杯部破片。口縁端部が外方に拡張し、上面が水平となる。杯部上方に屈曲部をもつ。盛土出土。180は器台の口縁部破片。端部がわずかに内湾しながら大きく垂下がる。外面は剥離が著しいが、鋸齒文が認められる。堆積土出土。上記以外に、東北柱穴埋積土からサスカイト片が出土した。Ⅰ期に編年される。

S H 159 (図9・10、図版8上) 竪穴住居S H 159は、S H 146の東約16mの丘陵肩部にある。平面形は隅丸方形で、5.63m×5.45m。検出面から床面までの深さは最大値75cm。周溝は幅20~37cm、深さ6~17cm。主柱穴は4か所で、掘形径40~54cm、深さ30~48cm。東南隅に2か所の柱穴があり、内側が主柱で、外側は補修用の支柱かと思われる。中央穴は円形で、段掘りである。上段径72cm、同深さ10cm、下段径35cm、同深さ43cm。埋積土には炭を多数含む。中央穴から東南方向に幅約17cm、深さ約7cmの床溝が延び周溝に達する。中央穴の東南に接して径41cm、深さ8cmの小柱穴があり、そこから周溝まで床溝が延びる。中央穴の周囲約2.5mの範囲の床面上には灰層が堆積する。

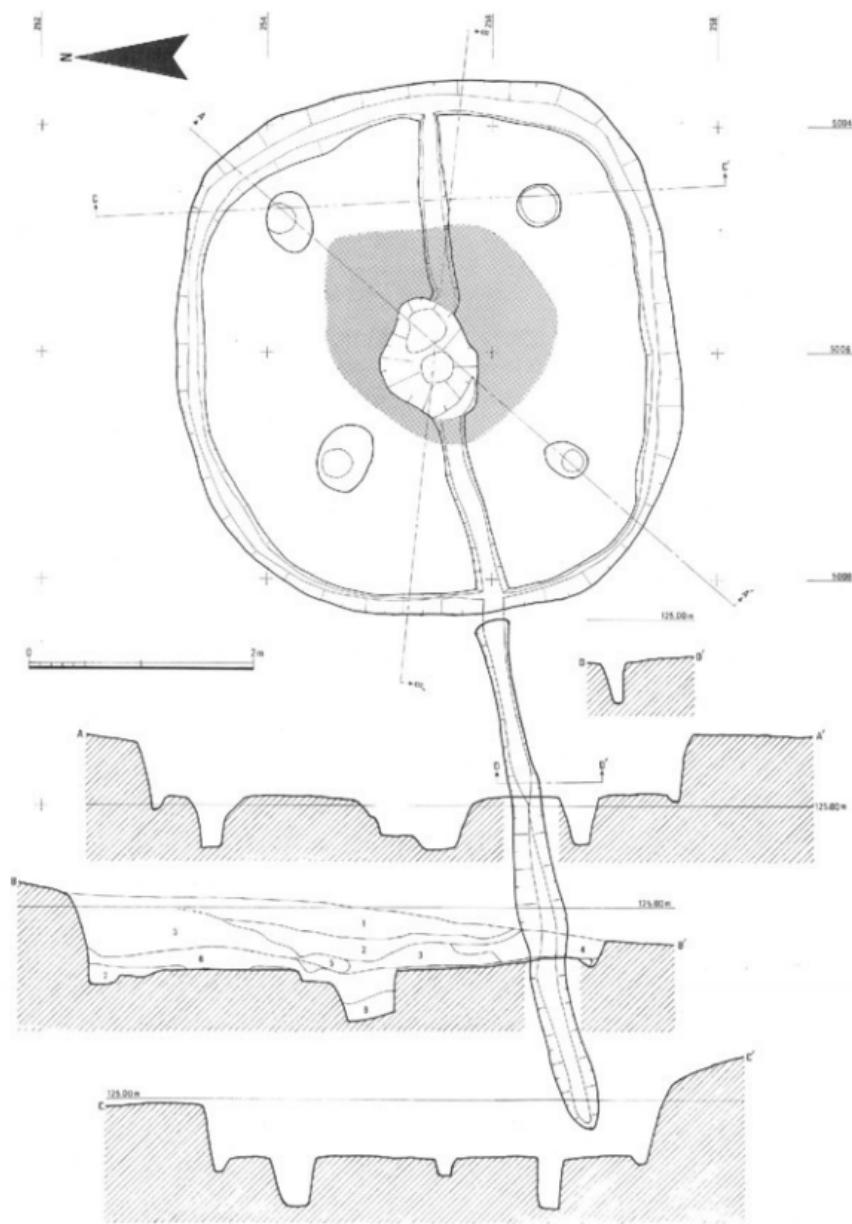


図8 塗穴住居SH146 (1:50)

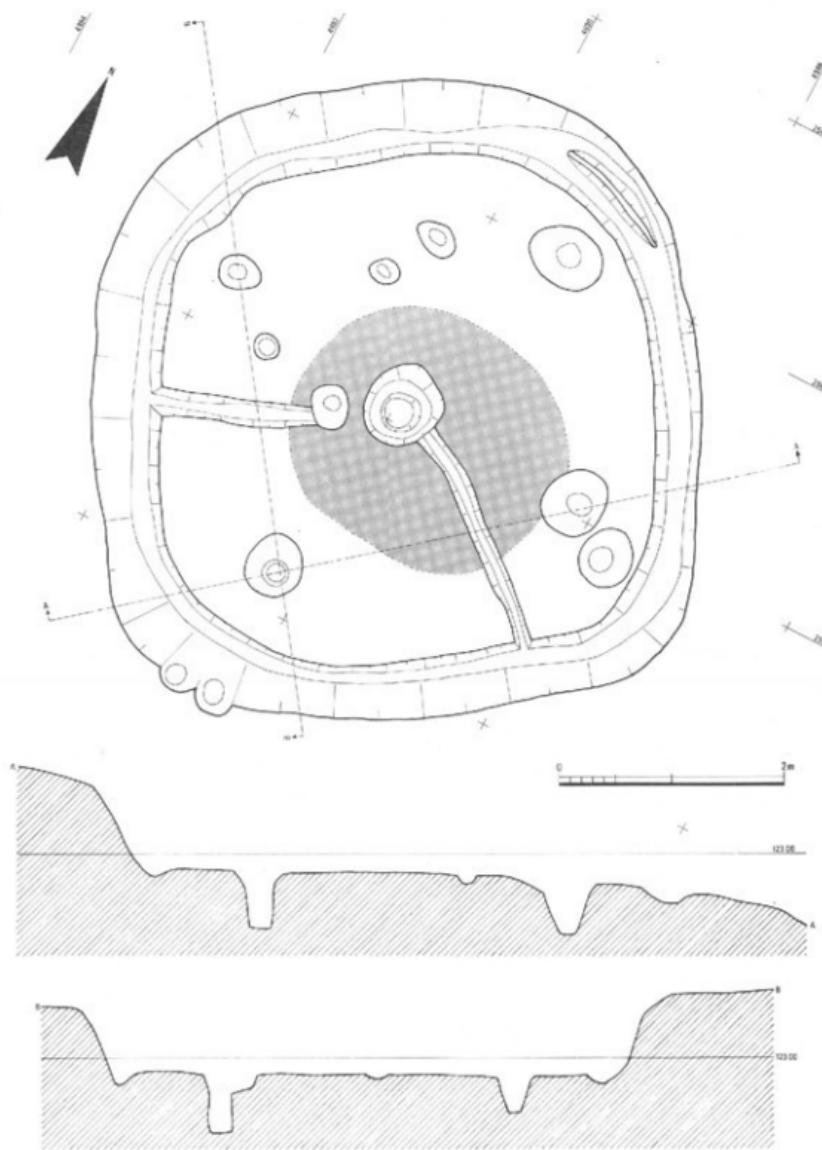


図9 堅穴住居SH159 (1:50)

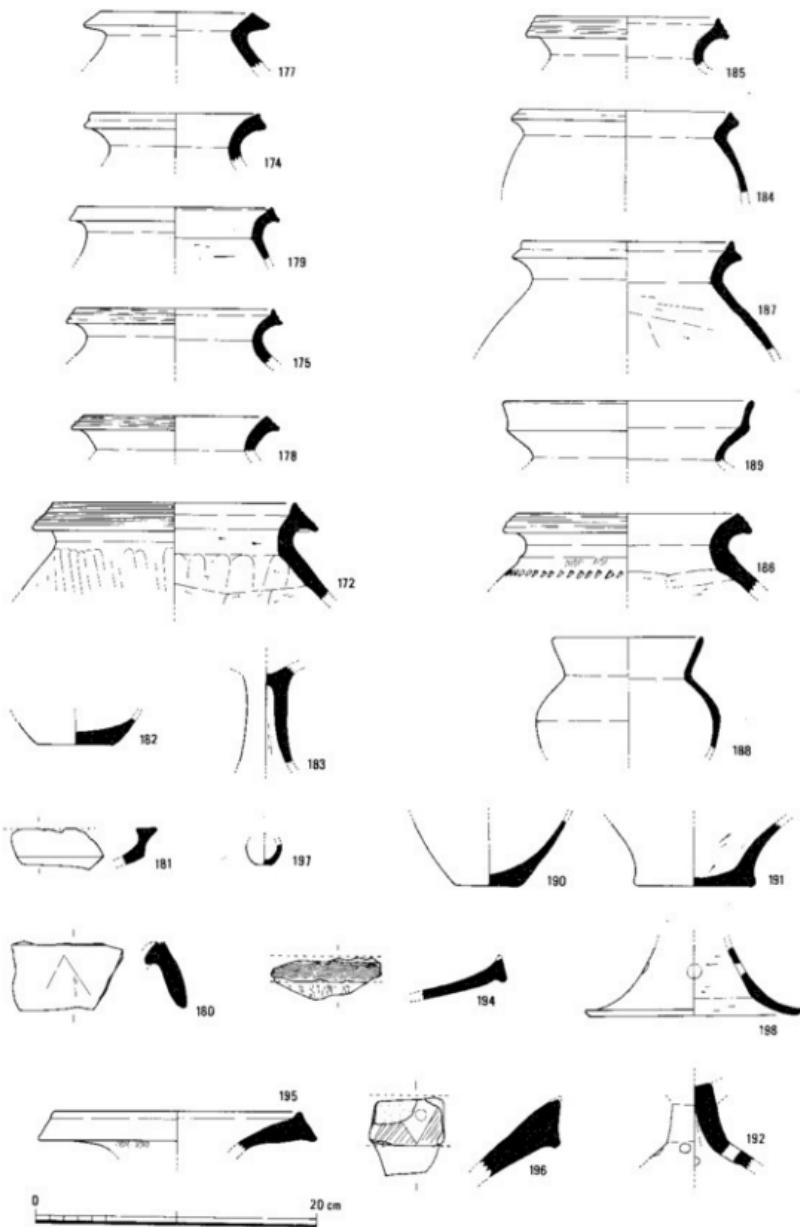


図10 塗穴住居SH146・SH159出土遺物（1:4）（177・174・179・175・178・172・182・183・181・180はSH146、他はSH159）

住居堆積土などからコンテナ2箱分の弥生土器が出土した。185は壺の口頭部破片。口縁部に3条の凹線文がある。堆積土出土。184も壺の口頭部破片。復元口径約15cm。口縁部外面は強いナデのため内湾する。外面に煤が付着する。床面から出土。187は壺の口頭部から胴部にかけての破片。復元口径約15cm。胴部は球形を呈する。口縁部外面は強いナデのため内湾する。胴部外面はヘラ磨き、同内面はヘラ削りの後ヘラ磨きを施す。189は壺の口頭部破片。二重口縁で、外面は強いナデのため内湾する。186は壺の口頭部破片。口縁端部が外方に拡張する。口縁部外面に3条の凹線文がめぐる。肩部に斜方向の列点文がある。口頭部内外面は横ナデ、肩部内面はヘラ削り。188は直口壺の破片。底部を欠く。復元口径10.8cm。復元胴部最大径13.2cm。口縁部は外反しながら立上がる。胴部最大径は上方にある。器壁は薄く胴部で4mm。187以下は堆積土出土。190・191は壺か壺の底部破片。190は底径4.9cm。191は復元底径8.8cm。下端部外面が外湾する。内面はヘラ削り。ともに堆積土出土。198・192は高杯の脚部破片。198は内外面に化粧土をおく。円形の透し孔は4箇所と思われる。外面はヘラ磨き。内面はヘラ削りで端部を横ナデとする。192はハの字状に外反する。その境目に接合痕が認められる。円形の透し孔は4箇所で、外面からあけている。筒部内面に絞り目がみられる。ともに堆積土出土。194・195・196は檻台の口縁部破片。194は口縁部外面に彫描き波状文がある。口縁ぎわ外面が強いナデのため内湾する。内外面とも放射線状のヘラ磨きが施される。内外面とも丹彩。196の口縁部外面には内部を平行線文で充填した鋸歯文と円形文がある。いずれも堆積土出土。197はミニチュア土器。口縁部を欠く。堆積土出土。以上の弥生土器のほとんどがⅠ期に属するのに対し、189の壺と192の高杯のみがⅢないしⅣ期の特徴をもつ。おそらく189と192は後の混入と思われる。よって本住居の時期はⅠ期と考えられる。

S H 169 (図11・12、図版5下) 壱穴住居 S H 169は、S H 159の東南東約38mの丘陵裾部にある。2回の建て替えがある。Aは平面形が隅丸方形で、南北5.07m。東側周溝は流出し、南東隅のそれは土壤21により削られている。検出面（すなわちC床面）から床面までの深さ21cm。周溝は幅約25cm、深さ約7cm。主柱は3・4・5・6の4箇所で、掘形の直径40cm、深さ38~53cm。中央穴1は円形で椀状を呈する。直径約1m。中央穴2に切られる。西と南東方向に幅約20cmの床溝が延びるが、西側のそれは中央穴2に切られる。中央穴1の周囲2m×1.5m程の範囲に灰が付着する。埋積土はB築成時の造成土である。Bは主柱が6本で、7~12の6箇所の柱穴がこれにあたる。掘形直径35~40cm、対応する周溝は判然としない。Cは平面形が円形で、南北約8.5m。検出面から床面までの深さ50cm。周溝は幅約30cm、深さ約10cmで、東半分は削平されている。主柱は8本で、13~20の柱穴がこれにあたる。掘形直径50~60cm、深さ39~51cm。中央穴2は不整円形の椀状を呈する。南北1.05m、東西1.2m。南東部の土壤21・22は近代の墓と思われる。

埋積土、周溝、柱穴などからコンテナ3個分の弥生土器と石器1点が出土した。219・201・

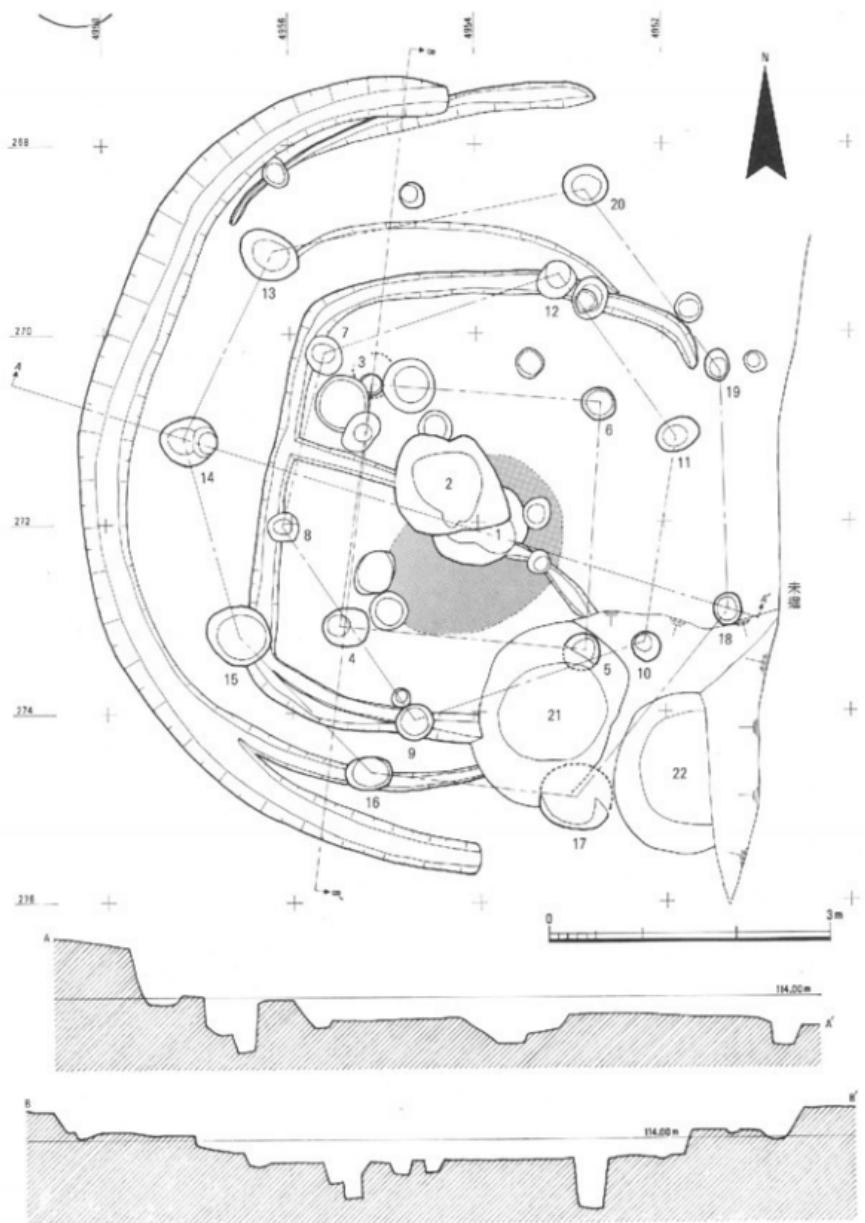


図11 塗穴住居SH169 (1:60)

199・207・200・221は壺の口縁部破片である。219は復元口径12.2cm。口縁端部は丸い。胴部内面はヘラ削り。黒褐色を呈する。中央穴 2 上層埋積土出土。207は復元口径13.6cm。口縁部外面が強いナデのため内汚する。200は甕の口頭部破片。口縁部外面に3条の凹線文とその下に1条の細い沈線がめぐる。209は無頸甕の破片で底部を欠く。形状は判然としないが、ひとまず國のごとく復元した。口縁部外面に1条の凹線文をめぐらし、その直下に孔をうがつ。孔数は不明。肩部には6条の櫛描波状文を描いた後、下端に1条の凹線文を施す。胴部は垂直にたち上がる。胴下半部上端に7条の櫛描波状文を施す。調整技法は外面肩部は縱方向のヘラ磨き、内面肩部は横方向のヘラ磨き、胴部下半は斜方向のヘラ削り。焼成良好。211・214・203・202は壺・甕類の底部破片である。214は復元底径8.5cm。下端部外面がく字状を呈する。調整は下端部外面が横ナデ、底部外面がヘラ削り、内面はヘラ磨き。204は甕の底部破片。復元底径3.2cm。底部に径5mmの穿孔がある。以上の土器は埋積土から出土した。212は高杯の筒部破片。復元筒部最小径4.5cm。外面に数条のヘラ描沈線が3箇所施される。内面は絞り目。外面は丹彩。調整は外面がヘラ磨き、内面脚部がヘラ削り。柱穴14から出土した。217・216・218は高杯の破片。216・218は杯部と脚部の分割成形技法による。216は柱穴19、他は埋積土上出。208は高杯の脚部破片。罐部付近に3箇所の透し孔が穿たれる。215は椀の破片。208とも埋積土出土。205・220・213・206は器台の口縁部破片である。205・206は口縁部外面に内部を平行線文を充填した鋸歯文をめぐらす。ともに埋積土出土。213は2点の破片からなる。口縁部上端付近に1条の凹線文を施し、その後鋸歯文と竹管文を施す。C周溝出土。220は壺の可能性もある。口縁部外面に4条の凹線文を施した後、連続刻目文をめぐらす。埋積土出土。210は器台の脚部破片。外面に1条の凹線文が認められる。C周溝出土。705は石庵丁の破片である。半月形を呈し、幅4.5cm、復元長約10cm、最大厚3mm。両面から穿孔された2か所の孔がある。また1孔に接して貫通しない孔がある。刃部付近の両面に使用痕が認められる。石材はサヌカイト。A床面から出土した。これ以外に、柱穴20から柱状石斧状の自然石が出土した。

以上の遺物のうち、212・220は中期後葉の特徴を示すが、甕・壺類はⅠ期、216・218の高杯は後期の特徴をもつ。よって、S H 169はⅠ期に編年されよう。

S H 33(図12・13、図版6上) 竪穴住居 S H 33は、S H 146の南々東34mの丘陵肩部にある。1回の建替えがある。Aは円形で対応する周溝は判然としないが、およそ南北6mである。東端部は流失している。主柱は4本で、柱穴2-5がこれにあたる。柱掘形直徑25~40cm、深さは2が73cmと深く、他は39~43cm。柱間は2と3が3.7m、4と5が4.1m、2と5が2.6m、3と4が2.3mと、南北方向が著しく長い。中央穴1は楕円形で柱穴状である。長径60cm、深さ56cm。Bは円形で南北約7.2m。周溝は幅約20cm、深さ約10cm。東側は流出している。主柱は現状で6か所、本来は8か所と推定される。柱掘形直徑35~50cm、深さは柱穴6が22cmと浅く、柱穴10が64cmと深い。他は40~51cmである。中央穴は1を踏襲すると思われる。

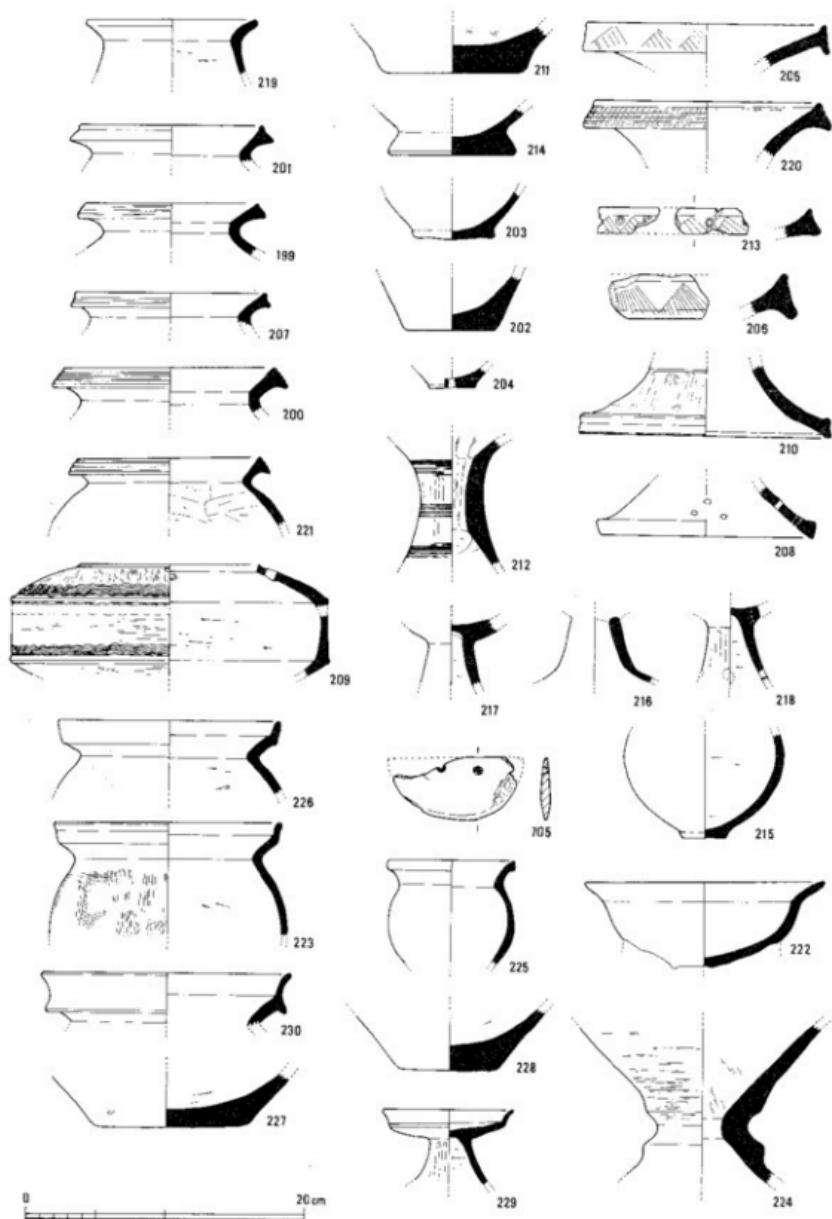


図12 整穴住居SH169・SH33・SH41出土遺物 (1:4) (223・225・222・224はSH33, 226・230・227・228・229はSH41, 他はSH169)

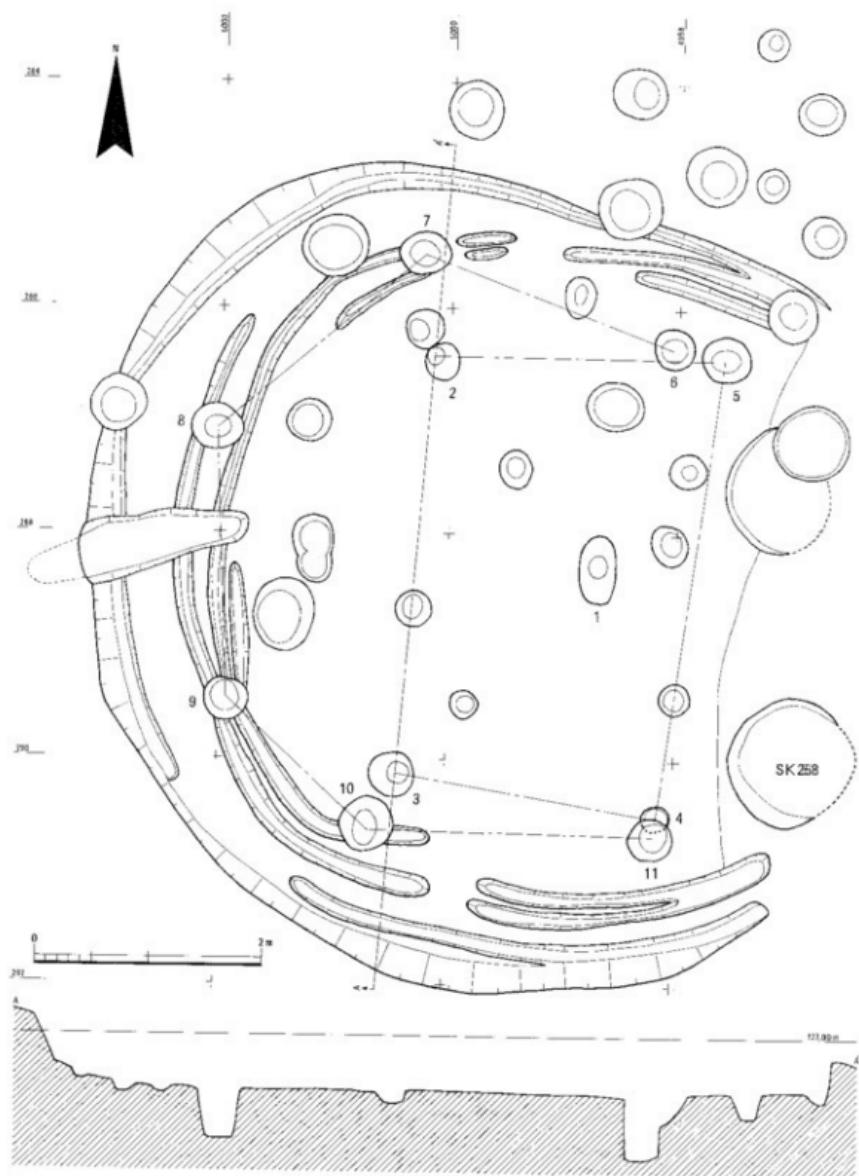


図13 塗穴住居SH33 (1:50)

埋積土などからコンテナ1箱分の弥生土器が出土した。223は壺の上半部破片である。復元口径約16cm、同胴部最大径約17cm。二重口縁でやや外反する。胴部はあまり張らない。胴部外面は縱方向の刷毛目、同内面はヘラ削り。外面に煤が付着する。225は小形の鉢の破片である。底部を欠く。口縁部下端を少し拡張させる。外面に丹彩の痕跡がある。222は器種不明。口縁部径16.8cm。屈曲しながら外反する。底部に径8cmと5cm程の2箇所の刺離痕がある。224は放形器台。上・下端部を欠く。くびれ部最小径6.4cm。くびれ部厚1.9cmと非常に厚手である。外面は横方向のヘラ磨き、立上がり部・くびれ部の内面はヘラ磨き、脚部内面はヘラ削り。外面全面と立上がり部内面に丹が塗られる。以上の土器はⅣ期に編年される。

S H 41 (図12・14、図版6下) 積穴住居 S H41は、S H33の南約11mの丘陵東脣部にある。平面形は隅丸長方形で、南北7.3m、検出面から床面までの深さ71cmを測る。周溝はU字形で、西側は拡張のため2重となり、東側は流失している。幅約15cm、深さ約5cm。主柱は1か所で、柱穴掘形直徑25~35cm、深さ60~68cm。中央穴は梢円形で柱穴状を呈する。長径15cm、短径35cm、深さ58cm。その周囲約1.7mの範囲の床面に灰が付着する。

埋積土などから、コンテナ1箱分の弥生土器が出土した。226は壺の口頭部破片である。復元口径約16cm。口縁部は二重口縁でやや外反しながら立上がる。胴部内面はヘラ削り。口縁部内外面に丹彩の痕跡がある。230は壺の口縁部破片。二重口縁で外湾しながら立上がる。屈曲部が下方に拡張する。内外面とも丹彩。227は壺の底部破片。復元底径約11cm。明瞭な平底を呈する。底部外面の一部に煤が付着する。内面には丹彩の痕跡がある。228は壺・壺の底部破片。底径7.4cm。平底を呈する。外面は刷毛目のちヘラ磨き、内面はヘラ削りを施す。229は高杯である。脚端部を欠く。口径9.3cmと小形である。杯部は屈曲しながら外湾する。外面に1条の沈線がめぐる。杯部と脚部は分割成形による。杯部上半部外面は横ナデ、同下半部外面はヘラ磨き、同内面は同心円文状の横ナデ、脚部外面は縱の刷毛目のちヘラ磨き、同内面は横のヘラ削りである。以上の土器は口縁部や底部の特徴からⅣ期に編年される。

S H 39 (図15・16、図版7上) 積穴住居 S H39は、S H41の南西約25mの丘陵西脣部にある。平面形は円形で、南北約8.5m。検出面から床面までの深さ38cmを測るが、床面の西側約3分の1は流出する。5基の貯蔵穴 S C 35・S C 36・S C 37・S C 38・S C 83と切合い関係にあり、S C 83との関係が不明の他はすべて貯蔵穴の方が新しい。周溝はU字形で幅約15cm、深さ5~8cm。主柱は8か所と思われる。柱穴掘形直徑35~50cm、深さ23~43cm。中央穴は円形で擂鉢状を呈する。直徑約80cm、深さ44cm。中央穴に南接して東西約1.3m、南北約40cmの灰付着面がある。また中央穴の北々西約1.9mに径20cm程の焼土面がある。

埋積土、周溝、中央穴などからコンテナ2箱分の弥生土器が出土した。233は壺のほぼ完形個体である。復元口径約18cm、復元胴部最大径約36cm、復元高約31cm。口縁部外面に2条の浅い凹線がめぐり、その上に円形浮文を張りつける。肩は大きく張り、その肩部に2条、頸部に

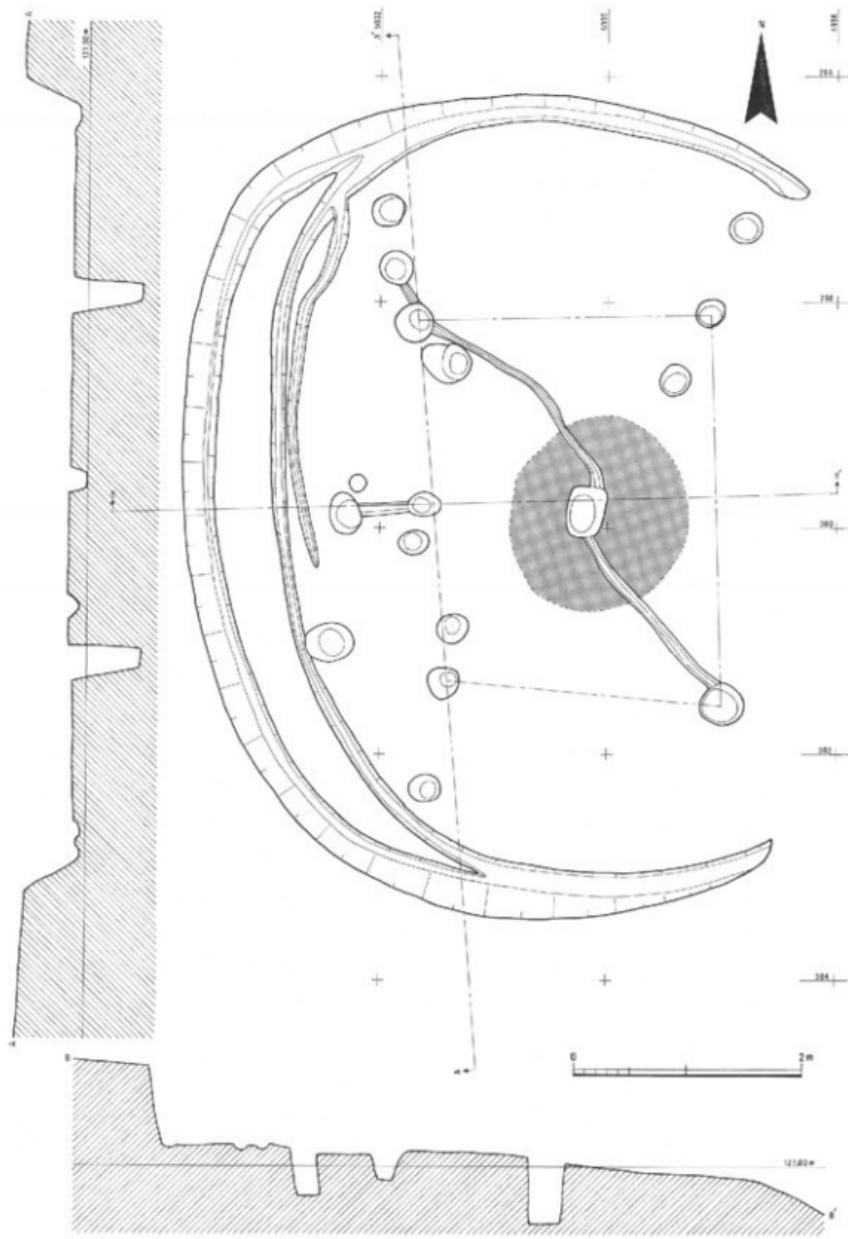


图14 壁穴住居SH41 (1:50)

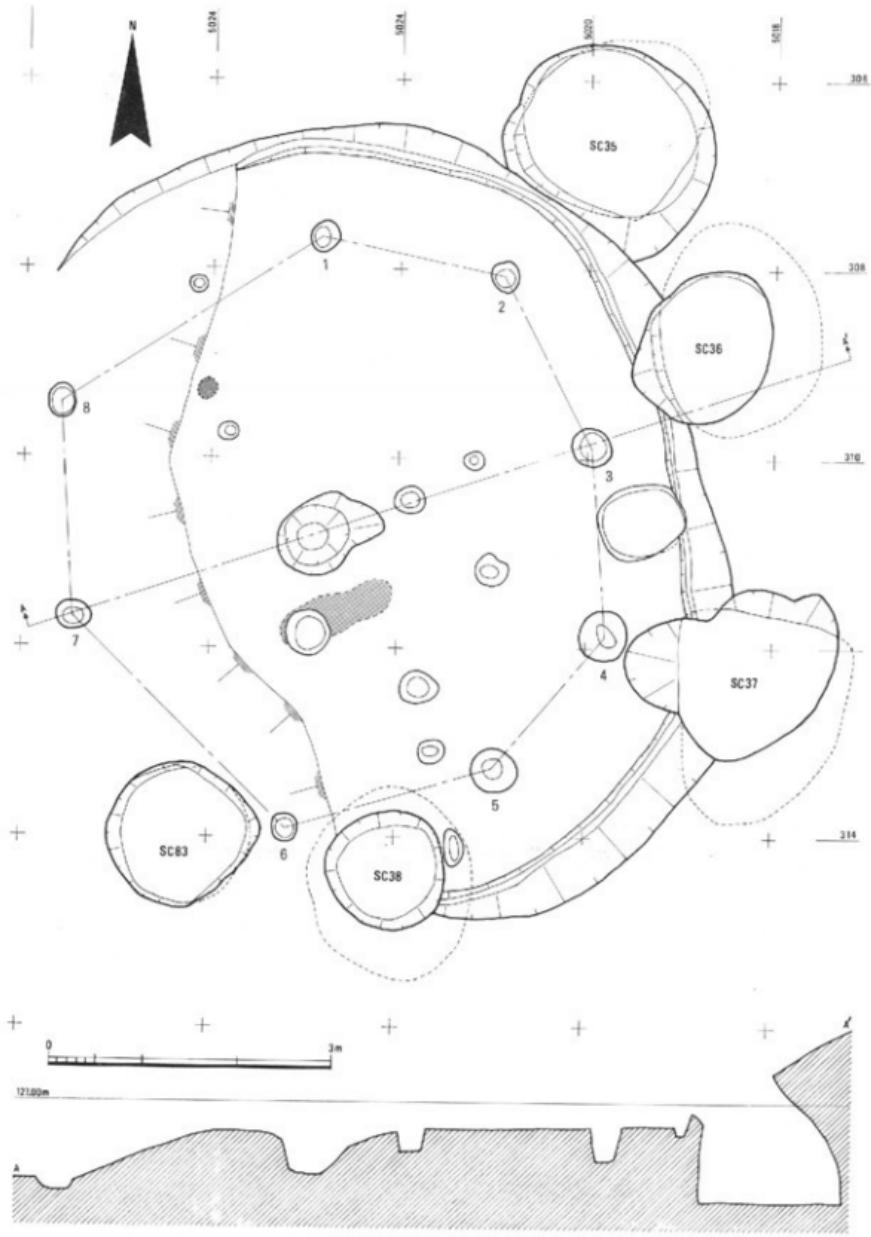


図15 塗穴住居SH39 (1:60)

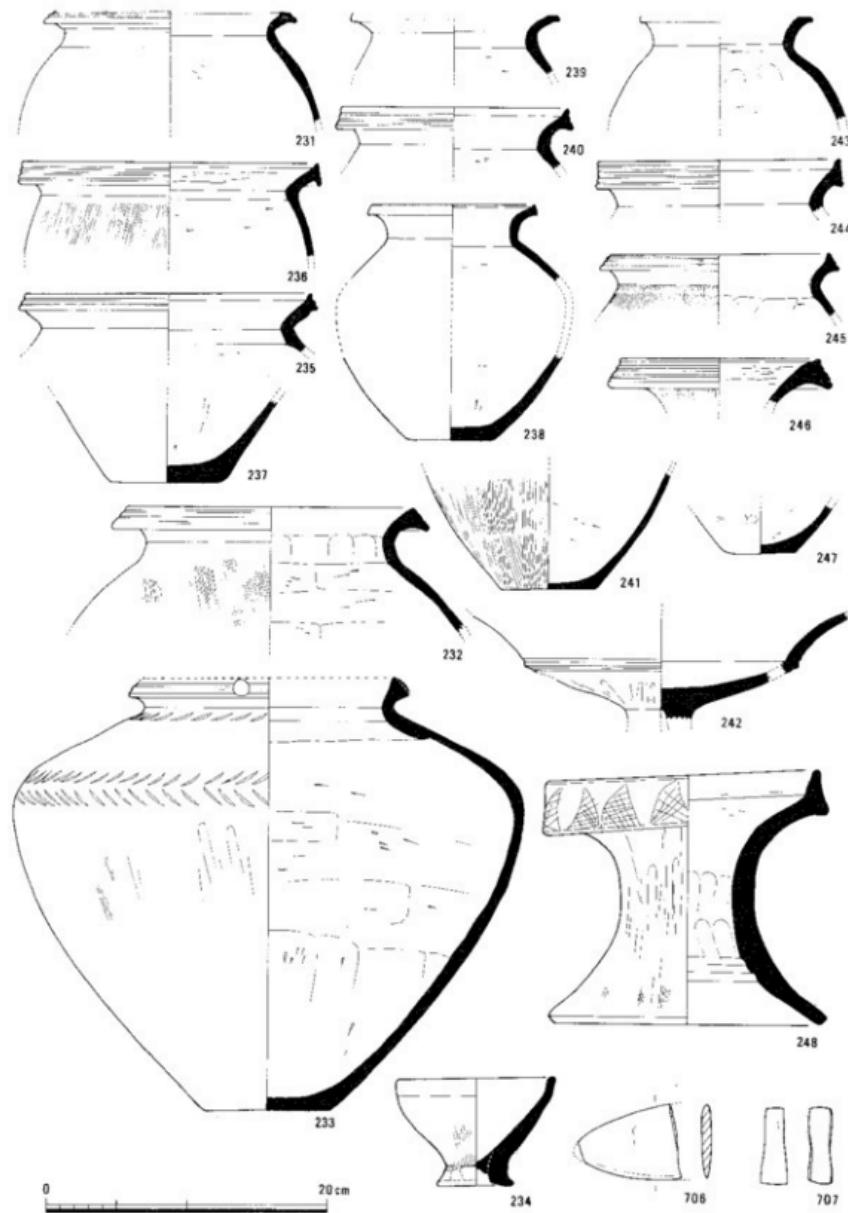


図16 堪穴住居SH39・SH29・SH74出土遺物（1:4）（239・240・238・241・242・707はSH29, 243・244・245・246・247・248はSH74, 他はSH39）

1条の列点文をめぐらす。胸部外面はヘラ磨き、同内面はヘラ削りで、一部刷毛目を施す。胎土は1~3mmの白色砂粒を多く含み、明黄褐色を呈する。柱穴上面より出土した。232は壺の破片である。口縁端部を下方に拡張する。口縁部外面に3条の凹線文がめぐる。中央穴上面より出土した。231・236・235は甕の破片である。231は口縁部外面に3条の凹線文がめぐる。胸部外面はヘラ磨き。胸部外面に煤が付着する。中央穴埋積土より出土。236は口径20.8cm。口縁部外面は横ナデによる浅い凹線風の凹凸がめぐる。胸部外面は刷毛目、同内面はヘラ削り。235は口縁部外面に2条の凹線文がめぐる。237は壺ないし甕の底部破片。東周溝出土。234は椀のはば完成品である。復元口径約11cm、器高7.7cm。厚手である。高台は連続成形、底は円盤充填による。外面は刷毛目のちヘラ磨き、内面はヘラ磨き。北周溝出土。石器は石庖丁、石剣各1点が出土した。706は石庖丁で、幅5.4cm、最大厚6mm。材質は白雲母石英片岩。石剣(708、図版40右上)は握部の破片で磨製。材質は粘板岩。以上の遺物はI期に編年される。

S H 29 (図16・17、図版7下) 壁穴住居S H 29は、S H 39の南東約14mの丘陵頂部にある。平面形は隅丸方形で西端は削られている。一辺約4.6mで、検出面から床面までの深さ52cmを測る。周溝は幅約15cm、深さ約4cmで、西側周溝は残存しない。主柱は4か所で、柱掘形の直径30~40cm、深さは北側隅が24cm、他は11~13cmと非常に浅い。中央穴は下半が柱状、上半はラッパ状を呈す。上面径約60cm、深さ38cm。中央穴から3方向に幅約10cm、深さ約5cmの床溝がのびる。中央穴の周囲約1.2×0.7mの範囲に灰が付着する。

出土遺物は弥生土器コンテナ1箱分、石器1個である。238は壺である。胴中央部を欠く。口径11.6cm。胴部外面はヘラ磨き、同内面はヘラ削り。239・240は甕の破片である。239は復元口径約14cm。調整は口頭部外面が横ナデ、同内面がヘラ磨き、胴部外面が斜め方向の刷毛目のちヘラ磨き、同内面がヘラ削りである。240は口縁部外面に3条の凹線文がめぐる。胸部内面はヘラ削り。外面に煤が付着する。241は甕の底部破片である。胴及び底部外面は刷毛目、同内面はヘラ削りが施される。外面に煤が付着する。242は高杯の杯部破片。屈曲しながら大きく外反する。屈曲部に2条の凹線文がめぐる。調整は内外面ともヘラ磨き。内外面ともに丹彩。707は砥石である。長さ5.6cm、幅1.9cm、厚さ1.6cm。5面がよく磨かれている。端部に貫通しない穿孔がある。材質は流紋岩。以上の遺物はII期に編年されよう。

S H 74 (図16・18、図版8下) 壁穴住居S H 74は、S H 39の南西約36mの丘陵西斜面にある。平面形は隅丸方形で、南西部は削られている。獨立柱建物SB 101と切合い関係にあり、S H 74が新しい。一辺4.85m、検出面から床面までの深さ52cmを測る。周溝は断面U字形で、幅約12cm、深さ約6cm。柱穴は4箇所で、四隅にある。掘形の直径30~35cm、深さ60~70cm。南隅柱穴で直径約20cmの柱痕跡を検出した。中央穴は柱穴状を呈す。長径約60cm、短径約50cm、深さ52cm。内部には灰と炭が充満する。周囲に幅20~35cmの土堤状の盛土がある。中央穴の周囲約2mの範囲に灰が付着する。

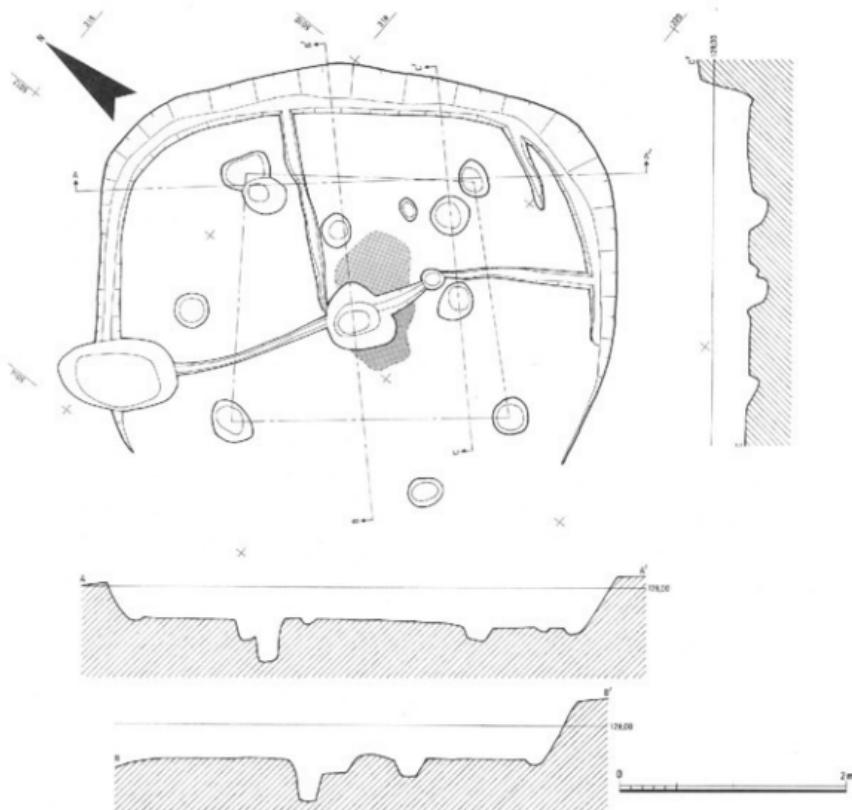


図17 壁穴住居SH29 (1:50)

出土遺物はコンテナ2箱分の弥生土器、砾石2個である。243は壺の上半部である。口縁部は単純で、胴部は球状を呈すると思われる。調整は口頭部内外面は横ナデ、胴部外面は刷毛目、同内面は指頭圧痕とヘラ削り。外面に煤が付着する。244・245は壺の口頭部である。244は口縁端部を若干上方に拡張する。口縁部外面に4条の凹線文がめぐる。245は復元径約16cm。口縁部外面に3条の凹線文がめぐる。胴部外面は刷毛目、同内面はヘラ削り。外面に煤が付着する。246は壺の口縁部と思われる。口縁端部が下方に拡張する。口縁部外面に4条の明瞭な凹線文がめぐる。248は器台のほぼ完形個体である。口径19.3cm、胴部最小径9.3cm、底径19.4cm、器高18.3cmを測る。口縁端部上面が垂直に立上がる。口縁部外面に内部を格子目文でうめた粗雑な15個の鋸歯文がめぐる。外面全面と杯部内面はヘラ磨き、筒部内面はヘラ削り、脚部内面は横ナデである。内外全面に丹が塗られる。中央穴北を東約90cmの床面上から横転した状態で出土した。以上の遺物は244の壺の特徴からⅡ期に編年されよう。

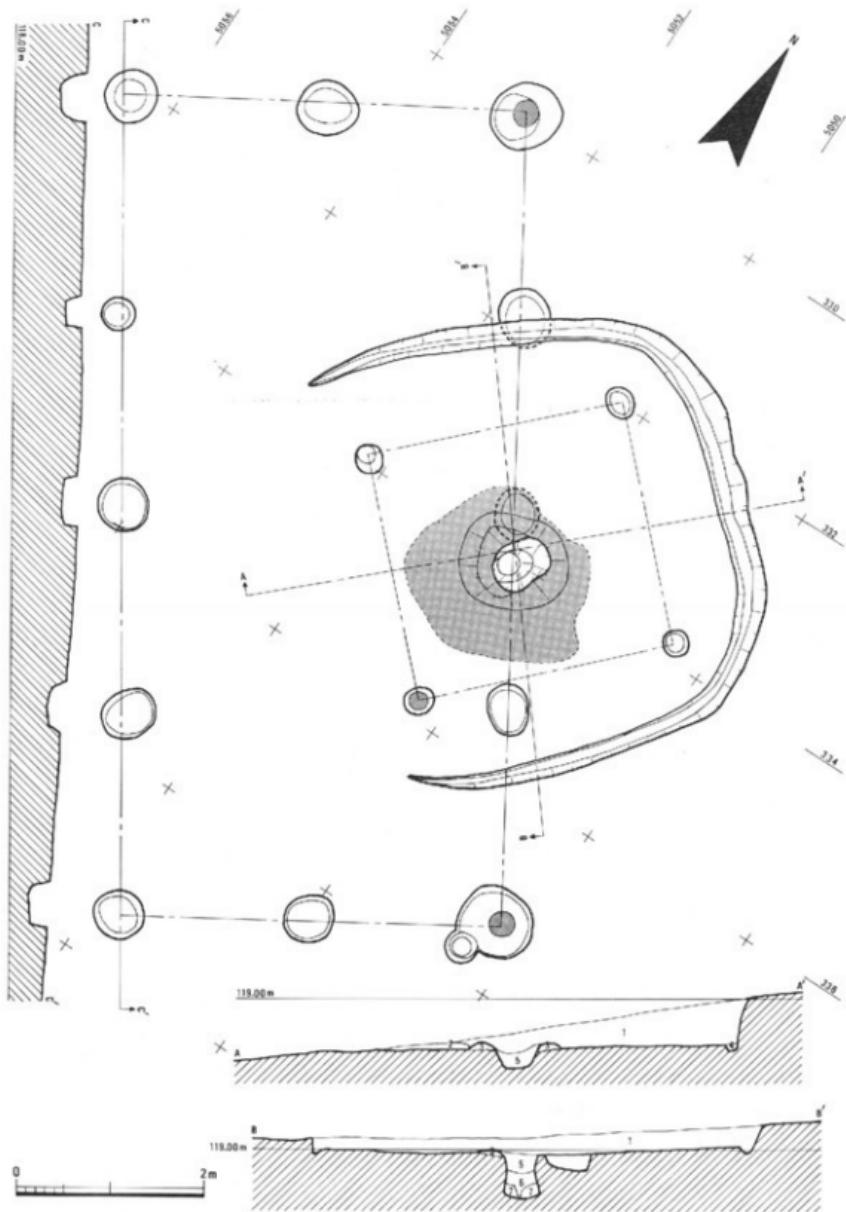


図18 整穴住居SH74・据立柱建物SB101 (1:60)

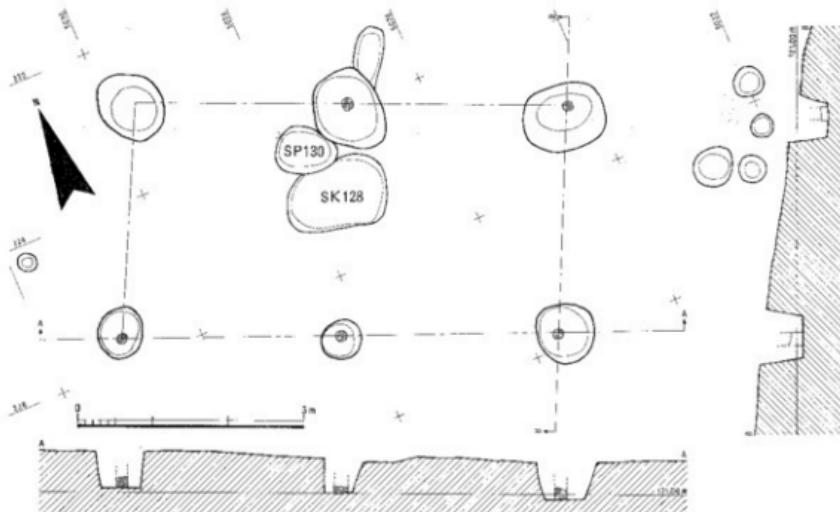


図19 挖立柱建物SB127 (1:75)

B 挖立柱建物

掘立柱建物は、丘陵頂部に3棟、西斜面に1棟、計4棟が検出された。これらの遺構は高床倉庫と推定される。

SB127 (図19、図版9下) 掘立柱建物 S B127は、S H124の北約14mの丘陵北肩部にある。桁行2間、梁間1間。柱間は北側柱筋が西から2.82m、2.92m、南側柱筋が西から2.91m、2.91m、西妻が3.13m、東妻が2.99mである。柱穴掘形は北西隅柱が 1.04×80 cmの楕円形で、深さ62cm。北中柱が 1.1×90 cm、深さ48cm。北東隅柱が 1.1×90 cm、深さ50cm。南西隅柱が 70×60 cmのほぼ円形で、深さ50cm。南中柱が 55×50 cm、深さ46cm。南東隅柱が直径80cm、深さ50cmである。北西隅を除くすべての柱穴で直径15cm程の柱痕跡を検出した。北西隅柱掘形から弥生土器数10点、南辺中央柱掘形から弥生土器10点数点が出土した。前者には壺・甕類の底部破片・高杯の杯部破片、後者には甕の口頭部破片がある。これは大形の丹彩品である。これらの時期は断言できないがⅡ期ではないかと思われる。北中柱に南接する柱穴 S P130から弥生土器数点、それに南接する土坑 S K128から弥生土器数10点が出土した。後者にはほぼ丸形の壺と甕の口頭部破片を含む。時期はⅠ期と思われる。

SB281 (図20) 掘立柱建物 S B281は、S B127の南々東約78mの丘陵稜線上にある。古墳SM3墳丘の下層で検出された。桁行・梁間各1間の東西棟である。西側の柱穴に建て替えによる重複があるが、切合い関係は不明。規模の小さいAの柱間は、北辺が3.34m、南辺が3.36m、東辺が2.04m、西辺が2.11mである。Bの柱間は、東辺がAと同じで、北辺が3.49m、

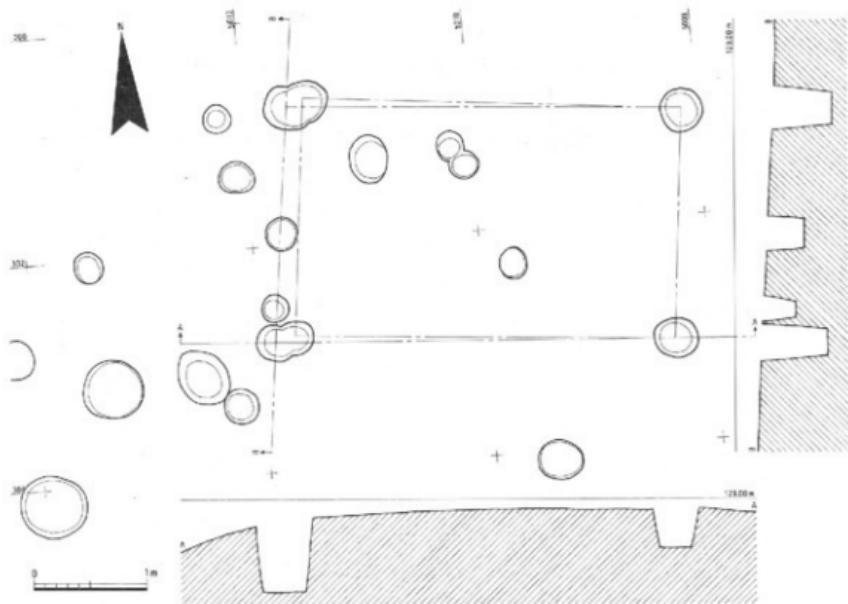


図20 掘立柱建物SB281 (1:50)

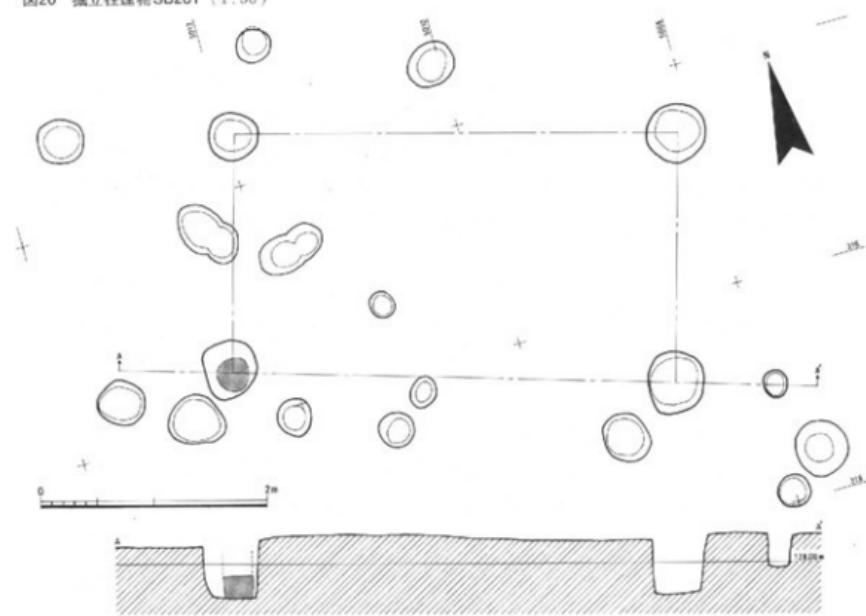


図21 掘立柱建物SB84 (1:50)

南辺が3.54m、西辺が2.09mである。柱掘形は直径30~40cm、深さは北西柱が58cm、南西柱が67cm、北東柱が30cm、南東柱が35cmである。Bの西辺ほぼ中央に1個の柱穴があるが、Bと無関係と思われる。周辺にも多数の柱穴が検出されたが、他に建物を確認しなかった。出土遺物はないが、古墳の下層にあるので、弥生時代の遺構と判断した。

S B 84 (図21) 掘立柱建物 S B84は、S B281の南約13mの丘陵稜線上にある。東西棟だが、短辺は北で東に少し偏する。桁行・梁間とも1間。柱間は北辺が3.92m、南辺が3.92m、東辺が2.21m、西辺が2.11mである。柱掘形は直径約50cm、深さ52~63cm。南西柱穴で直径約30cmの柱痕跡を検出した。周辺にも多数の柱穴が検出されたが、他に建物を確認しなかった。出土遺物はないが、弥生時代の遺構と推定した。

S B 101 (図18、図版9上) 掘立柱建物 S B101は、S B84の南西約46mの丘陵西斜面にある。桁行4間、梁間2間。東側柱北第2・第3・第4柱穴が、堅穴住居 S H74と切合い関係にあり、それより古い。桁行8.7m、梁間は北妻が4.3m、南妻が4.0m。柱掘形直径は西側柱北第2柱穴が35cmと小さい他は、50~80cm、同深さは13~47cmを測る。東側柱の北第1及び第5柱穴で直径25cmの柱痕跡を検出した。柱間は正確には計測できないが、桁行・梁間ともおおむね2.0~2.2mである。ただし西側柱の北第1間が2.4m、同第2間が1.8mとなっている。出土遺物はないが、II期に編年される S H74に先行するので、本建物の時期はIないしII期と考えられよう。

C 貯蔵穴

貯蔵穴は47基検出された。これらは2群にわかれれる。北群はS H146とS H33の間の丘陵頂部に38基が密集し、南群はS H39付近の丘陵西肩部から西斜面に9基が散在する。

S C 13 (図22) 貯蔵穴 S C 13は北群最北の丘陵稜線上にある。古墳 S M 6 西周溝の下層で検出された。平面形は円形で、内部は袋状を呈する。最大径は底のやや上方にある。上面最大径1.25m、底部最大径1.45m、深さ1.08m。埋積土から弥生土器甌の破片が出土した。時期は不明。

S C 238 (図22) 貯蔵穴 S C 238は、S C 13の東約1.9mにある。古墳 S M 6 西周溝内の箱式石棺の下層で検出された。円形で袋状を呈す。上面径1.35m、底径1.4m、深さ80cm。埋積土から弥生土器甌の破片が出土した。口縁部外面に4条の凹線文がめぐり、底部に焼成前の穿孔がある。時期はI期と思われる。

S C 114 (図22・23、図版10下) 貯蔵穴 S C 114は、S C 13の南西2.4mにある。円形で袋状を呈す。最大径は底のやや上方、最小径は上面やや下方にある。最大径1.03m、最小径95cm、深さ1.1m。内部からコンテナ4箱分の弥生土器が一括状態で出土した。253は大形の壺の口頭部である。口径31.5cm。口縁部は二重で大きく外反する。口縁部外面に直径21~26cmの円形浮文を2個ずつ対、計12個貼りつける。円形浮文の中心には竹管文を印す。円形浮文の間に

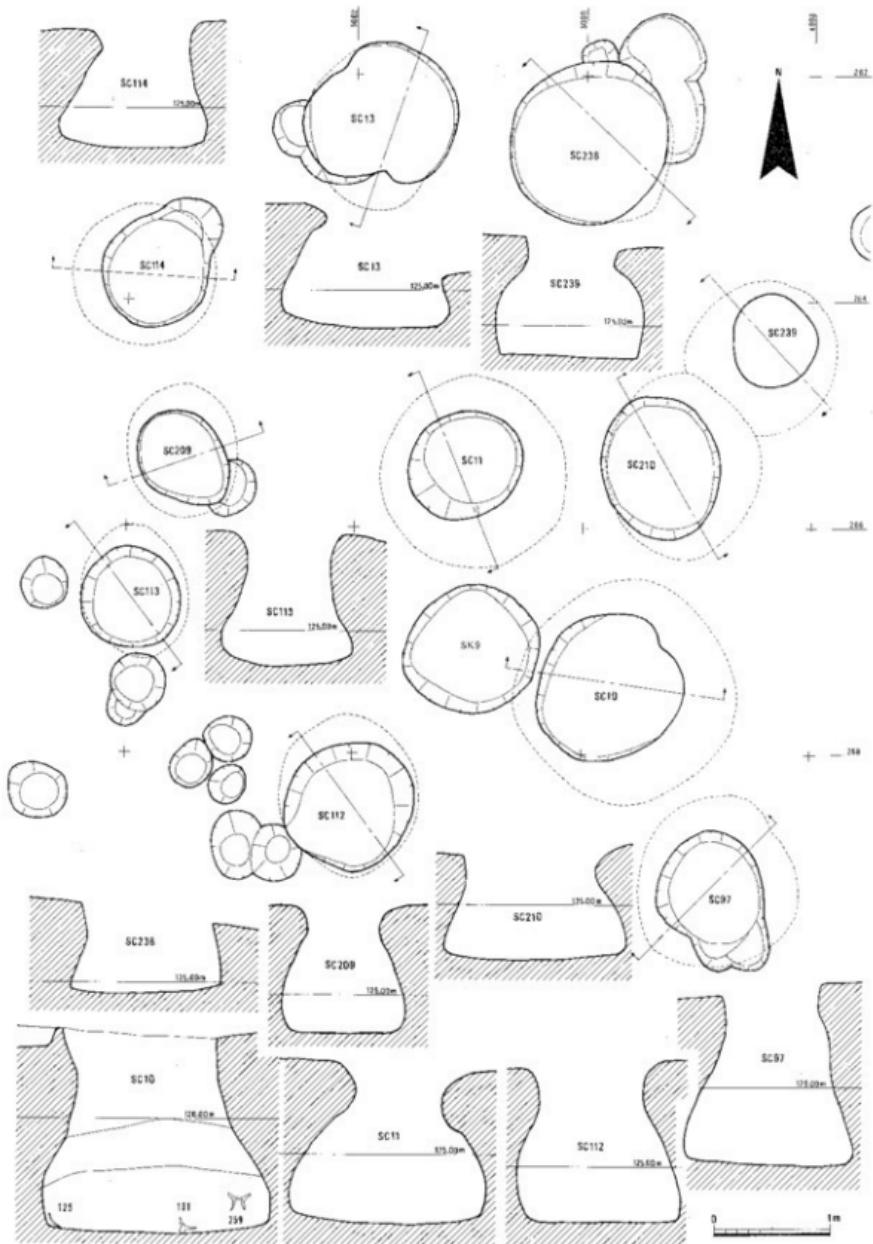


図22 貯蔵穴SC13・SC238・SC114・SC239・SC209・SC11・SC210・SC113・SC10・SC112・SC97・土坑SK9 (1・50)

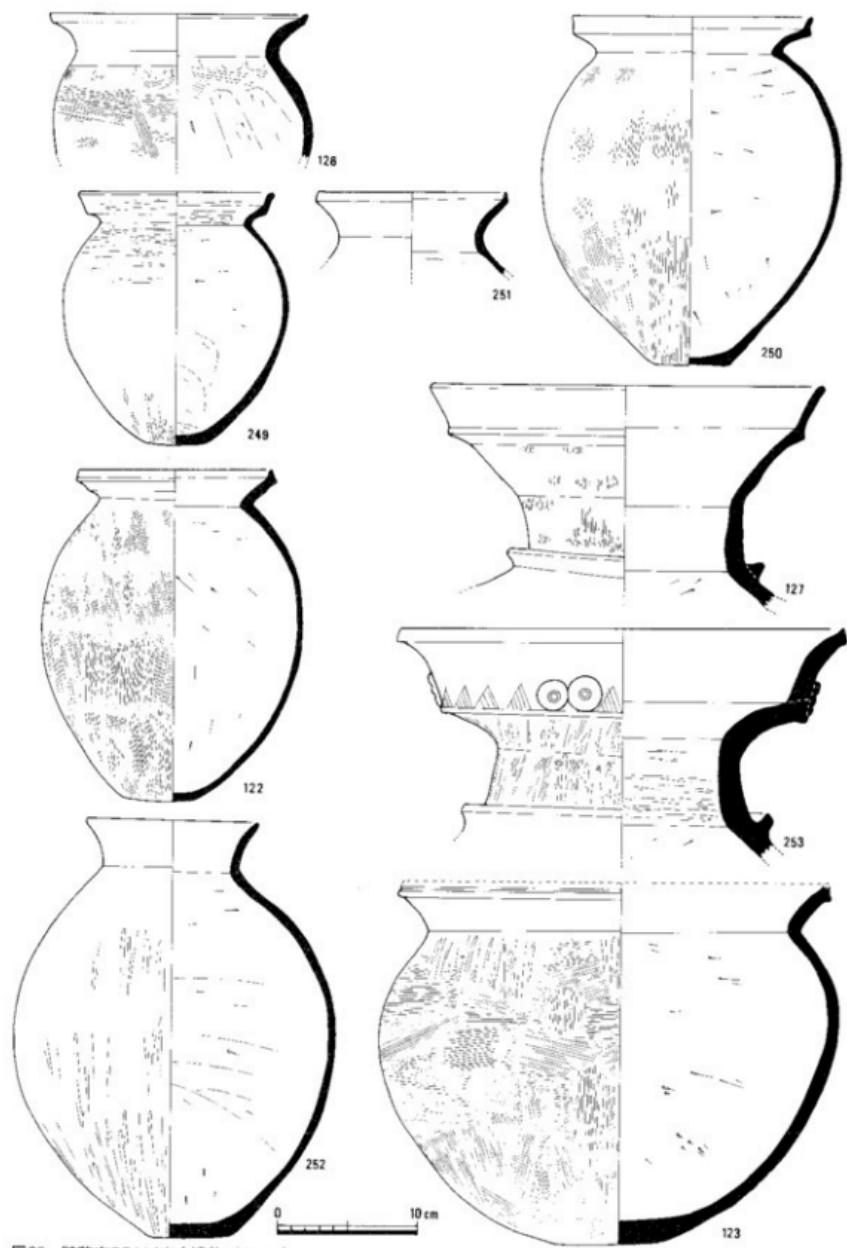


图23 考古SC114出土遗物 (1:4)

は、内部を平行線文で充填した3~4個の鋸歯文をめぐらす。頭部と胴部の境界部に突帯をめぐらす。突帯は連続成形による。胴部は現存しないが、球状と呈するものと思われる。調整は口縁部内外面はヘラ磨き、頭部外面は刷毛目のちヘラ磨き、同内面はヘラ磨き、突帯部は横ナデである。内外面とも丹彩。胎土は1~4cmの白色砂粒を多く含み、黄褐色を呈す。127も大形の壺の口頸部である。復元口径約28cm。口頸部は二重で大きく外反するが、屈曲度は253より弱い。頭部と胴部の境界部に断面三角形の貼付け突帯をめぐらす。胴部は現存しないが球状を呈するものと思われる。調整は、口縁部外面が横ナデ、頭部外面が刷毛目のちヘラ磨き、同内面がヘラ磨き、胴部内面がヘラ削りである。胎土は1~3cmの白・黒色砂粒を多く含み、黄褐色を呈す。250は壺のほぼ完形品である。復元口径約17cm。復元胴部最大径約21cm、底径5.4cm、復元高約25cm。口縁部は小さい二重口縁である。胴はあまり張らず、最大径は中央付近にある。底は平底。口縁部外面は横ナデ、胴部外面は刷毛目、同内面は横方向のヘラ削りである。外面全面と内面底部付近に煤が付着する。249は壺の破片だが、ほぼ完形に復元しうる。復元口径約13.5cm、復元胴部最大径約16cm、底径4.0cm、復元高約18cm。口縁部は二重で少し外反して立上がる。口縁部外面に5~6条の沈線がめぐる。胴部最大径は中央にあり、底は丸底に近い半底である。調整は胴部外面上半と口頸部内面がヘラ磨き、胴部外向下半が刷毛目、胴部内面は横方向のヘラ削りである。外面上半部と口頸部内面に舟が塗られ、外面全面に煤が付着する。251は壺の口頸部である。口径13.2cm。口縁端部を上方にわずかに拡張させる。口頸部外面は横ナデ、胴部内面は横方向のヘラ削りが施される。以上の土器は一括状態で出土した。

122は壺で完形に復元しうる。口径13.7cm、復元胴部最大径約18.5cm、底径5.2cm、復元高約24cm。口縁端部は上方に少し拡張する。胴はあまり張らず、その最大径は中央にある。底は平底である。調整技法は、口頸部内外面が横ナデ、胴及び底部外面が刷毛目、同内面が斜めないし縦方向のヘラ削りである。外面全面に煤が付着する。252は壺のほぼ完形個体である。口径11.9cm、胴部最大径22.6cm、器高30.0cm。口縁部は外反しながら立上がる。胴部は玉子状を呈し、最大径は中央にある。底は平底である。調整技法は胴部外面がヘラ磨き、同内面上半が横方向のヘラ削り、同下半が斜めないし縦方向のヘラ削りである。126は壺の上半部である。口径18.6cm、胴部最大径18.4cm。胴部最大径は上位にある。調整技法は口頸部外面が横ナデ、胴部外面が不定方向の刷毛目、同内面が縦方向のヘラ削りで上端に横方向の刷毛目がみられる。外面に煤が付着する。123は大型の鉢で、ほぼ完形に復元しうる。復元口径約30cm、胴部最大径32.6cm、器高25.6cm。口頸部はく字状を呈し、口縁端部が上下にわずかに拡張する。口縁部外面に4条の沈線がめぐる。底は平底である。調整技法は口頸部内外面がヘラ磨き、胴部外面上半が横方向の刷毛目のちヘラ磨き、同下半が横ないし縦方向の刷毛目、胴部内面が横方向のヘラ削りである。外面全面と口頸部内面に舟が塗られる。胴部外面の一部と同内面の大部分に

煤が付着する。以上の土器はⅣ期に編年される。

S C 209 (図22) 貯蔵穴 S C 209は、S C 114の南1.7mにある。梢円形で袋状を呈す。最大径は底から24cm上、最小径は上面から24cm下にある。上面長径95cm、同短径75cm、底長径1.2m、同短径1.0m、深い1.1m。朴穴と重複するが切合い関係不明。出土遺物はない。

S C 111 (図22) 貯蔵穴 S C 111は、S C 209の東2.6mにある。円形で袋状を呈す。最大径は底の上31cm、最小径は上面の下25cmにある。上部最小径80cm、底部最大径1.7m、深さ1.4m。出土遺物はない。

S C 210 (図22) 貯蔵穴 S C 210は、S C 111の東1.65mにある。梢円形で袋状である。最小径は上面の下2.2m、最大径は底面の上10cmにある。上部最小長径1.1m、同短径95cm、底部最大長径1.7m、同短径1.4m、深さ1.0m。埋積上から弥生土器10数片が出士した。時期は不明。

S C 239 (図22) 貯蔵穴 S C 239は、S C 210の北東1.5mにある。円形で袋状である。最小径は上面の下18cm、最大径は底面の上37cmにある。上部最小径75cm、底部最大径1.3m、深さ1.05m。底部はS C 210と重複するが、切合い関係は不明。埋積上から弥生土器数10片が出士した。Ⅱ期と思われる。

S C 113 (図22・24) 貯蔵穴 S C 113は、S C 209の南1.3mにある。円形で袋状である。最小径は上面の下28cm、最大径は底面の上25cmにある。上部最大径70cm、底部最大径1.2m、深さ1.2m。

内部からコンテナ1箱分の弥生土器が出土した。263は壺の上半部破片である。復元胴部最大径約18cm。二重口縁で端部が上下に拡張する。口縁部外側に7条の沈線がめぐる。胴部最大径は中央にあると思われる。調整技法は口縁部内面と胴部外側がヘラ磨き、胴部内面がヘラ削りである。器壁は4mmと薄い。外面と口縁部内面に丹彩、外面に煤が付着する。107は壺である。底部を除きほぼ完形に復元される。口径13.5cm、復元胴部最大径約20cm。口縁端部は屈曲して小さく立ち上がる。胴部最大径は中央にある。調整技法は口頭部内外面が横ナデ、胴部外側が刷毛目、内面が横方向のヘラ削りである。外面に煤が付着する。106は高杯のほぼ完形個体である。口径11.4cm、脚端部径13.1cm、脚筒部径3.8cm、器高10.2cm。杯部は屈曲し外反しながら立ち上がる。脚部も屈曲し端部がハ字状に大きく拡がる。脚下半部に4箇所の透し孔がある。105・264は蓋である。105はほぼ完形個体。底部径11.3cm、つまみ部径4.0cm、器高4.6cm。つまみ部は内湾する。264は破片。つまみ部径4.0cm。調整技法は脚部内面は刷毛目、つまみ部外側はヘラ磨き。外面は丹彩。104は鼓形器台のほぼ完形個体だが、脚端部を欠く。立ち上がり部口径15.7cm、くびれ部最小径7.8cm、くびれ部幅4.5cmとくびれ部幅が広い。調整技法は脚部内面が横方向のヘラ削り、他はヘラ磨きである。脚部内面を除く全面に丹が塗られる。胎土には1~5mmの白ないし褐色砂粒を多く含み、暗褐色を呈する。以上の土器はⅣ期に編年される。

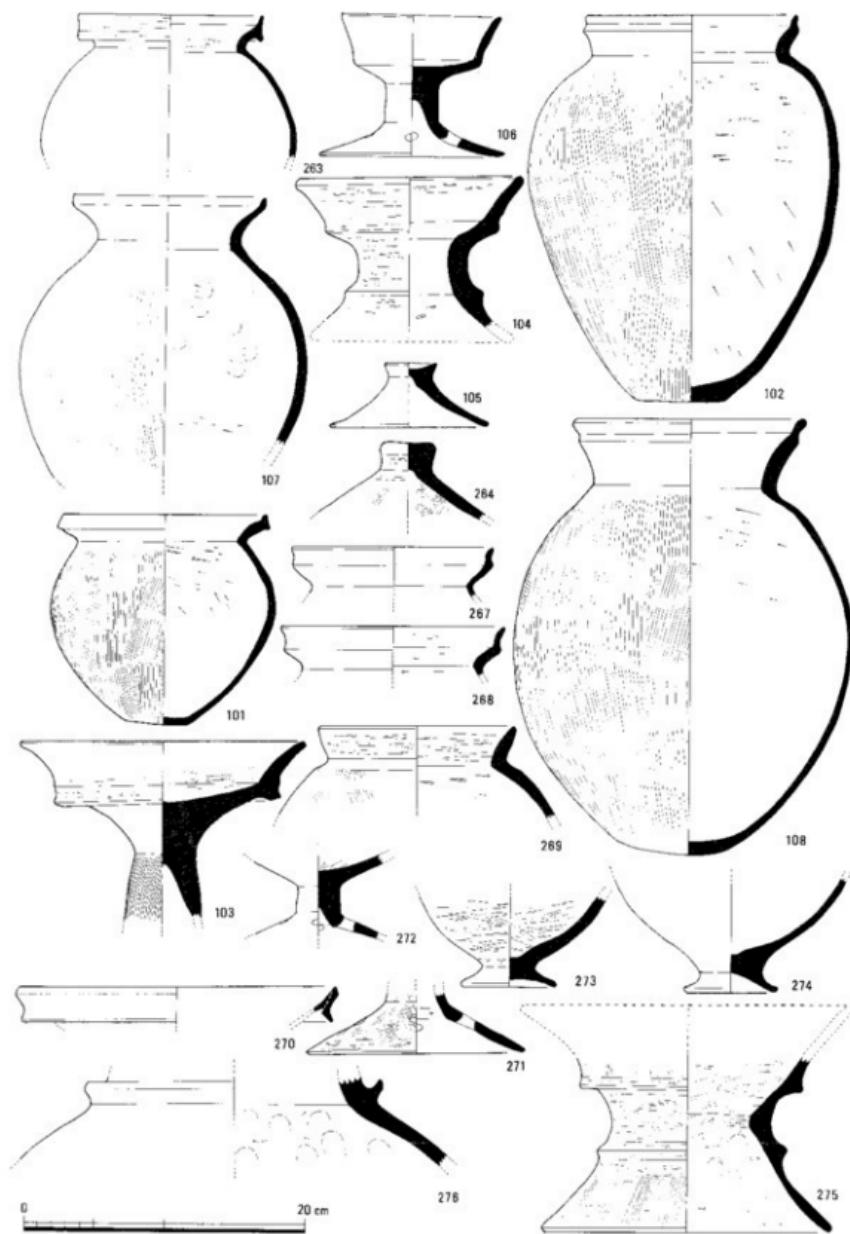


図24 貯藏穴SC113・SC15出土遺物（1:4）（263・107・106・104・105・264はSC113、他はSC15）

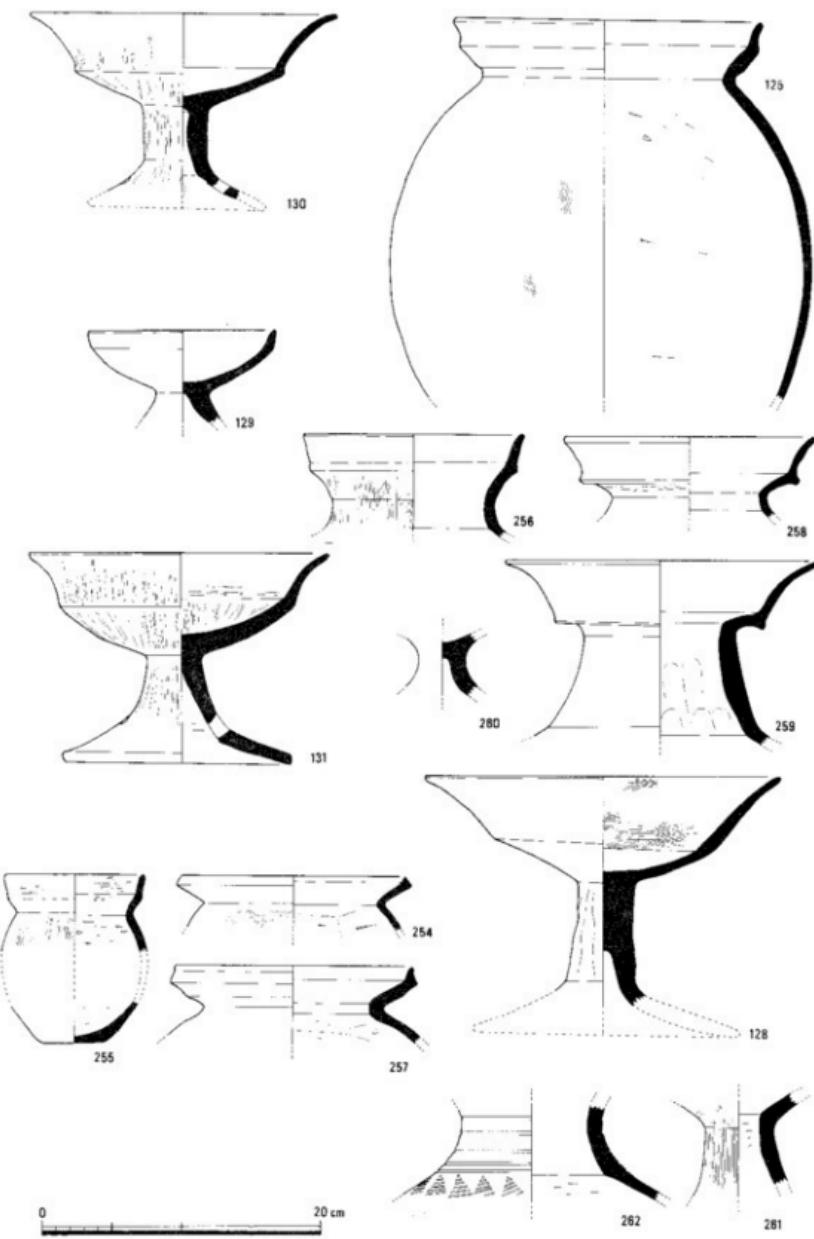


图25 贮藏穴SC10出土遗物 (1:4)

S C 10 (図22・25、図版12) 貯蔵穴 S C 10は、S C 210の南2mにある。円形で内部は袋状である。上面径1.3m、底部最大径2.0m、深さ1.8m。埋積土は上・中・下3層にわかれ。上層の淡黄褐色細砂質土と中層の淡褐色細砂質土からは少量の弥生土器、下層の暗褐色細砂質土からは弥生土器コンテナ4箱分が出土した。

259は壺の口頭部破片である。復元口径約22cm、頭部最小径11.2cm。二重口縁で大きく外反する口縁部をもつ。頭部は長い。調整技法は頭部内面に指頭圧痕がみられ、削部内面はヘラ削り、他は剥落のため不明。外面に丹彩の痕跡がある。125は壺で、底部を除き完全に復元される。口径22.2cm、胴部最大径30.2cm。口縁部は二重で立ち上がり部は短い。口縁部外面は内湾する。胴部最大径は中央付近にある。調整技法は口頭部外面は横ナデ、胴部外面はヘラ磨きで一部刷毛目が残る。同内面は左上方向のヘラ削りである。削部下半に煤が付着する。130・131は高杯で、ほぼ完全形に復元される。130は脚端部を欠く。口径21.9cm、脚筒部径4.4cm。杯部は屈曲しながら大きく外反する。脚筒部はほぼ垂直で脚裾部との境界は屈曲する。脚裾部に現状で3箇所、復元で5箇所の透し孔がある。調整技法は外面全面と杯部内面はヘラ磨き、脚筒部内面はしづら目である。外面全面と杯部内面は丹彩が施される。131は130とよく似るが脚筒部が開く。復元口径約21.5cm、脚筒部最小径4.3cm、復元脚端部径約16cm、器高14.8cm。脚裾部に現状で4箇所、復元で5箇所の透し孔がある。調整技法は外面全面と杯部内面がヘラ磨き、脚部内面が横方向のヘラ削りである。脚部内面を除く全面に丹彩が施される。129は高杯で、脚撕部を欠く。口径13.3cm、脚筒部最小径3.7cm。杯部は端部が短く立ち上がる。脚裾部は大きく外反するものと思われる。外面はヘラ磨き。以上の5個体は床面から一括状態で出土した。

256は壺の口頭部破片である。口縁部は二重で端部は少し外反しながら立ち上がる。調整技法は口縁部内外面は横ナデ、頭部外面は刷毛目、胴部内面はヘラ削りである。262は壺の頭部から削部にかけての破片である。頭部外面に現状で5条の凹線文がめぐり、その下に縦両文をめぐらす。胴部内面が右方向のヘラ削りである。258・254・257は壺の口頭部破片である。258は二重口縁で屈曲部が外に若干拡張する。口頭部外面は横ナデ、胴部内面はヘラ削り。254は口縁端部が内傾する。調整技法は胴部外面が刷毛目、同内面がヘラ削りである。257は口縁端部が内傾する。復元口径約17cm。調整技法は胴部内面が横方向のヘラ削り、外面と口縁部内面は丹彩が施される。255は小形の壺の口頭部と底部の破片である。口縁部は二重で心持ち外反しながら立ち上がる。調整技法は口頭部外面は横ナデ、胴部外面は刷毛目、同内面は左横方向のヘラ削りである。削下端部外面に煤が付着する。260は高杯の脚筒部。筒部最小径3.3cm。内外面とも丹彩。261は高杯状の器台の破片である。筒部最小径5.0cm。調整技法は外面が刷毛目、杯部内面がヘラ磨き、筒部内面がヘラ削りである。以上は下層から出土した。128は高杯である。脚裾部を除きほぼ完全形に復元しうる。杯部径25.7cm、脚筒部最小径4.0cm。杯部は屈曲しながら大きく外反し、屈曲部直上に幅広い凹線がめぐる。脚筒部は細長く、屈曲して裾部

に達する。調整技法は外面と杯部内面がヘラ磨きで、その部位に丹が塗られる。出土層位不明。以上の遺物はⅣ期に編年される。

S C 112 (図22) 貯蔵穴 S C 112はS C 10の西南西2.6mにある。円形で内部は袋状である。最大径は1.45mで底面上40cmに、最小径は85cmで上面下34cmにある。深さ1.43m。内部から弥生土器コンテナ1箱分が出土した。時期はⅢないしⅣ期である。

S C 97 (図22・29) 貯蔵穴 S C 97はS C 10の南々東2.1mにある。円形で内部は袋状である。柱穴2箇所と切合うが、先後関係は不明。上面最大径1.0m、底部最大径1.5m、深さ1.6m。内部から弥生土器數十片が出土した。265は壺の口頸部破片である。復元口径約16cm。調整は口頭部内外面が横ナデ、胴部内面は左横方向のヘラ削りである。外面に煤が付着する。266は支脚。南に近接する貯蔵穴 S C 21出土資料と接合し、ほぼ完形に復元しうる。復元口径約13cm、器高12.1cm。時期はⅠないしⅡ期であろうか。

S C 15 (図24・26、図版11下) 貯蔵穴 S C 15はS C 97の南西2.5mにある。円形で内部はフラスコ状である。上面径1.45m、底部最大径1.4m、上部最小径0.9m、深さ1.58mで、最大径は底面の上25cm、最小径は上面の下54cmにある。

内部からコンテナ3箱分の弥生土器が出土した。108・102は壺のほぼ完形個体である。108は口径16.4cm、胴部最大径23.7cm、器高31.2cm。口縁部外面が内湾し、胴部は細長く、最大径は中央付近にある。底は丸底に近い平底である。調整技法は口頸部外面が横ナデ、胴部外面が縱方向の刷毛目、同内面が左横方向のヘラ削りである。下半部の一部に煤が付着する。102は口径15.0cm、胴部最大径21.8cm、器高27.6cm。口縁部は二重口縁で、立上がり部は短い。胴部は細長く、最大径は中央より上位にある。底は平底。調整技法は口頸部内外面が横ナデ、胴部外面が刷毛目、同内面が左方向のヘラ削りである。胴部外面に煤が付着する。101は小形の壺の完形個体である。口径14.3cm、胴部最大径15.7cm、器高15.0cm。口縁端部が上下にわずかに拡張する。胴部はよく張り、その最大径は中央より上位にある。底は平底。調整技法は口頸部内外面が横ナデ、胴部外面が縱方向の刷毛目、同内面が左方向のヘラ削りである。胴部外面に煤が付着する。267・268は壺の口頸部破片である。267は復元口径約14cm。二重口縁で、外面が少し内湾する。口頸部内外面は横ナデ、胴部内面はヘラ削りである。外面に煤が付着する。268も二重口縁で外面が内湾する。口縁部外面は横ナデ、胴部内面は左横方向のヘラ削りである。外面に煤が付着する。269は壺の上半部破片。口頸部内外面は横ナデ、胴部外面はヘラ磨きで、一部刷毛目痕が残る。同内面は右横方向のヘラ削りである。276は大形の壺の肩部と思われる。頸部と肩部の境に突帯がある。調整技法は突帯部は横ナデ、肩部外面はヘラ磨き、内面は指頭仕痕。頸部内面に丹彩が施される。

274・273は楕である。274はほぼ完形に復元しうる。口縁端部が屈曲しほば垂直に短く立上がる。高台は八字形を呈する。内外面に丹彩の痕跡が残る。273は口縁端部を欠く。高台は台

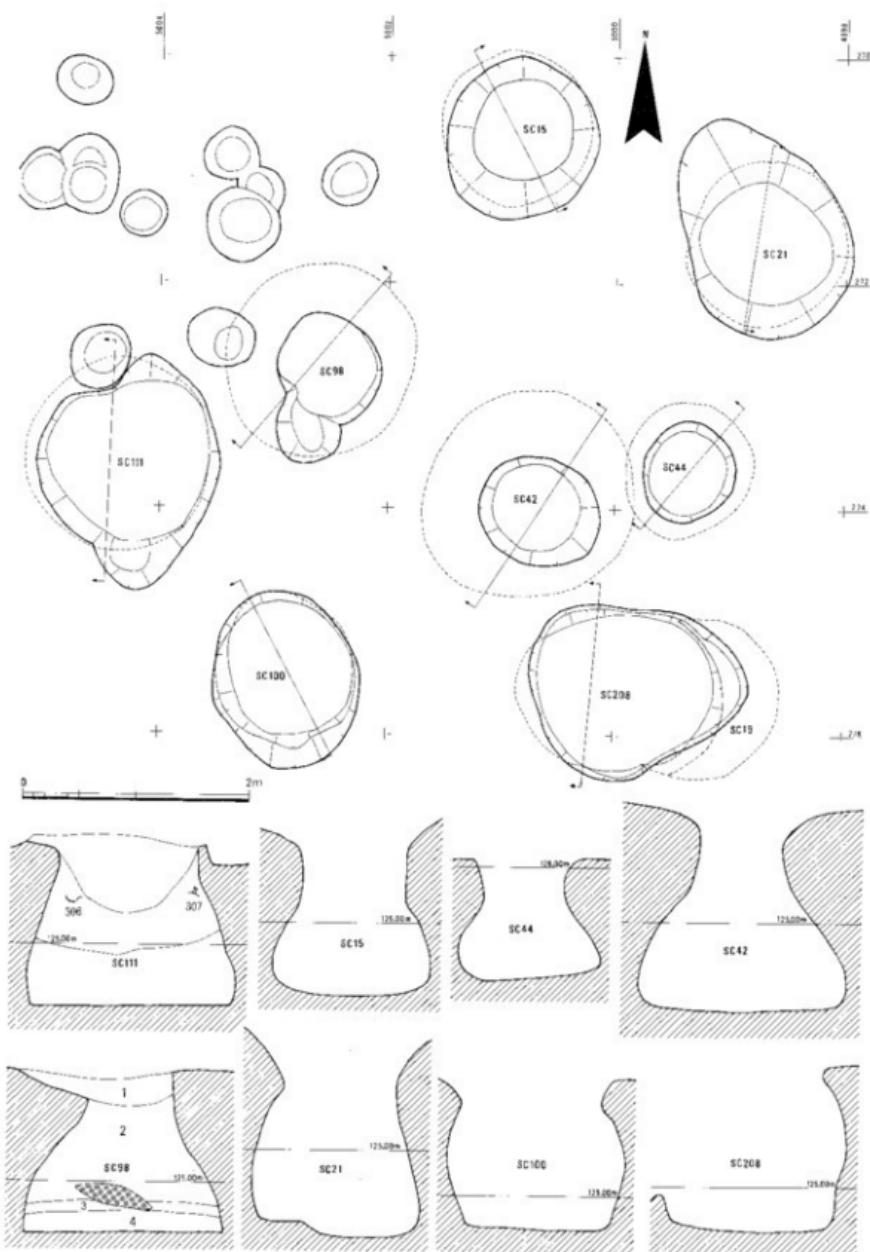


图26 贮藏穴SC15・SC21・SC111・SC98・SC42・SC44・SC100・SC208・SC19 (1:50)

形状である。調整技法は杯部内外面はヘラ磨き、高台部外面は横ナデ、杯部と高台部の境界部に指頭圧痕がある。103は高杯である。脚裾部を除きほぼ完存する。杯部口径20.4cm、脚筒部最小径4.3cm。杯部は大きく屈曲し、その屈曲部に厚く粘土を補って突帯状とする。杯部と脚部の接合は分割成形技法による。調整技法は杯部外面がヘラ磨き、脚部外面が縦方向の刷毛目である。杯部内外面・脚部外面に丹彩が施される。272は高杯の破片。脚筒部は直立し、屈曲して八字状の瓣部となる。瓣部に4箇所の透し孔がある。271は高杯の脚裾部破片。現状で2箇所の透し孔がある。外面はヘラ磨きで、丹が塗られる。270は器種が判然としないが、高杯の杯端部破片と思われる。斜め下方に細長い突帯を付す。275は鼓形器台である。杯上半部を欠く。底径20.4cm。大形でくびれ部は広い。調整技法は杯部外面とくびれ部外周がヘラ磨き、脚部外面の上端部がヘラ磨きで他は斜め方向の刷毛目、脚部内面はヘラ削りのち粗いヘラ磨きが施される。脚部内面を除く全面に丹彩が施される。以上の土器はⅣ期に編年される。

S C 21 (図26・27) 貯蔵穴 S C 21は、S C 15の東南東2.4mにある。橢円形で内部は袋状を呈する。上面長径2.0m、同短径1.45m、底径1.45m、深さ1.85m。最小径は1.0mで、上面下45cmにある。

内部からコンテナ1箱分の弥生土器が出土した。316は壺の上半部破片である。二重口縁で立上がり部は若干外傾する。調整技法は口頸部外面が横ナデ、胴部内面が右横方向のヘラ削り。内外面とも丹彩化上げ。315は壺ないし壺の口頸部破片である。二重口縁で立上がり部はほぼ垂直。調整技法は口頸部外面が横ナデ、胴部内面がヘラ削り。口頸部外面と胴部外面は丹彩化上げ。314は台付長頭壺と思われる。口径10.2cm、頸部長10.6cm、胴部最大径14.7cm。調整技法は内外面ともヘラ磨き。器壁は薄く、胎土は比較的緻密である。318は高杯である。脚裾部を除き形状を知りうる。復元杯部口径約23cm、脚筒部最小径4.0cm。杯部は屈曲部をもち、脚部は短い。調整技法は脚部内部を除きヘラ磨きで、その部位を丹彩化上げとする。317は高杯で脚裾部を欠く。杯端部がほぼ垂直に立上がる。内外面ともヘラ磨き。以上の土器はⅢないしⅣ期に編年される。

S C III (図26・27) 貯蔵穴 S C 111は、S C 15の南西4.5mにある。円形で内部は袋状を呈する。上面径1.6m、底径1.7m、深さ1.5m。埋積土は上・中・下3層にわかれれる。上層は暗褐色粗砂質土、中層は淡褐色粗砂質土、下層は暗褐色粗砂質土で、遺物は主として中層から出土した。306は壺のほぼ完形個体である。口径13.7cm、頸部最大径13.5cm、器高12.5cm。胴部最大径は上端付近にあり、底は平底である。調整技法は口頸部外面が横ナデ、胴部外面が縦方向の刷毛目、同内面上位は左横方向のヘラ削り、同中・下位は縦方向のヘラ削り。外面に煤が付着する。307は高杯で杯部を欠く。脚裾部径11.0cm。脚裾部に8箇所の円形透し孔がある。杯部と脚部、脚筒部と脚部の接合はともに分割成形技法による。杯部内外面と脚部外面を丹彩とする。306・307とも中層上部から出土した。図示以外にもいくつかの壺の口頸部破片が

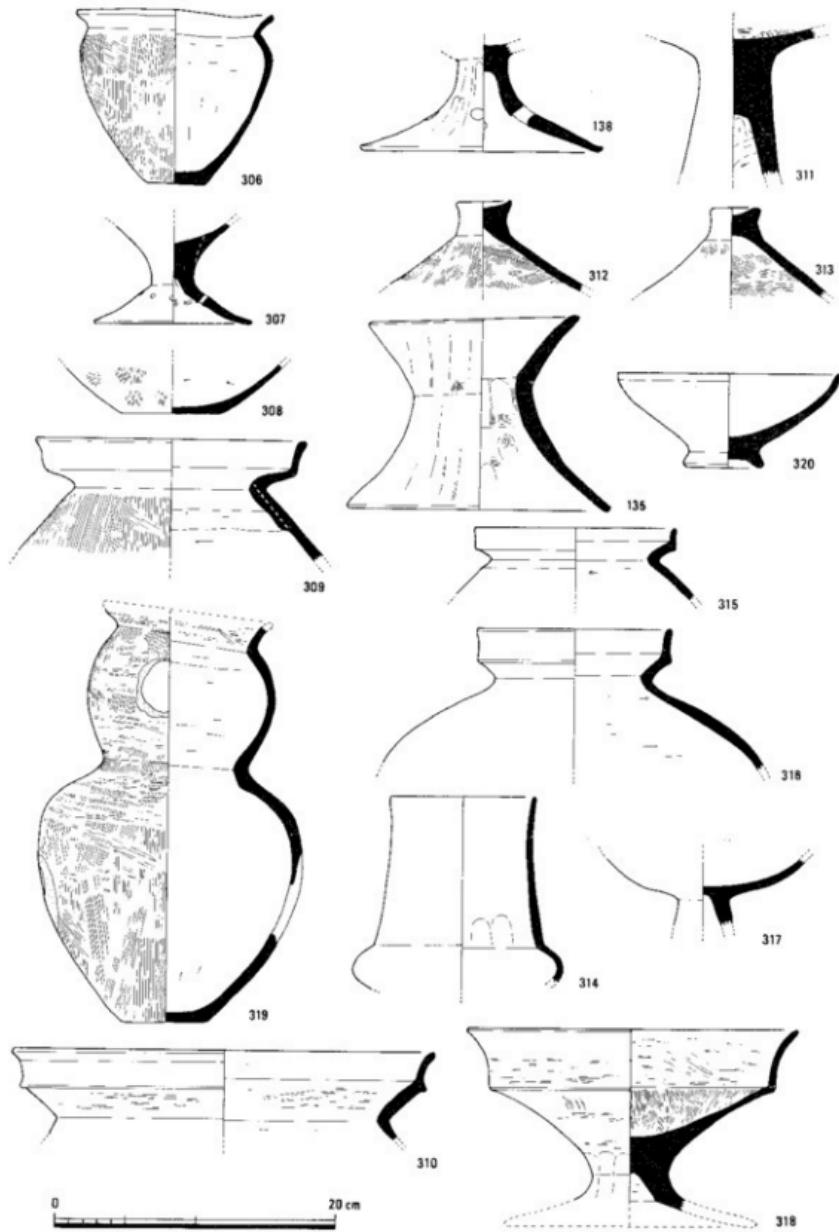


图27 财葬穴SC21·SC111·SC42·SC22出土遗物 (1:4) (315-316-317-314-318:SC21;306-307:SC111;320:SC22;他:SC42)

あり、その中には明らかにⅡ期的様相をもつものがあるが、307の高杯の特徴から、これらの土器はⅣ期に編年されよう。

S C 98 (図26・28・29) 貯蔵穴 S C 98は、S C 111の北東1.9mにある。円形で内部はフラスコ状を呈する。上面径90cm、底径1.7m、深さ1.4m。南側に柱穴と接するが切合い関係は不明。埋積土は4層からなる。第1層は暗褐色粗砂質土、第2層は淡褐色粗砂質土、第3層は黒褐色粗砂質土、第4層は淡褐色粗砂質土で、第Ⅱ層からコンテナ1箱分、第Ⅲ層から3箱分、層位不明1箱分、計コンテナ5箱分の弥生土器が出土した。

136は壺の上半部である。口径19.8cm。口縁部は二重で外面が内湾する。胴部は球形を呈すると思われる。調整技法は口頸部外面が横ナデ、胴部外面が刷毛目のちへラ磨き、同内面がヘラ削りである。137は壺で完形に復元しうる。口径20.1cm、復元胴部最大径約29cm、復元高約36cm。口縁部は二重で外面が内湾する。胴部最大径は中央よりやや上にある。底は平底。調整技法は口頸部外面が横ナデ、胴部外面が刷毛目、同内面全面がヘラ削りである。282は直口壺の口頸部である。口径9.4cm。口頸部外面と胴部外面はヘラ磨き、同内面は左方向のヘラ削りである。胴部内面を除く面に丹彩を施す。277~281、283~286は壺の口頸部破片である。二重口縁のものが多い。287は壺・壺の底部である。平底を呈する。外面はヘラ磨き、内面はヘラ削りとする。外面に丹彩が施される。297は楕ではぼ完形に復元しうる。器高7.2cm。305・298は蓋である。305は完形品。底径11.3cm、器高4.9cm。298はほぼ完形個体。底径15.6cm、器高5.8cm。外面は刷毛目が施される。289・288は鉢である。289は完形個体。口径14.3cm、胴部最大径12.2cm、器高9.8cm。二重口縁で底は丸底に近い平底である。調整技法は口頸部外面がヘラ磨き、胴部外面が縦方向の刷毛目、同内面がヘラ削りである。内外全面に丹彩が施される。288は上半部と底部の同一個体だが直接接合しない。調整技法は口頸部外面が横ナデ、胴部外面がヘラ磨き、同内面が左横方向のヘラ削りである。290・292~295は高杯である。293は脚部を欠く。杯部と脚部の接合と杯部の上半部と下半部の接合は分割成形による。調整技法は杯部外面と脚部外面がヘラ磨きで、その部位に丹彩が施される。294は脚部を欠く。杯部径13.6cm、脚筒部最小径3.9cm。杯部は小さく端部はほぼ垂直に立上がる。脚部はわずかに屈曲する。その屈曲部に3箇所の円形透し孔がある。295はほぼ完形に復元しうる。杯部径25.4cm、底径15.8cm、器高15.6cm。杯部は大形で深く、屈曲しながら外反する。脚部は屈曲部を有さず大きく聞く。脚部に現状で2箇所、復元4箇所の円形透し孔がある。調整技法は杯部外面と脚部外面がヘラ磨きで、その部位に丹彩が施される。以上の上器は第3層から一括状態で出土した。

299は壺の口頸部破片である。口径約12cm。口頸部外面は横ナデ、胴部外面はヘラ磨き、同内面はヘラ削りである。外面に煤が付着する。淡褐色を呈し、胎土は緻密である。300は壺の底部である。平底を呈する。外面は刷毛目、内面はヘラ削りが施される。外面には煤が付着

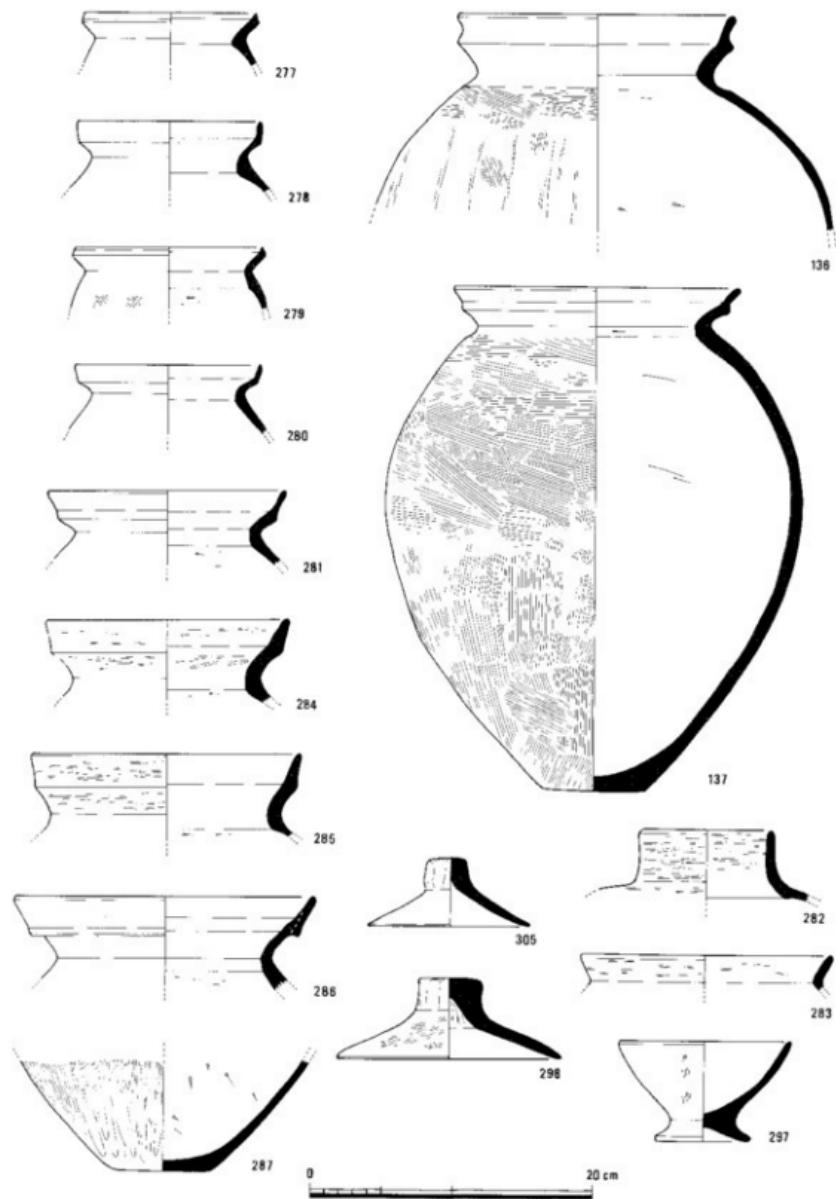


图28 贮藏穴SC98出土遗物 (1:4)

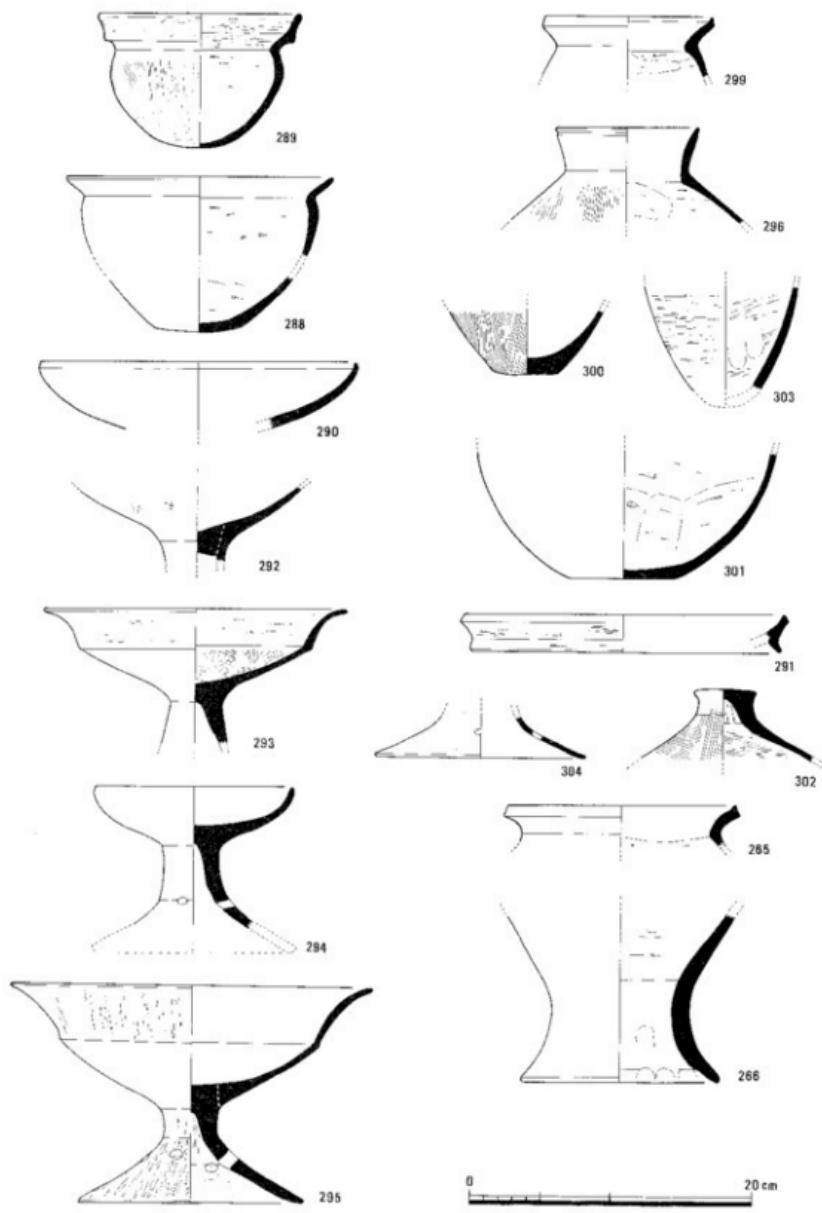


図29 貯蔵穴SC98・SC97出土遺物（1:4）（265・266はSC97、他はSC98）

する。301は鉢の下半部と思われる。平底。外側はヘラ磨き、内側はヘラ削りが施される。外側は丹彩仕上げ。299・300・301は第2層から出土した。296は直口壺の上半部破片である。復元口径約10cm。口縁端部外面に1条の凹線がめぐる。調整技法は口頭部外側が横ナデのちヘラ磨き、同内側が横ナデ、胴部外側が縱方向の刷毛目、同内側がヘラ削りである。黄褐色を呈し、胎土は緻密である。303は器種不明。外側はヘラ磨きで丹彩が施される。302は蓋で底端部を欠く。内外面とも刷毛目。291は高杯の杯端部と思われる。304は高杯の脚部破片である。現状で1箇所の円形透し孔がある。外側はヘラ磨きで丹彩仕上げとする。以上は出土層位不明である。S C 98出土土器はⅢ期に編年される。

S C 42 (図26・27、図版15下) 貯蔵穴 S C 42は、S C 98の南2.3mにある。円形で内部はフラスコ状である。上面径1.1m、深さ1.75m。最大径は1.95mで、底面上20cmに、最小径は75cmで、上面下25cmにある。埋積土からコンテナ2箱分の弥生土器が出土した。

319 (図版36下) は瓢壺である。口縁端部を除きほぼ完形である。上面最大径13.2cm、下壺最大径18.6cm、復元器高30cm。下壺はいびつである。上壺の最大径は中央に、下壺のそれは上位にある。底は平底。焼成後の不整円形ないし稍圓形の透し孔が上壺に1箇所、下壺に2箇所ある。調整技法は口頭部外側がヘラ磨き、他の外側が刷毛目のち粗いヘラ磨き、同内側が左横方向のヘラ削りである。下壺上半部以上の外側と口縁部内側に丹彩が施される。309は壺の上半部である。口縁部は二重で若干外傾する。口縁部外側は内溝する。調整技法は口縁部内外側が横ナデ、胴部外側が刷毛目、同内側は左横方向の粗いヘラ削りである。外側に煤が付着する。最下層から出土した。310は大形の甕の口頭部破片である。口頭部外側と胴部外側はヘラ磨きで丹彩が施される。308は壺ないし甕の底部。外側は丹彩仕上げ。312・313は蓋である。ともに外側とも刷毛目調整で、外側に丹彩が施される。138は高杯の脚部である。底径16.9cm。筒部と裾部との境界は屈曲しない。裾部に4箇所の円形透し孔がある。杯部と脚部の接合は分割成形技法による。外側はヘラ磨き調整で丹彩が施される。311は高杯の脚筒部である。筒部は細長い。外側と杯部内側は丹彩仕上げ。135は器台のほぼ完形個体である。岡は天地方と思われる。くびれ部最小径8.6cm、器高13.9cm。外側ともヘラ磨き調整。以上の土器はⅢ期に編年される。

S C 44 (図26) 貯蔵穴 S C 44は S C 42の東北東1.4mにある。円形で内部はフラスコ状である。上面径90cm、深さ1.05m。最大径は1.2mで底面上25cmに、最小径は65cmで上面下16cmにある。遺物は出土しなかった。

S C 100 (図26) 貯蔵穴 S C 100は S C 111の南東2.3mにある。平面は梢円形で、上面長径1.5m、同短径1.3m、底長径1.25m、同短径1.05m、深さ1.35m。埋積土から弥生土器数片が出土した。Ⅱ期と推定される。

S C 208 (図26) 貯蔵穴 S C 208は S C 42の南々東1.8mにある。S C 19と重複するが切

合い関係は不明。円形で上面径1.55m、底面径1.75m、深さ1.45m。内部から弥生土器10数片が出土した。後期に属するが細別時期は不明。

S C 19 (図26) 貯蔵穴 S C 19は、S C 208の東に重複してある。円形で内部は袋状を呈する。上面径1.25m、底部最大径1.4m、深さ1.1m。埋積土から弥生土器数点が出土した。後期に属するが細別時期は不明。

S C 22 (図27・30) 貯蔵穴 S C 22は、S C 97の東南東3.0mにある。円形で上面径1.1m、底部最大径1.15m、深さ85cm。内部から弥生土器数点が出土した。320は、鉢の完形個体である。口径15.3cm、底径5.4cm、器高6.7cm。口縁端部が頗る立上がる鉢部に短い高台がつく。後期に属するが細別時期は不明。

S C 94 (図30) 貯蔵穴 S C 94は、S C 22の東南東2.3mの丘陵東肩部にある。円形で内部は袋状を呈するが、東側は削平されて浅くなっている。上面径1.7m、深さ1.0m。遺物は出土しなかった。

S C 264 (図30) 貯蔵穴 S C 264は、S C 22の南々西3.3mにある。円形で内部はフ拉斯コ状を呈する。上面径95cm、底径1.5m、深さ1.45m。最小径は65cmで上面下55cmにある。内部から弥生土器2片が出土したが、時期は不明。

S C 265 (図30) 貯蔵穴 S C 265は、S C 264の東1.5mにある。円形で内部はフ拉斯コ状である。上面径1.0m、底径1.7m、深さ1.4m。最小径は80cmで上面下40cmにある。内部から弥生土器数十片が出土した。後期に属するが細別時期は不明。

S C 267 (図30) 貯蔵穴 S C 267は、S C 265の東1.4mの丘陵東肩部にある。楕円形で内部は袋状を呈するが、東側は削られて浅くなっている。上面長径1.5m、同短径1.3m、底面長径1.95m、同短径1.5m、深さ1.25m。内部から弥生土器十数片が出土した。後期に属するが細別時期は不明。

S C 16 (図30) 貯蔵穴 S C 16は、S C 264の南々西1.8mにある。円形で内部は袋状を呈する。上面径1.15m、底径1.25m、深さ1.7m。内部からコンテナ1箱分の弥生土器が出土した。時期はⅢ期ではないかと思われる。

S C 17 (図30) 貯蔵穴 S C 17は、S C 16の南東2.8mにある。円形で上面径1.55m、底径1.3m、深さ1.4m。内部から弥生土器十数片が出土した。後期に属するが細別時期不明。

S C 263 (図30) 貯蔵穴 S C 263は、S C 17の南2.5mにある。東側がS C 18と重複するが、切合い関係は不明。円形で上面径1.2m、深さ80cm。遺物は出土しなかった。

S C 18 (図30・31) 貯蔵穴 S C 18は、S C 263の東に重複してある。円形で内部は袋状を呈する。上面径1.35m、底径1.95m、深さ1.0m。内部から弥生土器数10点が出土した。331は壺の口縁部破片である。二重口縁で口縁部外面に3条の擬凹線文がめぐる。外面に丹彩の痕跡がある。329は高杯の脚部破片である。復元底径約13cm。幅端部が水平に擴がる。脚部中

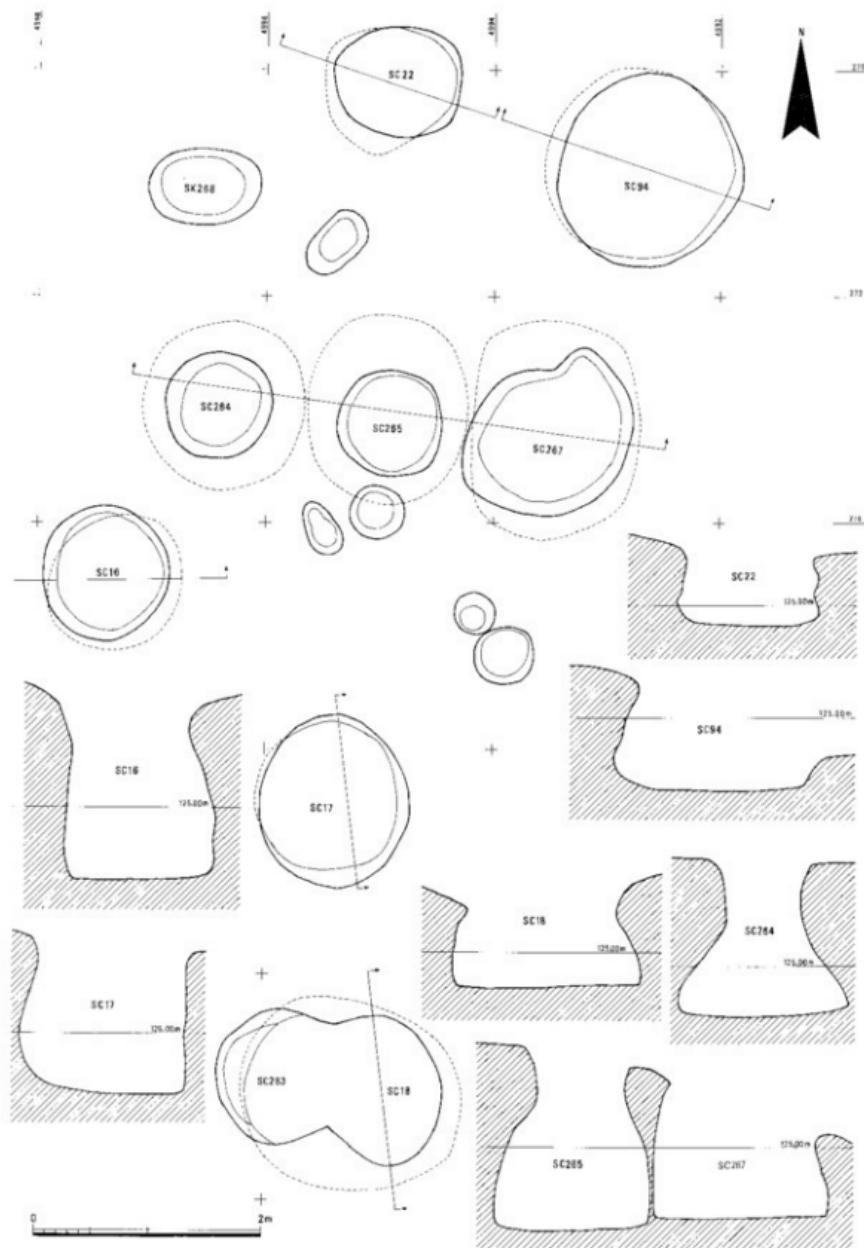


图30 贮藏穴SC22・SC94・SC264・SC265・SC267・SC16・SC17・SC263・SC18 (1:50)

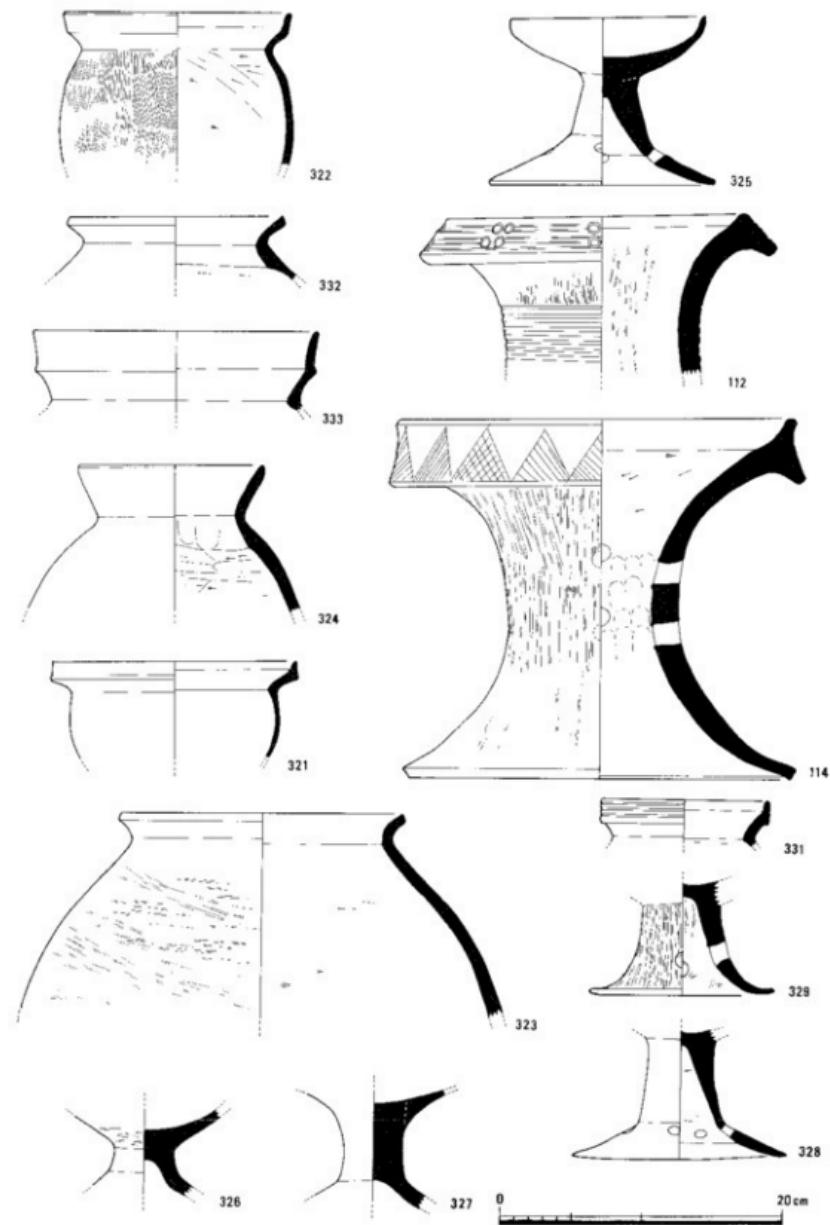


図31 貯蔵穴SC96・SC18出土遺物 (1:4) (331・329・328はSC18, 他はSC96)

央に4箇所の円形透し孔がある。杯部と脚部の接合は分割成形技法による。外面は丁寧なヘラ磨き調整で、丹彩を施す。茶褐色を呈し、胎土は緻密である。328は高杯の脚部である。筒部と脚部との間は屈曲し、裾部に現状で4箇所、推定で5箇所の円形透し孔を有する。杯部と脚部の接合は分割成形による。外面はヘラ磨き調整で丹彩が施される。裾部内面に墨が付着する。以上のうち331と329はⅡ期の特徴を有する。

S C 110 (図32) 貯蔵穴 S C 110は、S C 100の南々西2.6mにある。円形で内部は袋状を呈する。上面径1.1m、底径1.2m、深さ1.4m。最小径は85cmで上面下30cmにある。南西側に柱穴と切合うが先後関係は不明。埋積土は5層からなる。第1層・第2層は黒褐色粗砂質土、第3・4・5層は淡褐色粗砂質土で、それぞれ微妙に異なる。各層を通じてコンテナ1箱分の弥生土器が出土した。後期に属するが細別時期は不明。

S C 106 (図32) 貯蔵穴 S C 106は、S C 110の南々西7.6mにある。楕円形で上面長径1.25m、同短径1.0m、底面長径1.4m、同短径1.15m、深さ1.25m。内部から弥生土器十数片が出土した。Ⅱ期であろうか。

S C 105 (図32) 貯蔵穴 S C 105は、S C 106の西南西1.7mにある。楕円形で内部は袋状を呈する。上面長径1.35m、同短径90cm、底面長径1.7m、同短径1.4m、深さ1.55m。最小長径95cm、同短径60cmで上面下40cmにある。内部から弥生土器數十片が出土した。時期はⅠないしⅡ期と思われる。S C 106・S C 105の周辺で多数の柱穴・土坑が検出されたが、これらの性格は不明である。

S C 204 (図33) 貯蔵穴 S C 204は、S C 208の南1.6mにある。楕円形で、上面長径1.6m、同短径1.25m、底面長径1.5m、同短径1.1m、深さ1.25m。内部から弥生土器十数片が出土したが、時期は不明。

S C 207 (図33) 貯蔵穴 S C 207は、S C 204の南に切合ってあるが、先後関係は不明。円形で上面径1.2m、底面径1.0m、深さ1.05m。内部から弥生土器數片が出土したが、時期は不明。

S C 30 (図33、図版13下) 貯蔵穴 S C 30は、S C 207の南1.1mにある。円形で内部は袋状である。上面径1.0m、深さ1.2m。最大径は1.4mで底面上35cmにある。内部から弥生土器十数片が出土した。後期に属するが、細別時期不明。

S C 109 (図33、図版14下) 貯蔵穴 S C 109は、S C 30の西2.3mにある。円形で内部はフラスコ状である。上面径1.6m、底径1.7m、深さ1.65m。最小径は1.1mで上面下30cmにある。埋積土は上中下3層からなる。上層は暗褐色粗砂質土、中層・下層は淡褐色粗砂質土で、下層は中層よりやや硬くしまっている。各層を通じてコンテナ1箱分の弥生土器が出土した。後期に属するが細別時期は不明。

S C 96 (図31・33、図版14上) 貯蔵穴 S C 96は、S C 109の南西2.8mにある。円形で内

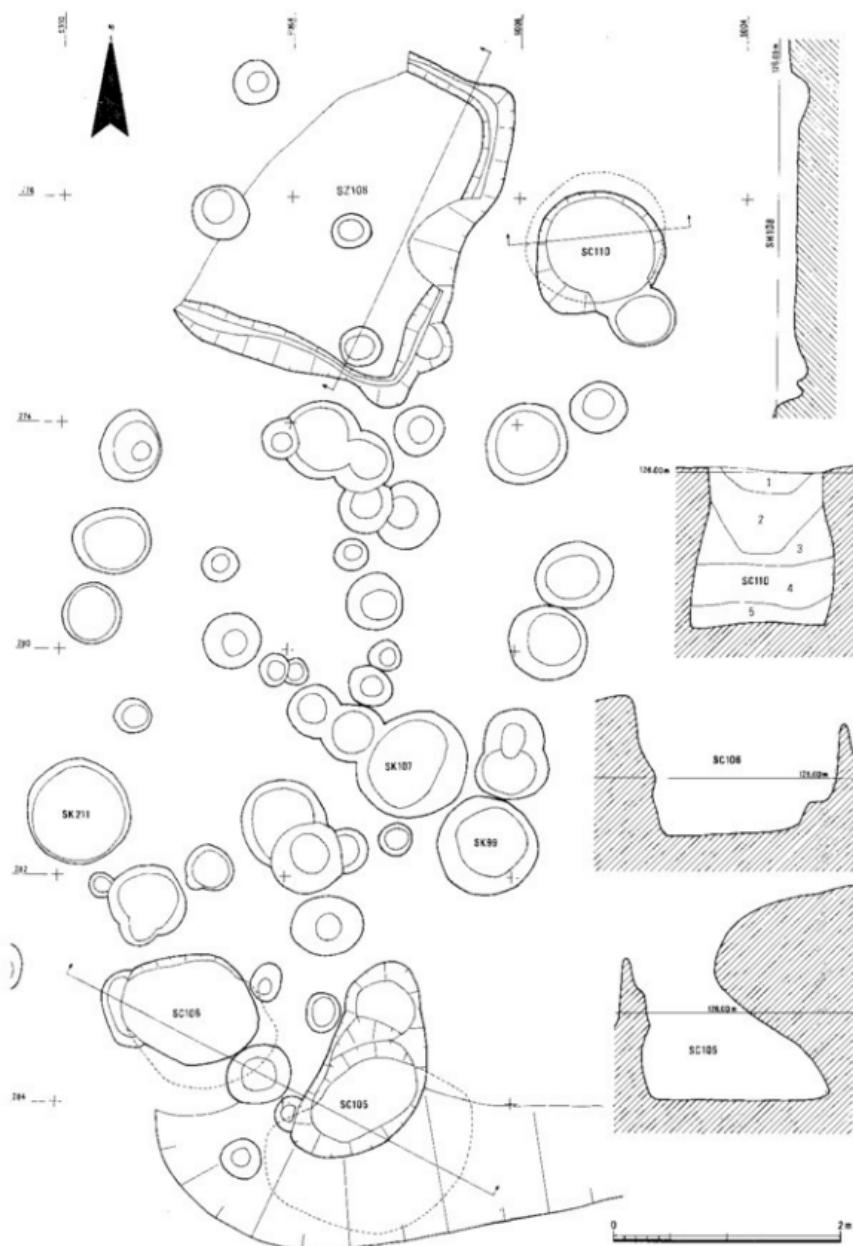


図32 貯蔵穴SC110・SC106・SC105、住居状遺構SZ108 (1:50)

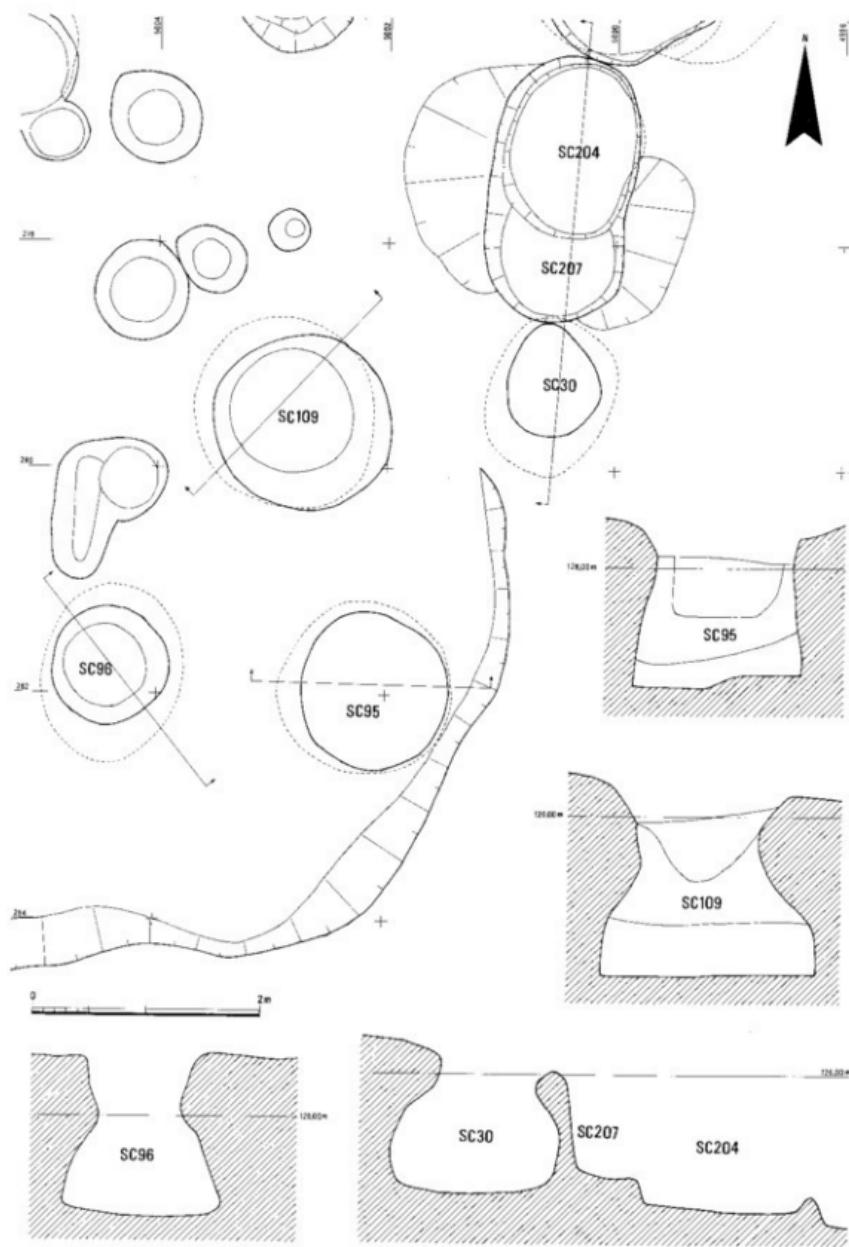


图33 贮藏穴SC204・SC207・SC30・SC109・SC96・SC95 (1:50)

部はフラスコ状を呈する。上面径1.05m、底面長径1.6m、同短径1.2m、深さ1.4m。最小径は70cmで上面下50cmにある。内部からコンテナ2箱分の弥生土器が出土した。

112は壺の口頭部である。口径21.5cm。口縁部は斜め下方に大きく拡張する。口縁部外面に数条の浅い凹線文がめぐり、そのうち4箇所づつ8単位の竹管文が記される。頭部外面には境状で8条の凹線文がめぐる。調整技法は頭部内外面ともヘラ磨きである。324は壺の上半部である。口径13.0cm。口縁部は外反して立上がる。調整技法は口頭部外面が横ナデ、胴部外面がヘラ磨き、同内面が左横方向のヘラ削りである。口縁部外面の一部に煤が付着し、頭部内面に丹彩の痕跡がある。322・323は壺の上半部破片である。322は二重口縁である。調整技法は口頭部内外面は横ナデ、胴部外面が縱方向の刷毛目、同内面が斜め左上方向のヘラ削りである。323は胴部が大きく張る。調整技法は口縁部外面が横ナデ、胴部外面がヘラ磨き、同内面が左横方向のヘラ削りのち粗いナデが施される。外面に煤が付着。322・323は壺の口頭部破片。321は鉢で内外面とも丹彩。325(図版34下)は高杯のほぼ完形個体である。杯部口径13.4cm、復元底径約16cm、器高約12cm。杯端部は直立し、脚部は屈曲部をもつ。脚部に4箇所の円形透し孔がある。外面全面と杯部内面に丹彩が施される。326・327は高杯の破片。326は外面と杯部内面を丹彩とする。114(図版34上)は器台ではほぼ完形に復元しうる。復元口径約28cm、復元高約26cm。口縁端部は上下に拡張し、外面に内部を平行線文で充填させた錐南宋文がめぐる。胴部には上下2箇所づつ4単位の円形透し孔がある。調整技法は口縁部内外面が横ナデ、胴部外面がヘラ磨き、同内面上半が左横方向のヘラ削りである。外面全面に丹彩が施される。112の壺とセットをなすと思われる。以上の上器のうち、112と114はⅡ期の特徴をもつが、他はⅣ期の特徴を有する。従ってS C 96はⅣ期に編年される。

S C 95(図33) 貯蔵穴S C 95は、S C 96の東2.4mにある。円形で上面径1.3m、底径1.5m、深さ1.4m。埋積土は上中下3層からなる。上層は暗褐色粗砂質土、中・下層は淡褐色粗砂質土で下層は中層よりやや硬くしまっている。各層を通じてコンテナ1箱分の弥生土器が出土した。時期はⅡないしⅢ期と思われる。

S C 35(図15・34) 貯蔵穴S C 35は、S C 105の南々西約26mの丘陵西肩部にある。堅穴住居S H 39と切り離し関係にあり、S C 35の方が新しい。円形で上面径2.2m、底径1.95m、深さ1.45m。内部からコンテナ1箱分の弥生土器が出土した。349は台付壺と思われる。台脚端部外面に2条の凹線文がめぐる。胴部と脚部の接合は凹盤充填技法による。調整技法は胴部外面が横方向の刷毛目のちヘラ磨き、脚部外面が横方向のヘラ削り、胴部及び台脚部内面が左横方向のヘラ削りである。他にも口縁部外面に凹線文をともなう壺などがあり、時期はⅠ期と推定される。

S C 36(図15・34、図版17上) 貯蔵穴S C 36は、S C 35の南々東2.6mの丘陵西肩部にある。堅穴住居S H 39と切り離し関係にあり、S C 36の方が新しい。梢円形で内部は袋状である。

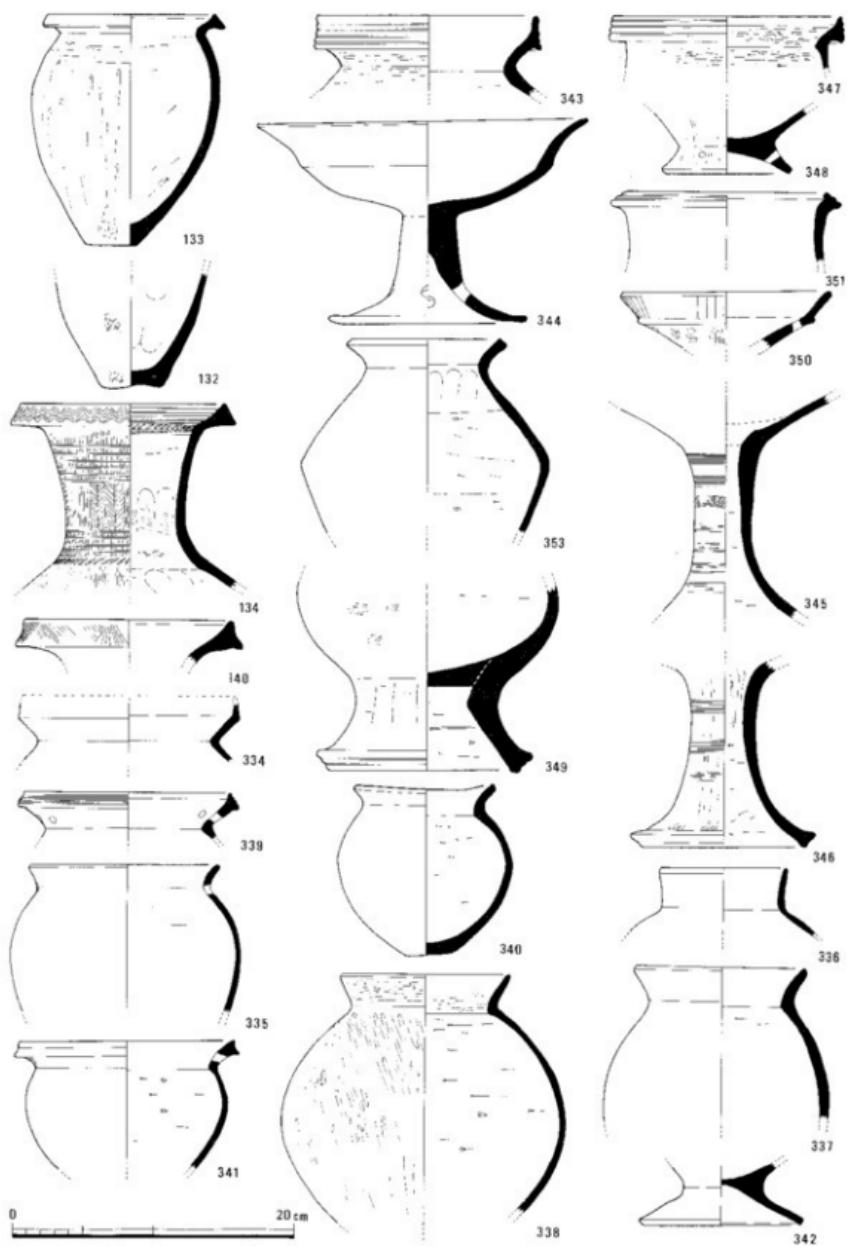


図34 貯蔵穴SC35・SC36・SC37・SC38・SC81・SC34・SC78出土遺物 (1:4) (349はSC35, 353はSC37, 347・348はSC38, 343・344はSC81, 133・132・134・140はSC34, 351・350・346はSC78, 他はSC36)

上面長径1.65m、同短径1.4m、底面長径2.25m、同短径1.75m、深さ1.45m。内部からコンテナ1箱分の弥生土器が出土した。334・339は壺の口頸部である。334は二重口縁。339は復元口径14.5cm。口縁部外間に4条の凹線文がめぐる。頸部に2箇所づつ対、計4箇所の円形透し孔がある。内外面に丹彩が施される。335は壺の上半部である。復元口径約13.5cm、復元胴部最大径約16cm。頸部の対角線上に一对の円形透し孔がある。胴部内面はヘラ削り調整。341は鉢で、底部を欠く。口径15.6cm、胴部最大径14.2cm。頸部の対角線上に一对の円形透し孔がある。胴部内面は左横方向のヘラ削り調整。外面に煤が付着する。340は小形の壺ではほぼ完形に復元しうる。口径9.6cm、胴部最大径12.4cm、器高12.2cm。胴部外表面はヘラ磨き、同外面はヘラ削り調整で、外面と口縁部内面に丹彩が施される。338は壺で底部を欠く。口径11.7cm、胴部最大径20.0cm。胴部は球形である。外面と口縁部内面はヘラ磨き、胴部内面は左横方向のヘラ削り調整。外面に煤が付着する。336は直口壺、口径8.9cm。口縁部は若干外傾する。口縁部内外面と胴部外面に丹彩が施される。337は壺の上半部。口径11.7cm。胴部内面は左横方向のヘラ削り調整。外面に煤が付着する。342は台付鉢の台脚部と思われる。以上の土器はⅡ期に編年されよう。

S C 37 (図15・34、図版17下) 貯蔵穴 S C 37は、S C 36の南3.5mの丘陵西肩部にある。堅穴住居S II 39と切合い関係にあり、S C 37の方が新しい。不整橢円形で内部は袋状を呈する。上面長径1.85m、同短径1.4m、深さ2.05m。底部最大径は2.3mで底面上80cmにある。内部からコンテナ1箱分の弥生土器が出土した。353は壺の破片で底部を欠く。胴部はく字状を呈する。胴部内面は左ないし右横方向のヘラ削り調整。他に口縁部外間に凹線文を伴う壺などがあり、時期はⅠ期と推定される。

S C 38 (図15・34) 貯蔵穴 S C 38は、S C 37の南西4.3mの丘陵西斜面にある。堅穴住居S H 39と切合い、S C 38の方が新しい。円形で内部はフ拉斯コ状を呈する。上面径1.25m、底面径2.0m、深さ1.95m。最小径は95cmで上向下30cmにある。内部からコンテナ2箱分の弥生土器と石器1個が出土した。347は鉢の口頸部破片である。口縁端部が上方に少し拡張し、外面に3条の凹線文をめぐらす。胴部外表面と口縁部内面はヘラ磨き、胴部内面は左横方向のヘラ削りのち粗いヘラ磨き調整が施される。348は台付鉢の底脚部と思われる。高台部に3箇所の円形透し孔をもつ。外面に丹彩が施される。石器は叩石状の石器で底面から出土した。他にも二重口縁の壺などがあり、Ⅱ期に編年される。

S C 83 (図15) 貯蔵穴 S C 83は、S C 38の西2.3mにある。円形で上面径1.6m、底面径1.45m、深さ80cm。堅穴住居S II 39と切合うが、先後関係は不明。内部から弥生土器數十片が出土した。時期はⅠないしⅡ期と思われる。

S C 81 (図34) 貯蔵穴 S C 81は、S C 83の北西約8mの丘陵西斜面にある。円形で上面径1.8m、底面径1.6m、深さ90cm。内部からコンテナ1箱分の弥生土器が出土した。343は壺

の口頭部破片である。口縁端部が上方に拡張し、外面に4条の凹線文がめぐる。外面と口頭部内面に丹彩が施される。344は高杯ではほぼ完形に復元しうる。杯部は屈曲し、その屈曲部直上に1条の沈線がめぐる。脚筒部は細長く裾端部は水平ぎみに拡く。脚部に4箇所の円形透し孔がある。杯部と脚部の接合は分割成形技法による。外面全面と杯部内面に丹彩が施される。これらの土器はⅡ期に編年される。

S C 82 貯蔵穴 S C 82は、S C 81の南東約4.5mの丘陵西斜面にある。円形で上面径1.25m、底面径1.1m、深さ55cm。内部から弥生土器2片が出土したが、時期は不明。

S C 34 (図34) 貯蔵穴 S C 34は、S C 38の南西約4mの丘陵西斜面にある。円形で内部は袋状を呈する。上面径1.6m、底面径1.55m、深さ90cm。内部から弥生土器若干が出土した。134は壺の口頭部である。口縁端部が肥厚し、頭部は細長い。口縁部外面に櫛描き波状文がめぐる。頭部には3ないし5単位の稜杉文6箇所があり、その上に7条、下に4条の沈線がめぐる。頭部最下端には連続刺突文がめぐる。口縁部内面にも連続羽状文の上に5条、下に1条の凹線文がめぐる。調整技法は頭部外面が刷毛目、同内面がヘラ削りのち粗いヘラ磨き、脚部内面が左横方向のヘラ削りである。140は壺の口縁部破片と思われる。口縁部外面に鋸歯文がめぐり、その内外を平行線文でうめる。133は壺ではほぼ完形に復元しうる。復元口径約11.5cm、器高16.5cm。調整技法は口頭部内外面が横ナデ、脚部外面が刷毛目のちヘラ磨き、同内面がヘラ削りである。外面に丹彩の痕跡がある。132は小形の壺ないし壺の底部であろう。これらの土器はⅠ期に編年される。

S C 78 (図34) 貯蔵穴 S C 78は、S C 34の南約18.5mの丘陵西斜面にある。円形で内部は袋状を呈する。上面径1.25m、底面径1.5m、深さ75cm。内部からコンテナ1箱分の弥生土器が出土した。351は壺の口頭部破片と思われる。口縁部外面に2条の凹線文がめぐる。350は高杯の杯部破片。小さく屈曲し、その屈曲部直下に1条の沈線がめぐる。上端部には平行線がある。345は高杯で、杯部上半と脚筒部を欠く。脚部は細長く外面に櫛描き平行線文を7単位めぐらす。杯部と脚部の接合は円盤充填技法による。外面はヘラ磨き、脚部内面はヘラ削り調査である。346は高杯状の器台と思われるが、口縁部を欠く。筒部外面に櫛描き平行線文をめぐらす。外面はヘラ磨き、筒部内面上半はしづり目、同下半部と筒部内面は左横方向のヘラ削り調査である。これらの土器はⅠ期に編年される。

D 住居状遺構

堅穴住居とは構造が異なるが、住居に類する小形の堅穴遺構がある。円形ないし隅丸方形で柱穴のあるものとないものとがあるが、中央穴は存在しない。S Z 108、S Z 119、S Z 120、S Z 123、S Z 160、S Z 186の6基が検出された。S Z 120 (図版18上) は、直径3.85mの円形プランで柱穴は2箇所ある。

E 段状遺構

丘陵斜面の等高線と平行に細長い段状の遺構がある。柱列の伴うものと伴わないものとがある。調査区北半の丘陵東斜面に集中するが、一部西斜面にもある。SS14、SS20、SS40、SS75、SS116、SS121、SS131、SS136、SS137、SS138、SS139、SS140、SS147、SS156、SS157、SS161、SS162、SS163、SS164、SS165、SS170、SS171、SS179、SS180、SS181、SS182、SS183、SS184、SS185、SS187、SS190、SS191、SS194、SS196、SS197、SS199、SS259、SS269、SS270、SS271、SS272、SS275の42基が検出された。SS199（図版19上）は、調査区東端の丘陵東極部にある。長さ12.1m、柱穴は5箇所、4間分である。

F 木棺墓・甕棺墓

木棺墓が47基、甕棺墓が6基、計53基の墓が検出された。このうち、SG66、SG31、SG32を除く50基が、調査区北端の丘陵北ないし東斜面に集中している。甕棺墓は乳児用と思われる。

SG143（図35） 木棺墓SG143は、調査区北端の丘陵北斜面に等高線とはほぼ直交してある。掘形は長方形で、長辺2.25m、短辺90cm、検出面からの深さ45cm。中軸線は北で東に約12度振れる。弥生土器1片が出土したが、時期は不明。

SG132（図35） 木棺墓SG132は、SG143の北東2.3mに等高線と斜交してある。掘形は隅丸長方形で、長辺2.25m、短辺90cm、深さ30cm。短辺の両側に木棺の小口板をはめこむための穴（以下、小口穴という）がある。小口穴は橢円形で長径約35cm、短径25cm、床面からの深さ約20cmである。中軸線はほぼ真東西方位。弥生土器若干が出土したが、時期は不明。

SG133（図35、図版21） 木棺墓SG133は、SG132の東2.2mに等高線とはほぼ直交してある。掘形は長方形だが北側は削り取られている。短辺95cm、深さ50cm。中軸線は北で東に約21度振れる。遺物は出土しなかった。

SG142（図35、図版21） 木棺墓SG142は、SG143の南々東3.1mに等高線と平行してある。掘形は長方形で長辺2.6m、短辺95cm、深さ55cm。西短辺のやや内側に小口穴がある。小口穴は隅丸長方形で、長辺約40cm、短辺17cm、深さ15cm。小口穴にそって本棺の痕跡を検出した。木棺は外法長辺1.85m、同短辺43cm、側板厚4cm。長辺側板は小口板の外方に延びる。中軸線は北で西に約62度振れる。弥生土器数片が出土したが、時期は不明。

SG241（図36） 木棺墓SG241は、SG133の北々東約4mに等高線と直交してある。遺構の大半は削り取られており、南側の小口穴のみが残存する。遺物は出土しなかった。

SG214（図36） 木棺墓SG214は、SG241に南接してある。中軸線は北で西に約72度振れ、等高線とは平行する。SG241と切合うが、先後関係は不明。掘形は長方形で、長辺1.05m、短辺50cm、深さ40cm。遺物は出土しなかった。

SG222（図36） 木棺墓SG222は、SG214の東北東1.8mにある。中軸線は北で西に約

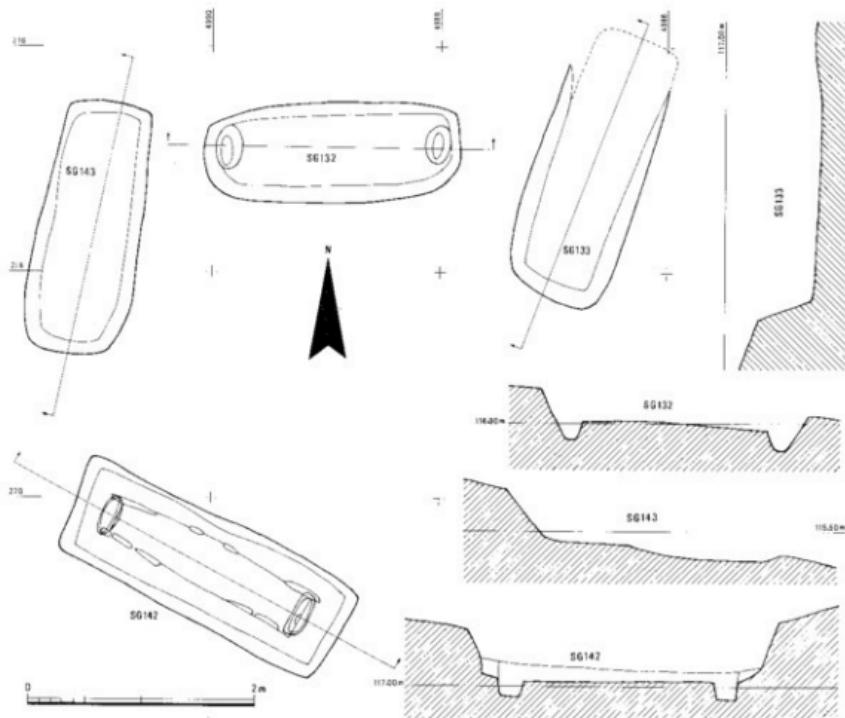


図35 木棺墓SG143・SG132・SG133・SG142 (1:50)

81度振れ、等高線とほぼ平行する。掘形は隅丸長方形で、長辺2.3m、短辺85cm、深さ20cm。両短辺のやや内側に2個づつの枕石があり、遺体は西頭位1体、東頭位1体の計2体と思われる。弥生土器若干が出上した。時期はⅡ期と推定される。

S G 224 (図36・37、図版29上) 墓棺墓S G 224は、S G 214の南々東1.1mにある。掘形は円形で直径60cm、深さ30cm。墓棺は上槽の北東にやや片寄って、ほぼ垂直に置かれていた。墓棺(116、図版37上)は、鉢形土器のほぼ完形個体である。復元口径約30cm、胴部最大径28.4cm、器高24.6cm。口縁端部が上方に少し拡張し、口縁部外面に円線文が認められる。底は平底。調整技法は胴部外向は刷毛目、同内向は左横方向のヘラ削りである。外面全面と内面上半部に丹彩が施される。胎土は1~4mmの白・灰色砂粒を多く含み、色調は塗褐色である。他に把手状の破片がある。Ⅱ期に属する。

S G 223 (図36) 木棺墓S G 223は、S G 224の南東80cmにある。中軸線は北で東に約30度振れ、等高線と直交する。掘形は長方形で、長辺1.6m、短辺70cm、深さ32cm。南東側の底面に枕石2個があり、遺体は南東頭位と考えられる。遺物は出土しなかった。

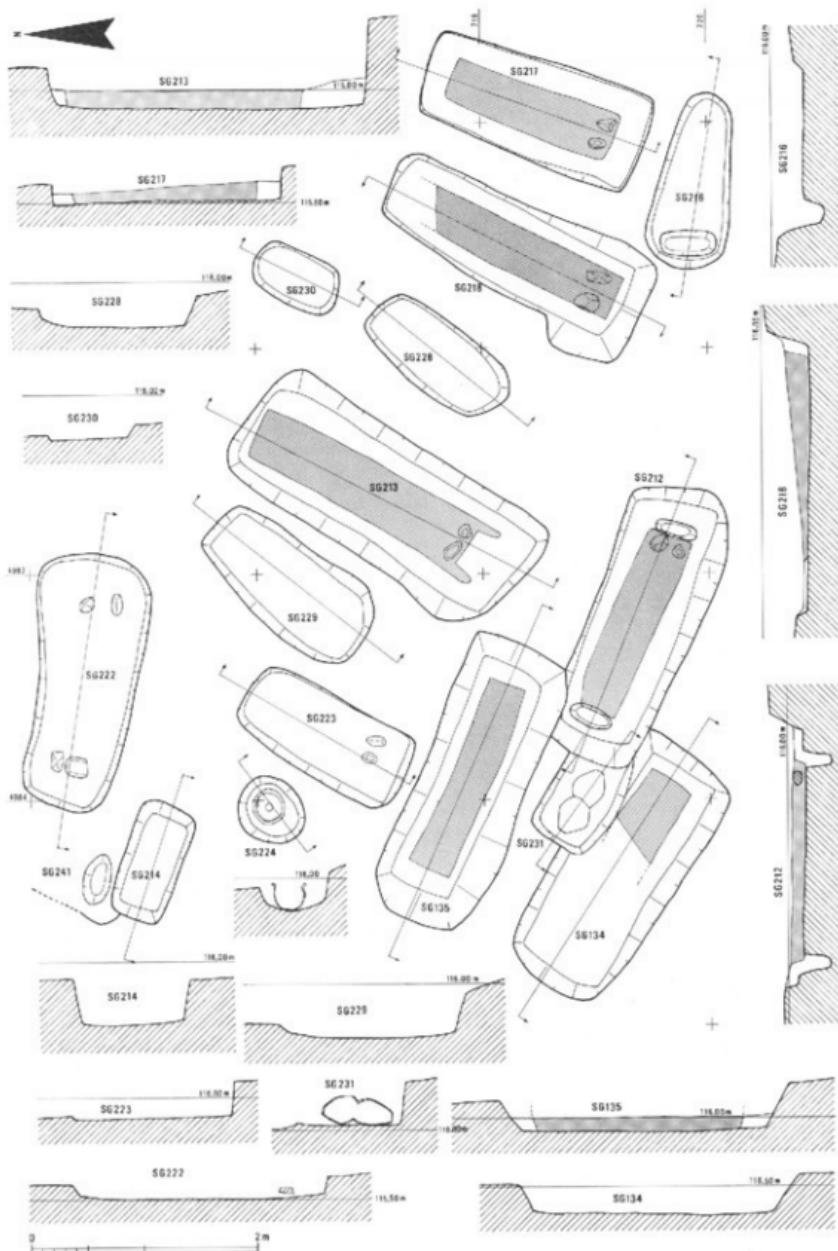


図36 木棺墓SG241・SG214・SG222・SG223・SG229・SG213・SG230・SG228・SG135・SG134・SG212・SG218・SG217・SG216,木棺蓋SG224・SG231 (1:50)

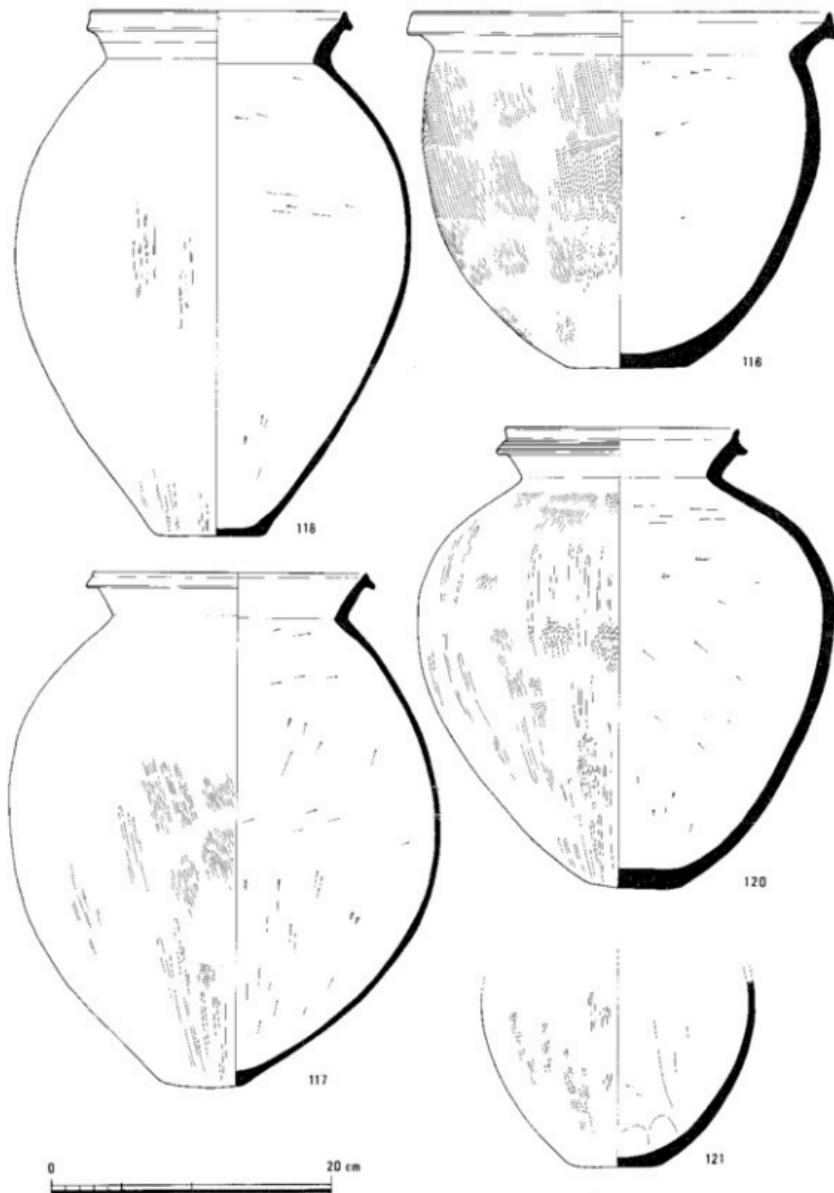


図37 瓦棺墓SG224・SG231、木棺墓SG232出土遺物 (1:4) (116はSG224、120・121はSG232、他はSG231)

S G 229 (図36) 木棺墓 S G 229は、S G 223の東1.4mにある。中軸線は北で東に約38度振れ、等高線と直交する。掘形は長方形で、長辺1.65m、短辺75cm、深さ40cm。

S G 213 (図36、図版22) 木棺墓 S G 213は、S G 229の南東1.1mにある。中軸線は北で東に約28度振れ、等高線と直交する。掘形は長方形で、長辺2.8m、短辺1.1m、深さ80cm。掘形内に長辺2.1m、短辺50cmの木棺痕跡を検出した。南東側で木棺側板が小口板より外方に延びる。木棺痕南東短辺ぎわに枕石2個があり、遺体は南東頭位と考えられる。弥生土器若干が出土したが、時期は不明。

S G 230 (図36) 木棺墓 S G 230は、S G 213の北東2.1mにある。中軸線は北で東に約26度振れ、等高線と直交する。掘形は長方形で、長辺80cm、短辺45cm、深さ12cm。遺物は出土しなかった。

S G 228 (図36) 木棺墓 S G 228は、S G 213の東1.4mにある。中軸線は北で東に約39度振れ、等高線と直交する。掘形は長方形で、長辺1.4m、短辺63cm、深さ26cm。遺物は出土しなかった。

S G 135 (図36) 木棺墓 S G 135は、S G 223の南1.3mにある。中軸線は北で西に約66度振れ、等高線と平行する。掘形は長方形で、長辺2.6m、短辺90cm、深さ40cm。木棺痕跡は長方形で、長辺1.76m、短辺35cm。弥生土器数片が出土したが、時期は不明。

S G 231 (図36・37、図版28上) 墓棺墓 S G 231は、S G 135の南1.0mにある。中軸線は北で西に約55度振れ、等高線と平行する。木棺墓 S G 134・S G 212と切合うが、先後関係は不明。掘形は長方形で、復元長辺約1m、短辺65cm、深さ38cm。墓棺は土壤の中央に、2個の甕がほぼ水平に口を合わせた状態で置かれていた。118 (図版38下) は変形土器の完形個体である。口径18.0cm、胴部最大径27.8cm、器高37.6cm。口縁端部が上下に少し拡張する。胴部最大径は中央よりやや上位にあり、底は平底である。調整技法は、口縁部外面が横ナデ、頭部及び胴部外面と口縁部内面はヘラ磨き、胴部内面はヘラ削りである。胎土は1~2mmの白・灰色砂粒を少数含み、色調は黄褐色である。117 (図版38上) は変形土器である。口頭部の大半を欠くが、ほぼ完形に復元しうる。胴部最大径30.4cm、復元器高約37cm。口縁端部は肥厚する。胴部最大径は中央にあり、底は小さい平底である。調整技法は口縁部外面が横ナデ、頭部及び胴部外向がヘラ磨きで、胴部に網目状の痕跡が残る。口縁部内面はヘラ削り、胴部内面上半は横方向のヘラ削り、同下半は縱方向のヘラ削りである。胎土は1~2mmの白・灰色砂粒を少数含み、色調は黄褐色である。これらの土器はⅡ期に編年される。

S G 134 (図36) 木棺墓 S G 134は、S G 231に南接してある。中軸線は北で西に約57度振れ、等高線と平行する。掘形は長方形で、長辺2.4m、短辺1.05m、深さ35cm。南東側で幅約45cmの木棺痕跡の一部を検出した。弥生土器若干が出土した。ⅠないしⅡ期と推定される。

S G 212 (図36) 木棺墓 S G 212は、墓棺墓 S G 231に東接してある。中軸線は北で西に

約68度振れ、等高線と平行する。掘形は長方形で、長辺2.5m、短辺95cm、深さ30cm。両短辺のやや内側に小口穴がある。梢円形で深さ28cm。両小口穴の間に長辺1.7m、短辺34cmの長方形の木棺痕跡を検出した。木棺痕の東端に枕石2個があり、遺体は東頭位と考えられる。

S G 218 (図36、図版24上) 木棺墓S G 218は、S G 228の東南東1.2mにある。中軸線は北で東に約20度振れ、等高線と直交する。掘形は長方形で長辺2.5m、短辺80cm、深さ40cm。木棺痕跡は長方形だが、北東側は明確でない。幅40cm。木棺痕の南端ぞいに枕石2個が置かれており、遺体は南頭位と考えられる。弥生土器数片が出土したが、時期は不明。

S G 217 (図36、図版23) 木棺墓S G 217は、S G 218の東1.3mにある。中軸線は北で東に約20度振れ、等高線と直交する。掘形は長方形で、長辺2.05cm、短辺90cm、深さ30cm。木棺痕跡は長方形で長辺1.54cm、短辺45cmで、南側の長辺側板は小口板の外方に延びている。木棺痕の南端に枕石2個が置かれており、遺体は南頭位と考えられる。遺物は出土しなかった。

S G 216 (図36、図版23) 木棺墓S G 216は、S G 217の南々西1.6mにある。中軸線は北で西に約80度振れ、等高線と斜交する。掘形は隅丸長方形で長辺1.55m、短辺65cm、深さ23cm。西端に梢円形の小口穴がある。深さ17cm。遺物は出土しなかった。

S G 237 (図38・39、図版28下) 墓棺墓S G 237は、S G 217の東2.7mの丘陵東斜面にある。墓棺の中軸線は北で西に約29度振れ、等高線と平行する。S G 227と切合うが、先後関係は不明。掘形は隅丸長方形で、長辺80cm、深さ15cm。墓棺は2個の壺がほぼ水平にL字を合わせた状態で置かれていた。110(図版37下)は北側のもので、壺形土器のほぼ完形個体である。口径14.6cm、胴部最大径26.0cm、器高31.1cm。L字縫部は肥厚し、外面に3条の浅い凹線文がめぐる。胴部最大径は中央よりやや上位にあり、底は平底である。調整技法は頭部及び胴部外面と口頭部内部がヘラ磨きで、胴部外面下半に刷毛目痕が残る。胴部内面上半は左横方向、同下半は斜め方向のヘラ削りである。外面と口頭部内部に煤が付着する。胎土は0.5~4mmの白・灰色砂粒を多く含み、色調は赤褐色である。109は壺で口頭部を故意に打ち欠いている。胴部最大径は27.5cmで、中央よりやや上位にある。底は平底。外面はヘラ磨き、内面上半は左横方向、同下半は縦方向のヘラ削り調整が施される。内外面に丹が塗られる。胎土は0.5~4mmの白・灰色砂粒を多く含み、色調は燈褐色である。他に別個体の壺の破片があるが、全形は知りえない。これらの土器はⅡ期に編年される。

S G 227 (図38) 木棺墓S G 227は、S G 237に西接してある。中軸線は北で西に約48度振れ、等高線と平行する。S G 248と切合うが、先後関係は不明。掘形は長方形で、短辺60cm、深さ40cm。遺物は出土しなかった。

S G 248 (図38) 木棺墓S G 248は、S G 227の東南に切合ってある。中軸線は北で西に約38度振れ、等高線と直交する。掘形は長方形で、長辺95cm、短辺65cm、深さ50cm。遺物は出土しなかった。

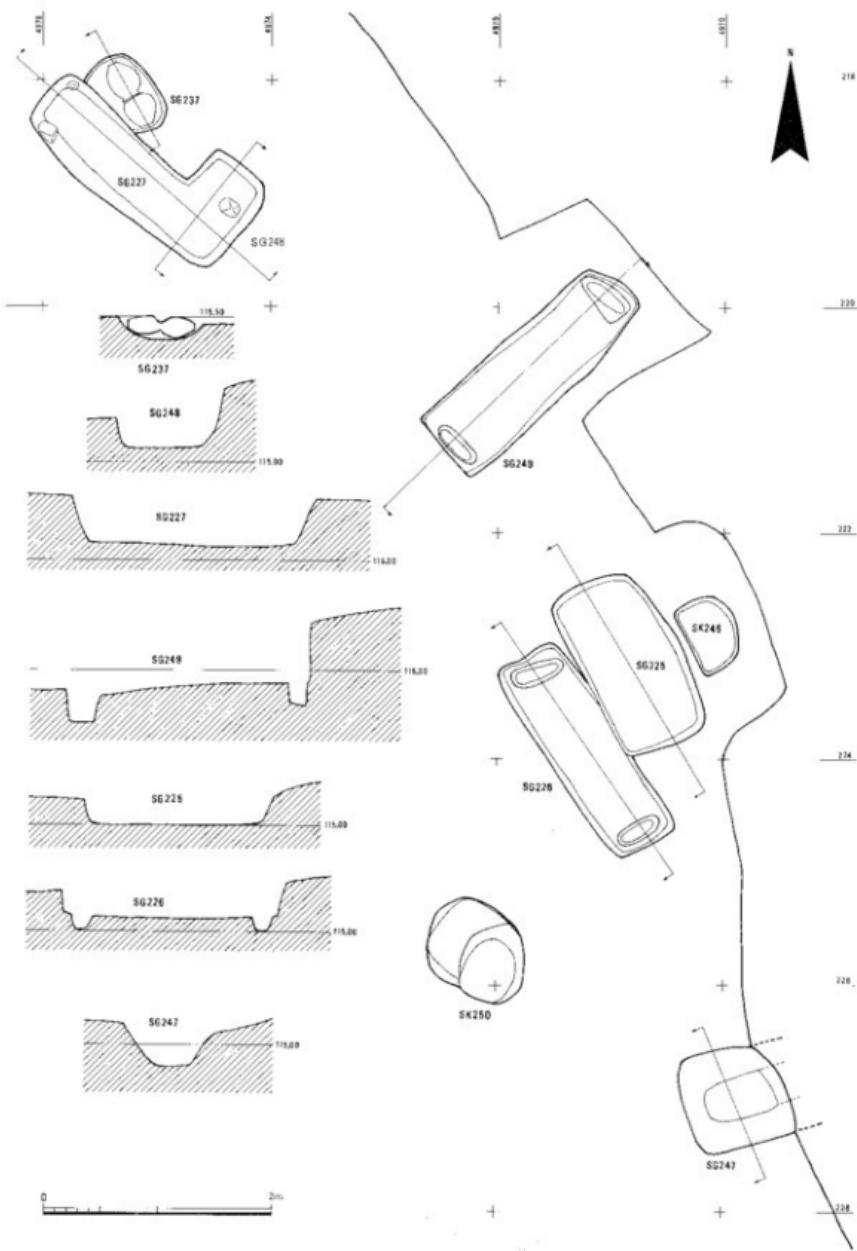


図38 瓦棺墓SG237、木棺墓SG227・SG248・SG249・SG225・SG228・SG226・SG247 (1:50)

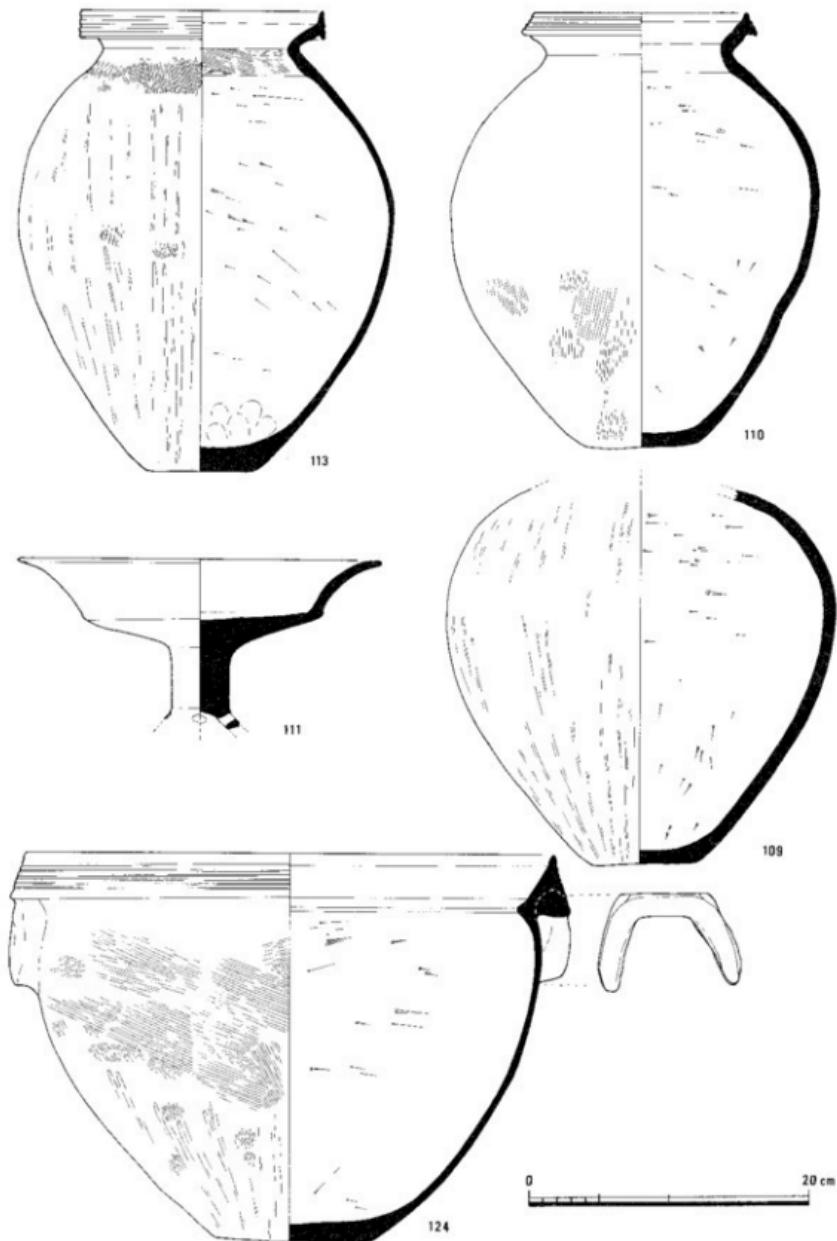


図39 瓦棺墓SG237・SG66、木棺墓SG221出土遺物（1:4）（113・111はSG66、124はSG221、他はSG237）

S G 249 (図38) 木棺墓 S G 249は、S G 248の東南東約3.2mにある。中軸線は北で東に約46度振れ、等高線と直交する。掘形は長方形で、長辺2.15m、短辺70cm、深さ55cm。長辺両端に小口穴がある。平面は隅丸長方形で、長辺40~45cm、深さ20~23cm。弥生土器甕の破片が出土したが、時期は不明。

S G 225 (図38、図版26上) 木棺墓 S G 225は、S G 249の南々東2.8mにある。中軸線は北で西に約31度振れ、等高線と平行する。掘形は長方形で、長辺1.65m、短辺90cm、深さ25cm。遺物は出土しなかった。

S G 226 (図38、図版26上) 木棺墓 S G 226は、S G 225の南西に切合ってあるが、先後関係は不明。中軸線は北で西に約35度振れ、等高線と平行する。掘形は長方形で、長辺2.0m、短辺65cm、深さ30cm。長辺両端に小口穴がある。隅丸長方形で、長辺40~50cm、深さ約10cm。遺物は出土しなかった。

S G 247 (図38) 木棺墓 S G 247は、S G 226の南東3.4mにある。中軸線は北で東に約71度振れ、等高線と直交する。掘形は長方形と思われるが、東側は削り取られている。短辺90cm、深さ35cm。

S G 244 (図40) 木棺墓 S G 244は、S G 24247の西南西2.6mにある。中軸線は北で東に約81度振れ、等高線と直交する。掘形は長方形だが西端は別の土坑により抉られている。短辺60cm、深さ25cm。遺物は出土しなかった。

S G 236 (図40、図版23上) 木棺墓 S G 236は、S G 244の東南東1.9mにある。中軸線は北で東に約80度振れ、等高線と直交する。掘形は長方形で、長辺2.5m、短辺1.1m、深さ70cm。長辺両端にそれぞれ小口穴がある。小口穴は楕円形で、深さは西穴が40cm、東穴が30cmである。掘形内に長方形の木棺痕跡を検出した。長辺2.3m、短辺55cm。弥生土器十数片が出土したが、時期は不明。

S G 149 (図40) 木棺墓 S G 149は、S G 236の西5.7mにある。中軸線は北で西に約5度振れ、等高線と平行する。S G 150と切合うが、先後関係は不明。掘形は長方形で長辺2.6m、深さ35cm。長辺両端のやや内側にそれぞれ小口穴を検出した。楕円形で長径約60cm、短径20~30cm、深さ約20cm。

S G 150 (図40) 木棺墓 S G 150は、S G 149の東に切合ってある。中軸線は北で西に約5度振れ、等高線と直交する。掘形は長方形で、長辺3.0m、短辺1.3m、深さ45cm。長辺両端のやや内側にそれぞれ小口穴を検出した。楕円形で長径60cm、短辺30cm、深さは両穴とも25cm。両穴の心々距離は1.9mである。S G 149・S G 150両者から弥生土器十数片が出土した。IないしII期に属すると思われる。

S G 233 (図40、図版24下) 木棺墓 S G 233は、S G 236の南々西2.1mにある。中軸線は北で東に約87度振れ、等高線と直交する。掘形は長方形で、長辺2.45m、短辺1.1m、深さ50cm。

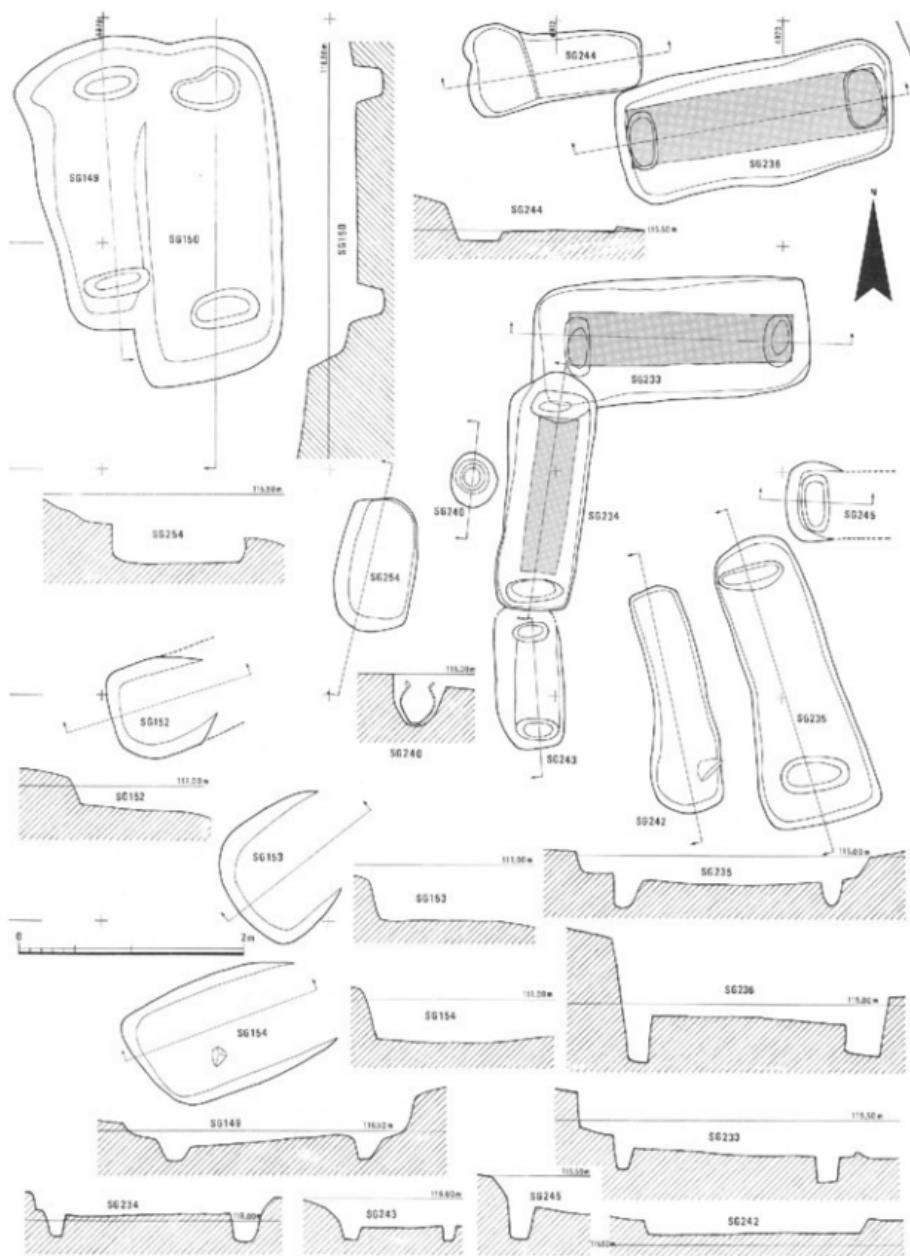


图40 木棺基 SG244・SG236・SG149・SG150・SG233・SG234・SG254・SG243・SG242・SG235・
SG245・SG152・SG153・SG154, 銀棺基 SG240 (1:50)

m。長辺両端のやや内側にそれぞれ小口穴を検出した。楕円形で長径45~50cm、短径20~25cm、深さは東穴が25cm、西穴が30cm。両小口穴にそって木棺痕跡を検出した。木棺は長方形で長辺2.0m、短辺45cmを測る。棺外理積土から弥生土器2片と石庖丁1個が出上した。石庖丁はほぼ完形で、2箇所の穿孔がある。材質は緑色片岩。時期は不明。

S G 234 (図40、図版25下) 木棺墓 S G 234は、S G 233の南西に切合ってあり、S G 234が新しい。中軸線は北で東に約8度振れ、等高線と斜交する。掘形は長方形で、長辺2.1m、短辺70cm、深さ15cm。長辺両端に小口穴を検出した。楕円形で長径50cm、短径20~35cm、深さは北穴が25cm、南穴が20cm。両小口穴の間に木棺の痕跡を検出した。木棺は長方形で、長辺1.4m、短辺35cm。遺物は出土しなかった。

S G 240 (図40・41、図版29下) 墓棺墓 S G 240は、S G 234の西70cmにある。掘形は楕円形で、長径50cm、短径40cm、深さ45cm。棺は115(図版40上)の壺を垂直に立てていた。115は旋形土器で、口径24.0cm、胴部最大径31.4cm、器高40.2cm。口縁端部は肥厚し、上方に若干拡張する。胴部最大径は中央よりやや上にあり、底は明瞭な半底である。調整技法は、口縁部外面は横ナデ、胴部外面は刷毛目、口縁部内面はヘラ磨き、胴部内面は左横方向のヘラ削りである。外面に丹影の痕跡があり、煤が付着する。II期に編年される。

S G 254 (図40) 木棺墓 S G 254は、S G 240の南西1.1mにある。中軸線は北で東に約14度振れ、等高線と斜交する。掘形は長方形で、長辺1.2m、短辺70cm、深さ35cm。遺物は出土しなかった。

S G 243 (図40、図版25下) 木棺墓 S G 243は、S G 234に巾接してある。中軸線は北で西に約4度振れ、等高線と平行する。掘形は長方形で復元長辺1.3m、短辺60cm、深さ15cm。長辺両端にそれぞれ小口穴を検出した。楕円形で長径30~35cm、短径18cm、深さ約13cm。遺物は出土しなかった。

S G 242 (図40) 木棺墓 S G 242は、S G 243の東1.3mにある。中軸線は北で西に約13度振れ、等高線と平行する。掘形は長方形で、長辺2.0m、短辺45cm、深さ13cm。遺物は出土しなかった。

S G 235 (図40) 木棺墓 S G 235は、S G 242の東1.0mにある。中軸線は北で西に約18度振れ、等高線と平行する。掘形は長方形で、長辺2.6m、短辺80cm、深さ25cm。長辺両端のやや内側で小口穴を検出した。楕円形で長径約60cm、短径20~30cm、深さは北穴が20cm、南穴が25cmである。遺物は出土しなかった。

S G 245 (図40) 木棺墓 S G 245は、S G 235の北1.6mにある。掘形は長方形と思われるが、大部分削り取られ西端部を残すのみである。中軸線は東西方向をとり、等高線と直交する。掘形の深さ25cm。小口穴は隅丸長方形で、長辺50cm、短辺25cm、深さ30cm。遺物は出土しなかった。

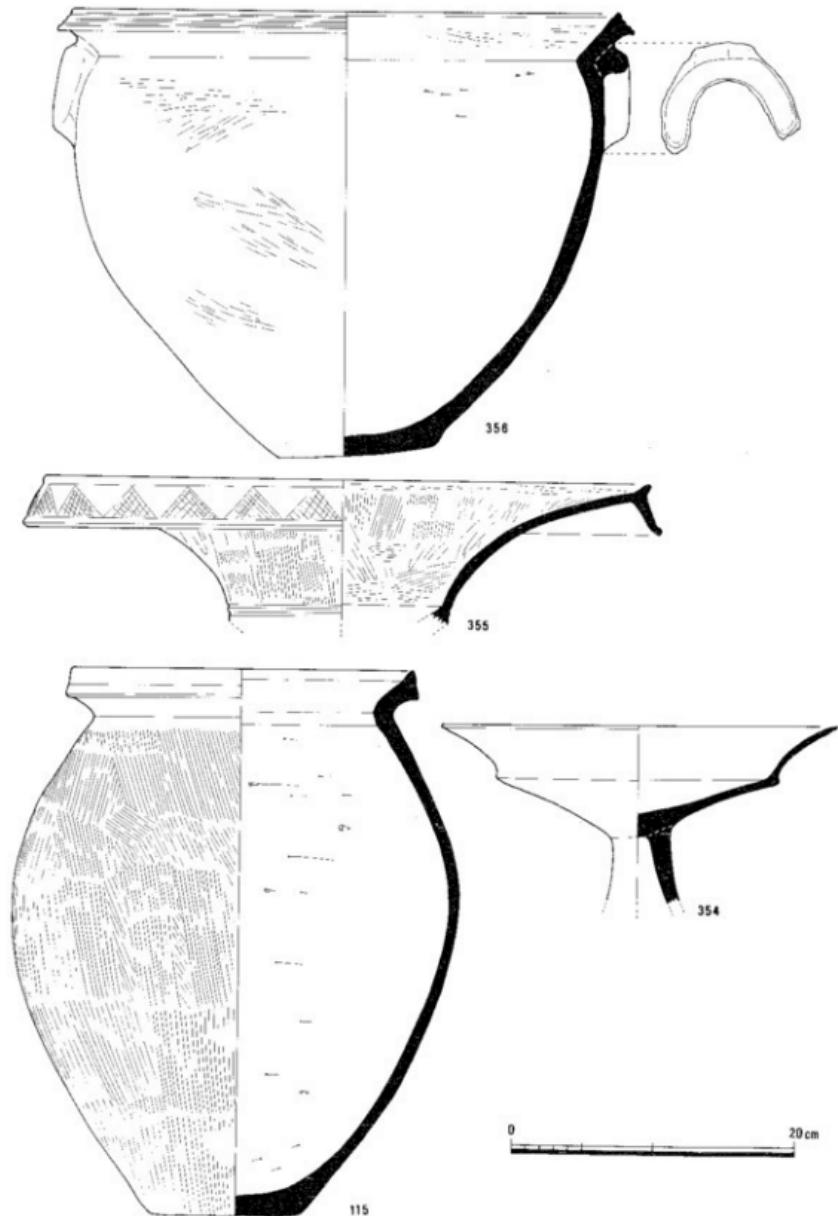


図41 横棺基SG240、遺構SX219出土遺物（1:4）（115はSG240、他はSX219）

S G 152 (図40、図版27上) 木棺墓 S G 152は、S G 254の南西2.2mにある。中軸線はおよそ北で東に70度振れ、等高線と直交する。掘形は長方形と思われるが、東半分は削りとられている。短辺85cm、深さ25cm。弥生上器壺1片が出土した。IないしII期と思われる。

S G 153 (図40、図版27上) 木棺墓 S G 153は、S G 152の南々東1.8mにある。中軸線は北で東におよそ50度振れ、等高線と斜交する。掘形は長方形と思われるが、東半分は削り取られている。短辺1.05m、深さ35cm。弥生上器若干が出土したが、時期は不明。

S G 154 (図40) 木棺墓 S G 154は、S G 153の南西1.5mにある。中軸線は北で東に約69度振れ、等高線と直交する。掘形は長方形だが、東端は削り取られている。短辺1.05m、深さ45cm。西辺で枕石状の石1個を検出した。これがもし枕石だとすれば、遺体は西頭位となる。弥生上器若干が出土したが、時期は不明。

S G 220 (図42) 木棺墓 S G 220は、S G 154の東2.8mにある。中軸線は北で西に約30度振れ、等高線と斜交する。掘形は長方形で、長辺2.0m、短辺60cm、深さ40cm。長辺両端でそれぞれ小口穴を検出した。楕円形で長辺45cm、短辺15cm、深さは北穴が9cm、南穴が12cm。遺物は出土しなかった。

S G 232 (図37・42、図版26下) 木棺墓 S G 232は、S G 220の東2.3mにある。中軸線は北で東に約81度振れ、等高線と直交する。掘形は隅丸長方形で、長辺2.8m、短辺1.2m、深さ60cm。長辺両端のやや内側に一对の小口穴を検出した。楕円形で、長辺50~60cm、短辺約25cm、深さ30cm。埋積十の棺外北側から弥生土器が一括状態で出土した。120は壺のほぼ完形個体である。口径16.4cm、肩部最大径29.3cm、器高33.1cm。口縁端部は上下に拡張し、外面に凹線文風凹凸がある。肩部はよく張り、その最大径は上方にある。底は平底。調整技法は、頸部・胴部外面と口頭部内面がヘラ磨きで、肩部外面に刷毛目の痕跡が残る。胴部内面はヘラ削り。外面全面と口頭部内面に丹彩が施される。胎土は1~2mmの白・灰色砂粒を多く含み、色調は澄褐色である。121は壺の下半部である。外面に煤が付着する。他にも別個体の若干の破片がある。これらはII期に編年される。

S G 276 (図42) 木棺墓 S G 276は、S G 232に南接してある。S G 232、S G 257と切合するが、先後関係は不明。掘形は長方形と思われるが、北辺と東辺は不明。中軸線は北で東に約80度振れ、等高線と直交する。小口穴は楕円形で、長辺約50cm、短辺20~30cm、深さ約20cm。両小口穴間の距離は2.0mである。遺物は出土しなかった。

S G 257 (図42) 木棺墓 S G 257は、S G 276に南接してある。S G 276、S G 253と切合するが、先後関係は不明。中軸線は北で東に約85度振れ、等高線と直交する。掘形は判然とせず、一对の小口穴が検出されたのみである。小口穴は楕円形で、長辺35cm、短辺25cm、深さ15cm。両小口穴間の距離は90cmである。遺物は出土しなかった。

S X 219 (図41・42) 蓋構 S X 219は、S G 232、S G 276、S G 257と重複してあるが、

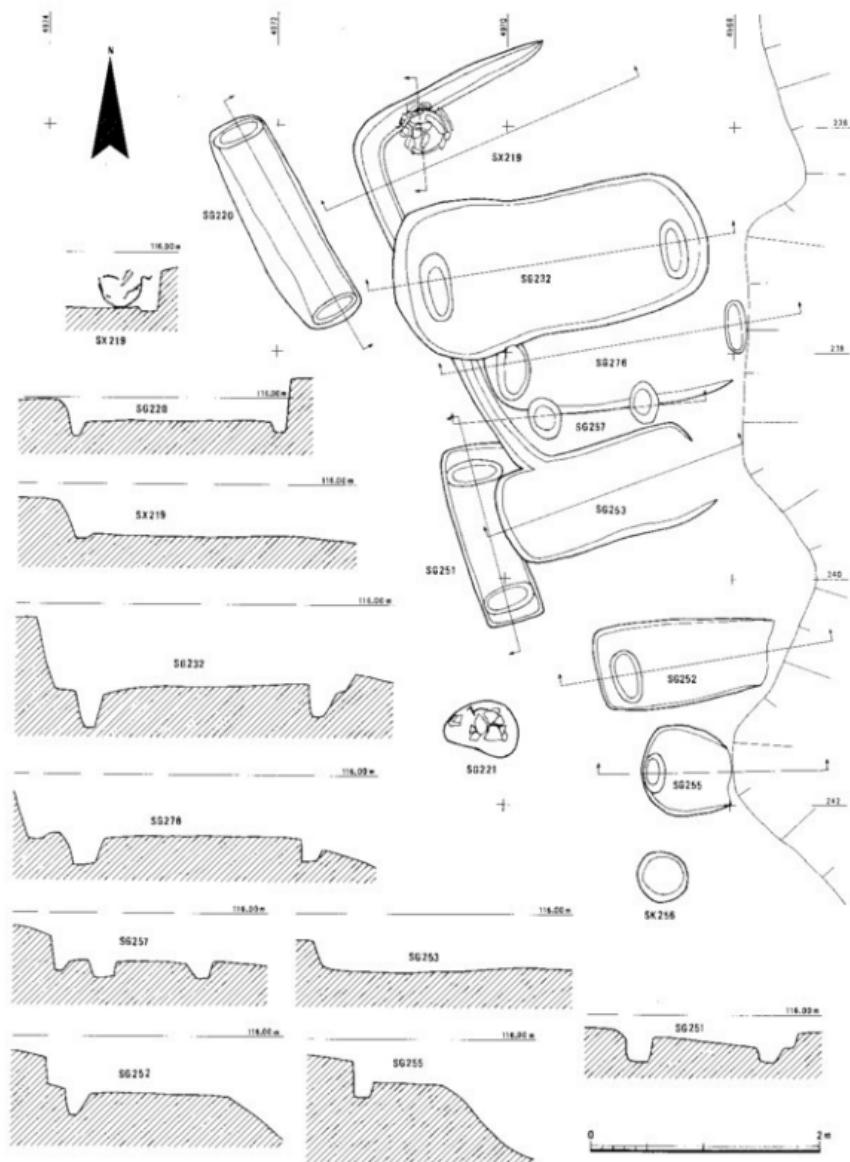


図42 木棺基SG220・SG232・SG276・SG257・SG251・SG253・SG252・SG255・棗柱SG221、造橋
SX219 (1:50)

先後関係は不明。方形の豊穴遺構だが、東側は削り取られている。床面までの深さ約30cm。周囲に幅約20cm、深さ約5cmの樹溝がある。北西隅から弥生土器が一括状態で出土した。356(図版39上)は鉢の完形個体である。口径39.2cm、胴部最大径37.8cm、器高31.7cm。口縁部外面に円線文風の凹凸がある。胴部最大径は上端付近にあり、底は平底である。頸部に一对の半円状の把手を貼り付けるが、片方は残存しない。調整技法は胴部及び頸部外面と口縁部内面がヘラ磨き、胴部内面がヘラ削りのち粗いヘラ磨きが施される。外面とも丹彩の痕跡があり、外面に煤が付着する。胎土は1~3mmの白・灰色砂粒を少數含み、色調は赤褐色を呈する。355は、高杯の杯部と思われる。杯部口径43.2cm。端部は斜め下方に大きく垂れ、その外面にヘラ引きの鋸歯文が彫かれる。鋸歯文内は格子目文で充填される。杯部は大きく外張し、現存部下端で内側に屈曲する。調整技法は内外面とも刷毛目のち粗いヘラ磨きである。外面とも丹彩の痕跡がある。胎土は1~5mmの白・灰色砂粒を多く含み、焼褐色を呈する。354は高杯で脚裾部を欠く。杯部口径28.8cm、脚筒部最小径3.9cm。杯部は中程で屈曲し、外汾しながら大きく開く。内外面ともヘラ磨き調整で、丹彩の痕跡がある。胎土は1mm程の白・黒色砂粒を多く含み、黄褐色を呈する。以上の土器はⅡ期に編年される。S X219の性格は不明だが、時期的にSG232と一致すること、この付近に墓以外の弥生時代遺構が頗るから、木棺墓と関連するものと推定される。

S G 251(図42) 木棺墓SG251は、SG232の南々西2.5mにある。中軸線は北で西に約15度振れ、等高線と平行する。掘形は長方形で、長辺1.5m、短辺50cm、深さ10cm。長辺両端のやや内側に一对の小口穴を検出した。楕円形で、長径約50cm、短径約20cm、深さは北穴が13cm、南穴が24cm。遺物は出土しなかった。

S G 253(図42) 木棺墓SG253は、SG251の東に切合ってあるが、先後関係は不明。中軸線は北で東に約70度振れ、等高線と直交する。掘形は長方形で、長辺約1.9m、短辺90cm、深さ27cm。遺物は出土しなかった。

S G 221(図39・42) 壺棺墓SG221は、SG251の南1.7mにある。掘形は不整楕円形で長径65cm、短径50cm、深さ15cm。棺は124の鉢形上器である。はは完形に復元され、復元口径約38cm、胴部最大径35.8cm、器高27.5cm。口縁罐部は上下に拡張し、その外面に四線風の凹凸がめぐる。脚部最大径は上端付近にあり、底は明瞭な平底である。頸部に一对の半円状の把手を貼り付ける。調整技法は頸部外面と口縁部内面がヘラ磨き、胴部外面が刷毛目のち粗いヘラ磨き、胴部内面が左横方向のヘラ削りである。外面と口縁部内面に丹彩の痕跡がある。胎土は1~6mmの白・灰色砂粒を多く含み、黄褐色を呈する。Ⅱ期に編年される。

S G 252(図42) 木棺墓SG252は、SG221の東1.9mにある。中軸線は北で東に約80度振れ、等高線と直交する。掘形は長方形だが、東端は削り取られている。短辺75cm、深さ30cm。西端のやや内側に小口穴を検出した。楕円形で長径45cm、短径25cm、深さ20cm。遺物は出土し

なかった。

S G 255 (図42) 木棺墓 S G 255は、S G 252の南1.0mにある。掘形は隅丸長方形と思われるが、東半部は削り取られている。推定中軸線はほぼ真東西方位である。短辺80cm、深さ18cm。西端で小口穴を検出した。楕円形で長径35cm、短径18cm、深さ13cm。遺物は出土しなかった。

S G 31 土壙墓 S G 31は、S II 33の北東約7m、S G 255の南々西約49mの丘陵東肩部にある。上墳は長方形で長辺2.15m、短辺85cm、深さ25cm。中軸線はほぼ真北方位をとる。埴積土から弥生土器若干が出土したが、時期は不明。

S G 32 土塼墓 S G 32は、S G 31の東1.0mにある。中軸線は北で西に約8度振れ、等高線と平行する。土塼は長方形で、長辺1.85m、短辺70cm、深さ25cm。埴積土から弥生土器数十片、土塼上面から供獻状に鼓形器台1個体分などが出土した。Ⅳ期に編年される。

S G 66 (図39、図版27下) 墓棺墓 S G 66は、S G 31の南々西約81mの丘陵西斜面にある。弥生時代遺構のうち最も南にある。掘形は楕円形で、長径85cm、短径70cm、深さ35cm。棺は掘形の南西にやや片寄って、113の窓がほぼ垂直に立てられていた。113(図版39下)は妻のほぼ完形個体である。口徑17.1cm、胴部最大徑26.5cm、器高33.0cm。口縁端部は上下に拡張し、外面に3条の凹線文がめぐる。胴部最大径は中央付近にあり、底は平底である。調整技法は、頸部・胴部外面と口縁部内面がヘラ削きで、頸部外面に刷毛目が残る。頸部内面は刷毛目、胴部内面は左横ないし斜め方向のヘラ削りである。外面と口頸部内面に丹彩が施される。胎土は0.5~2mmの白・灰色砂粒を多く含み、燈褐色を呈する。111は高杯でおそらく天地逆にして113の上に蓋状に置かれていたと推定される。脚裾部を欠くが、割れ目は新しく、表土を除去した際重機でこわされたのであろう。杯部径25.7cm、筒部径4.0cm。杯部は途中で屈曲し、外湾しながら大きく開く。外面の屈曲部直上と杯端部上面にそれぞれ1条の沈線をもつ。脚筒部は細長く、裾部との境界部に4箇所の円形透し孔がある。杯部内外面と脚部外面向に丹彩が施される。胎土は0.5~4mmの白・灰色砂粒を多く含み、燈褐色を呈する。Ⅱ期に編年される。

上記の遺構以外に、多数の土坑、溝、柱穴などがある。

2 古墳時代の遺構・遺物

丘陵上に8基の古墳が検出された。標高132mの最高部にS M 1があり、そこから北々西方に向に逆S字形に延びる尾根上にS M 2~S M 8の7基が並んでいる。このうち、S M 1は前方後円墳、S M 2・S M 4・S M 8の3基は円墳、S M 3・S M 5・S M 6・S M 7の4基が方墳である。S M 1~3の3基は尾根の中心線上にあるのに対し、S M 4~7の4基は尾根の東

肩部、SM 8 はその西肩部に築かれている。また、SM 4 ~ 7 の 4 基はほぼ等間隔に整然と配置されている。これらのうち、SM 1 の墳丘測量調査と SM 2 ~ SM 8 の発掘調査を実施した。

SM 1 (図44) 古墳 S M 1 は丘陵最高部に立地する前方後円墳である。現状保存が図られた。全長32m、後円部径17m、同高3m、前方部最大幅13m、同高1.5mを測る。低平な前方部は南に向かう。推定中軸線と座標北との偏倚角は約 N 23° 20' W である。前方部の南西側が墓地のため削り取られているが、それ以外の墳丘の遺存状態は良好である。墳丘斜面には河原石の葺石はあるが、埴輪は確認されていない。埋葬施設などは不明である。

SM 2 (図45・46・54、図版41) 古墳 SM 2 は、SM 1 の北西約105m の丘陵々線上にある円墳である。東西直径10.5m、高さは北側で1.0m、西側で40cm、東側で2.1mである。墳丘は地山を平らに成形したのち、盛土を盛り上げたものだが、現状の盛土は厚さ約40cmのみで、上半部は流失している。盛土は淡褐色微砂質土で墳丘外の土とほとんど区別しがたかった。北側の上層断面で幅1.15m、深さ20cmの周溝を検出したが、平面で確認することはできなかった。墳丘中心より北東に片寄った、墳丘最高部の位置で竪穴式石室を検出した。堆山上に薄く粘土をおき、その上に長径30~40cm程の河原石を2列2段に積み、短辺側は扁平な河原石を垂直に立て側石とする。石と石の間には粘土が充填される。石室の北東隅は破壊され、天井石も残存しなかった。かつての乱掘によるものであろう。石室内法は長辺約1.9m、短辺35cm、深さ35cmを測る。石室の掘形は検出されず、盛土築成前に築かれたものと考えられる。

遺物は東南区周溝から土師器1個体、墳丘盛土内などから弥生土器コンテナ1個分、北東区



図43 古墳群の分布 (1:2500)

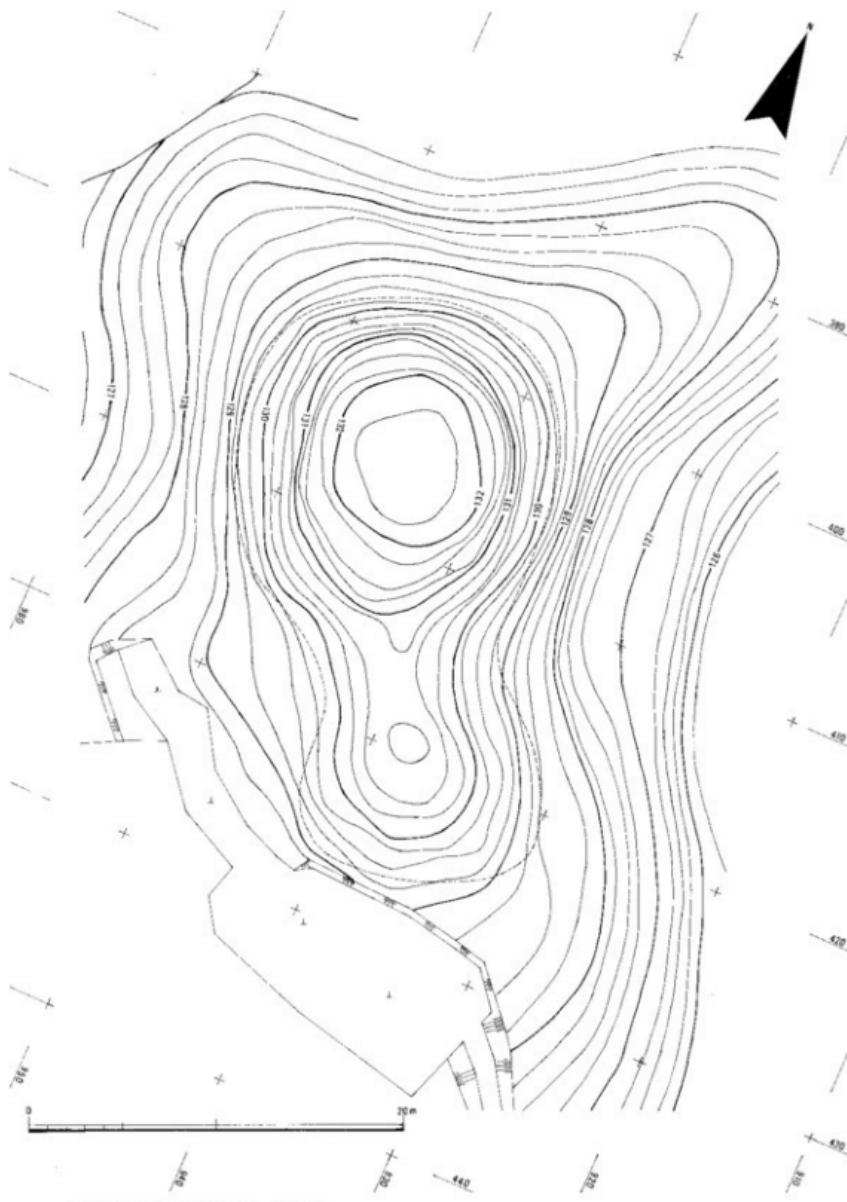


図44 古塘SMI塘丘測量図 (1:300)

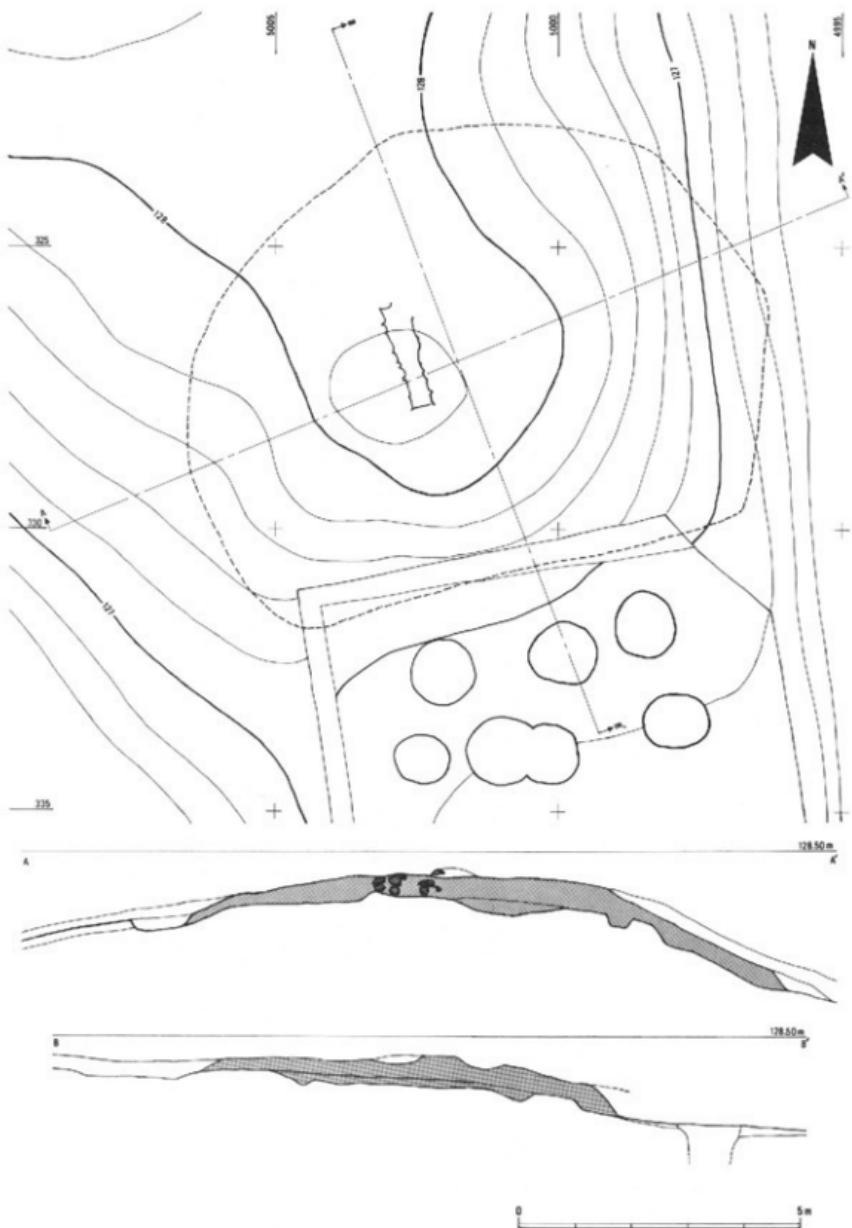


図45 古墳SM 2 (1:100)

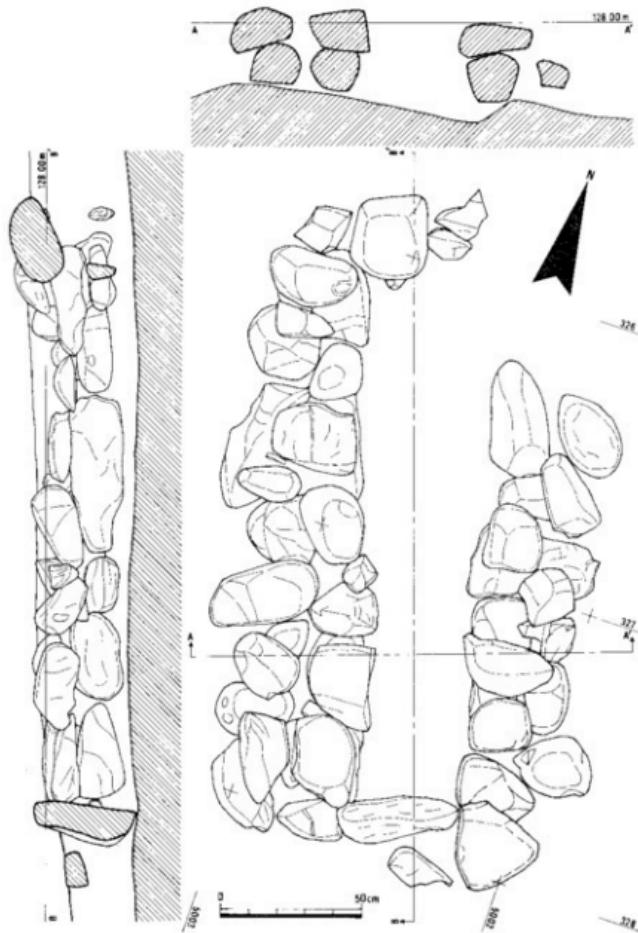


図46 古墳SM 2 積穴式石室 (1: 20)

から勝間田焼碗1点が出土した。弥生土器と勝間田焼はともに混入であり、土師器が本墳に伴うものである。501(国版52下)は土師器高杯で、ほぼ完形に復元される。底径10.9cm、器高9.4cm。杯部は大きく開き端部は丸い。脚筒部は八字形を呈し、根部は水平方向に括がる。調整技法は杯部外面が刷毛目、脚部外面が刷毛目のちりめいヘラ磨き、筒部内面が左横方向のヘラ削り、裾部内面が刷毛目である。胎土は1~2mmの白・灰色砂粒を多く含み、黄褐色を呈する。正善庵遺跡古墳時代Ⅰ期¹¹⁾と類似し、5世紀後半頃に位置づけられる。

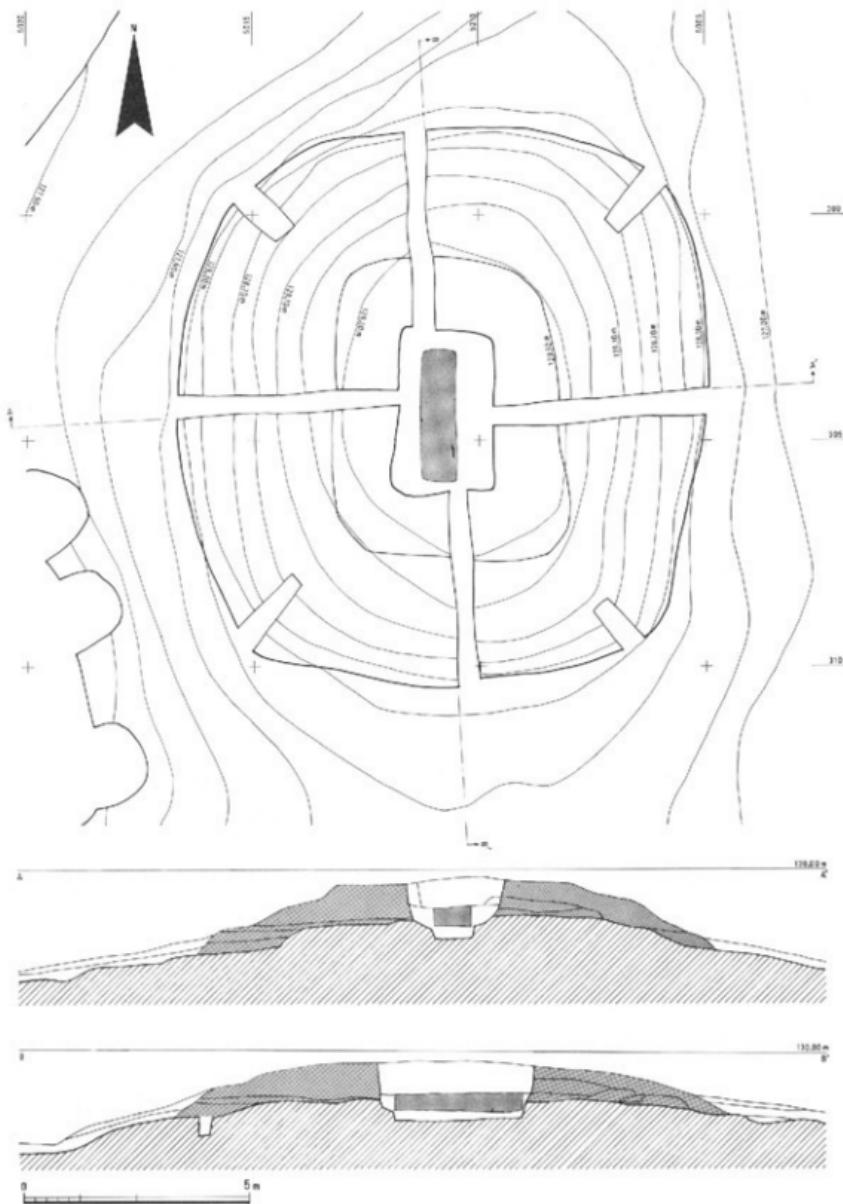


图47 古墳SM 3 (1:125)

S M 3 (図47、図版42) 古墳 S M 3 は、S M 2 の北々西約25mの丘陵線上で、調査区内の最高所にある。方墳で南北12.4m、東西11.8m、高さ1.7mを測るが、四隅は封土が流失して隅丸形状となっている。墳丘中軸線は真北方位をとる。南北の上層断面で幅約1m、深さ約15cmの周溝を検出したが、平面では確認できなかった。埴輪・葺石は存在しない。墳丘中央で木棺の痕跡を検出した。墓床は長方形で長辺3.5m、短辺1.9m、深さ1.35mで、現墳丘上面から掘られていた。この墓床底のやや西よりに、長辺3.2m、短辺1.1m、深さ20cmの長方形土壙を穿ち、それを埋め立てたのち木棺が置かれる。木棺は長方形箱形で、長辺2.85m、短辺80cm、厚さ35cmを測る。木棺底面は墳丘上面下1.15mにある。木棺の短辺で粘土層を検出した。木棺及び墓床中軸線とともにほぼ真北方位をとる。棺内の東南隅底部で、鉄製短剣1口、鉄製ヤリガナ片1口、棺中央西端底部で鉄製ヤリガナ片1口が出土した。他に墳丘盛土、墓壙内などからコンテナ4箱分の弥生土器が出土したが、下層遺構からの混入である。

S M 4 (図48、図版44) 古墳 S M 4 は、S M 3 の北々東約22mの丘陵々線上のやや東寄りにある。円墳で東西径6.8m、南北径6.4m、高さは西側で45cm、東側で95cmである。堅穴住居 S H 33 と切合い関係にあり、S M 4 が新しい。墳丘は地山を平坦に成形したのち、暗褐色微砂質土を盛り上げたもので、封土は現状で約40cmが残存するのみである。埋葬施設はすでに流失しているが、木棺直葬と推定される。南側と西側に幅1~1.4m、深さ約20cmの周溝が検出されたが、北側と東側では確認できなかった。墳丘盛土などからコンテナ3箱分の弥生土器が出土したが、下層遺構からの混入である。

S M 5 (図49、図版45上) 古墳 S M 5 は、S M 4 の北々東約12mの丘陵東肩部にある。方墳だが隅は丸い。墳丘中軸線は北で西に約8度振られる。南北7.1m、東西5.6m、高さは西側で55cm、東側で1.5mである。墳丘の東半部はかなり傾斜している。封土は淡褐色細砂質土で現状で厚さ約40cmが残存するのみである。埋葬施設はすでに流失しているが、木棺直葬と推定される。南側と西側に幅約1m、深さ20~30cmの周溝を検出したが、北側と東側では確認できなかった。墳丘盛土などからコンテナ1箱分の弥生土器が出土したが、下層遺構からの混入である。

S M 6 (図50・51、図版45下・46~48) 古墳 S M 6 は、S M 5 の北々西約12mの丘陵東肩部にある。方墳で南北7.0m、東西6.2m。高さは西側で60cm、東側で1.5mを測る。墳丘盛土は淡褐色粗砂質土層で、現状で厚さ約30cmが残存するのみである。墳丘部に直径15~30cm程の河原石からなる葺石が葺かれているが、東側は完全に流失している。葺石列の角は少し丸くなっている。これらの葺石は周溝内にも多数散乱しており、もとは墳丘斜面全体に葺かれていたと思われる。墳丘の外に幅約1.6m、深さ約20cmの周溝がめぐるが、東側は残存しない。墳丘のはば中心に、長辺2.1m、短辺1.2m、深さ5cmの長方形の墓壙があり、底に径2~6cm程の円礫がしかれている。底面はU字形を呈せず水平である。本墳の中心主体で、

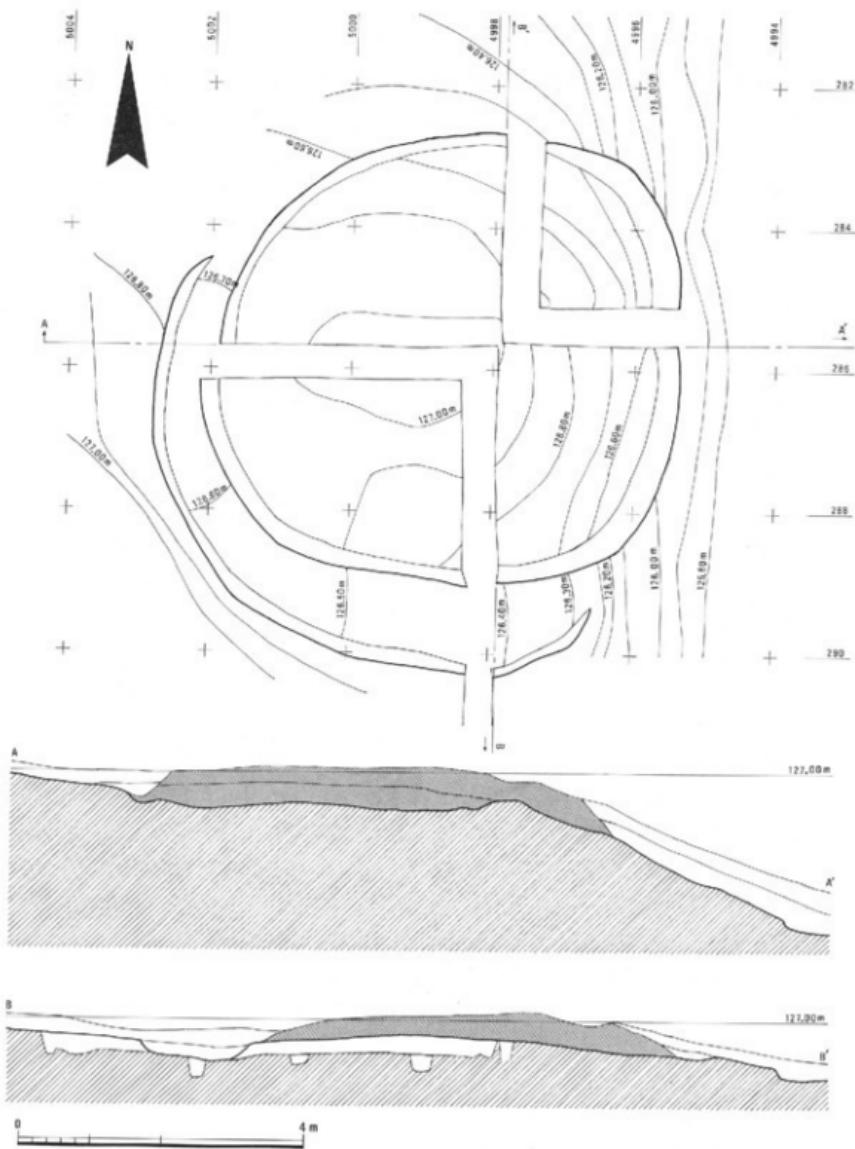


図48 古墳SM 4 (1:80)

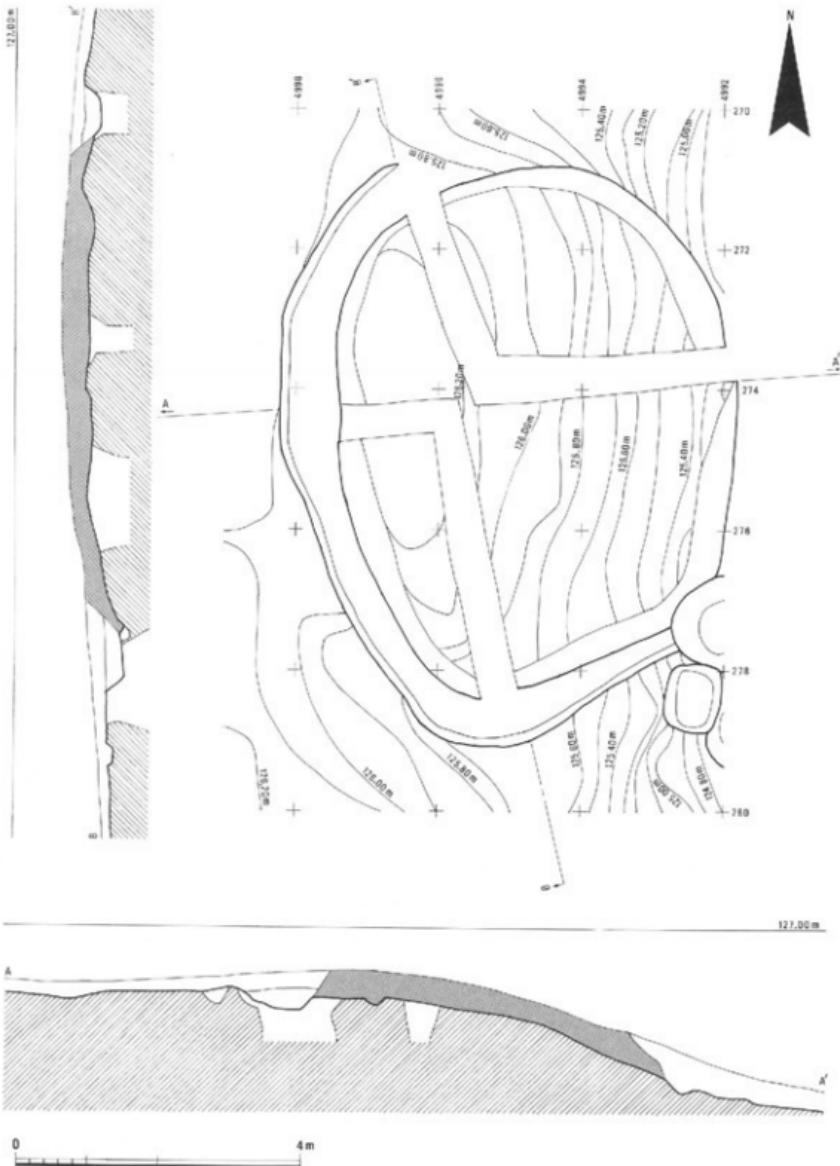


図49 古墳SM5 (1:80)

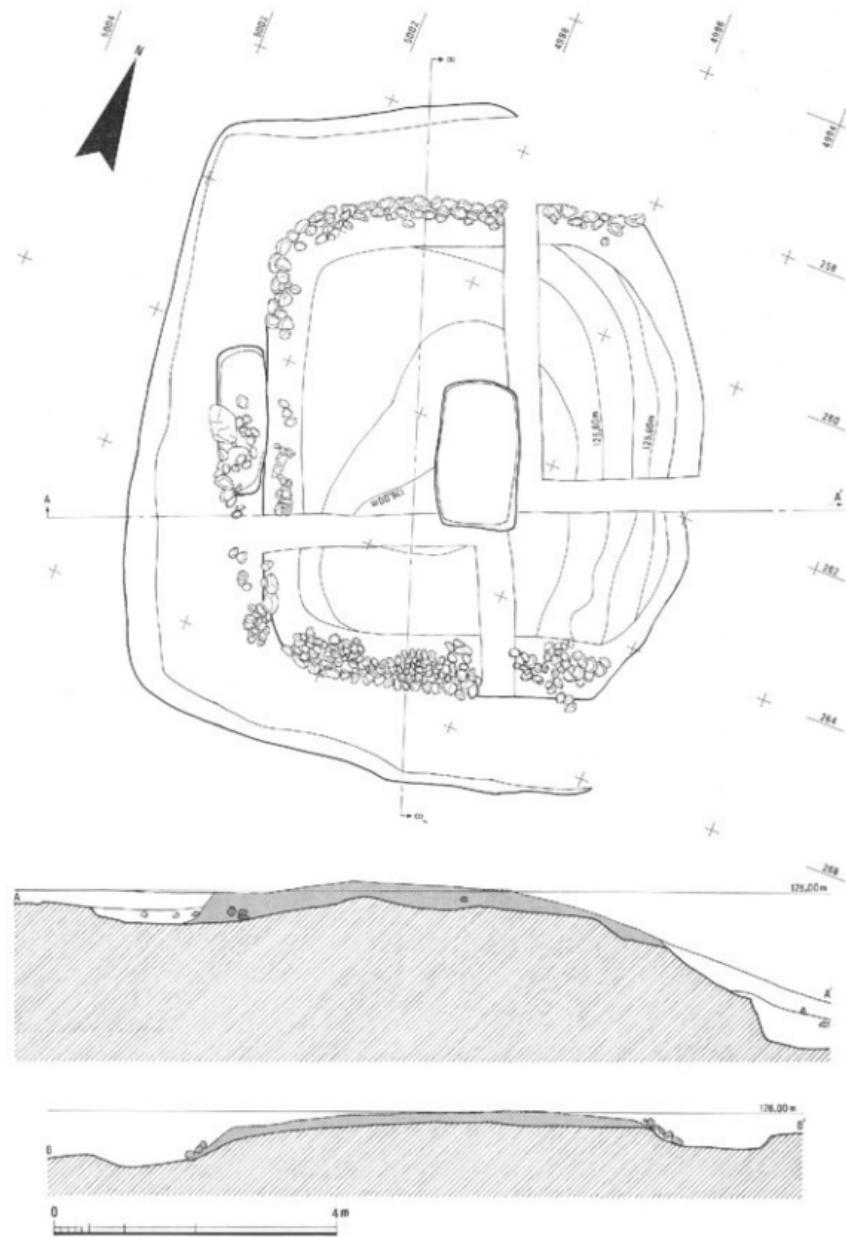


図50 古墳SM 6 (1:80)

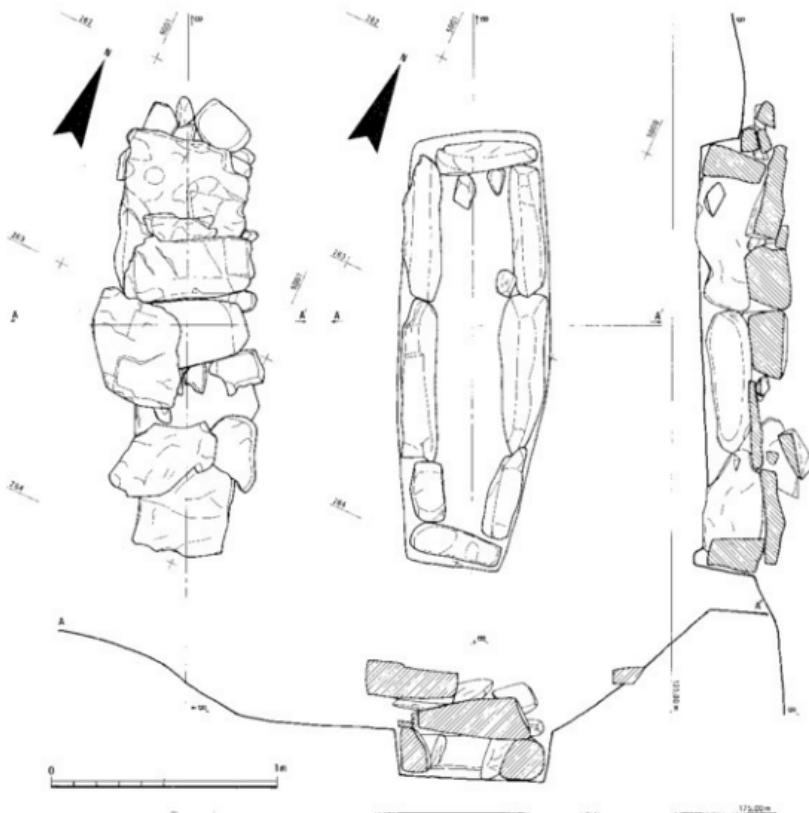


図51 古墳SM6 箱式石棺 (1:25)

裸床の上に箱形の木棺を置いていたものと推定される。中心主体は墳丘辺にはほぼ平行し、その中軸線の方位は約N 22° Wである。西周溝中央の墳端に接して箱式石棺が検出された。内法長辺1.6m、同短辺約30cm、深さ20cm。組合せ式石棺で、身は長辺側石各3個、短辺側右各1個の長方体状の石を立て並べる。蓋は基本的に5個の長方体ないし板状の石からなる。底には特別の装置はない。北短辺側に接して2個の枕石があり、遺体は北頭位と考えられる。中軸線の方位は約N 25° Wである。中心主体、箱式石棺とも遺物は出土しなかった。墳丘南西区周溝上の淡褐色細砂質土から鉄製ヤリガンナの先端部破片1点、須恵器壺片1点が出土した。また、墳丘東側の下方から鉄製ヤリガンナ片1点が出土した。これらはいずれも遊離した状態での出土であり、本墳に伴うかどうか不明である。なお、周溝、墳丘盛土などからコンテナ1箱分の弥生土器が出土したが、下層遺跡からの混入である。

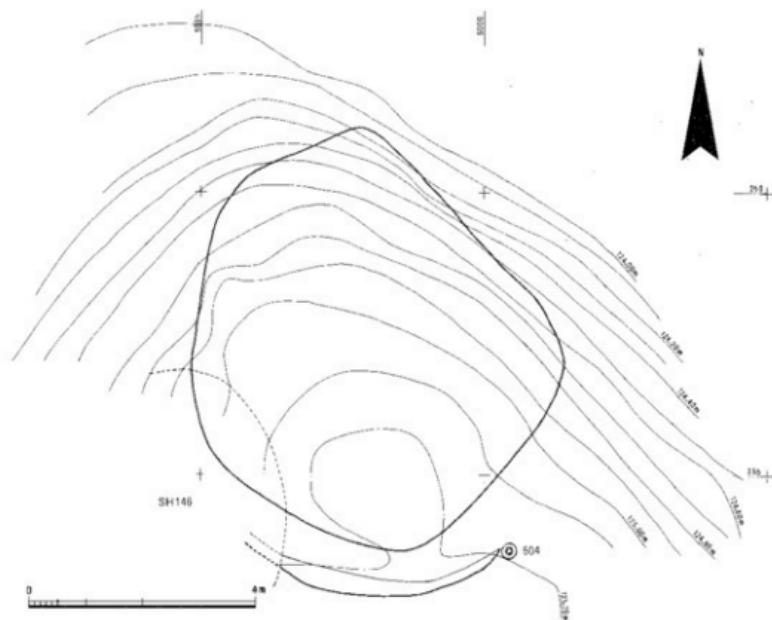


図52 古墳SM7 (1:100)

SM7 (図52・54) 古墳SM7は、SM6の北々西約12mの丘陵頂部にある。現状はいびつな方形を呈し、長辺6.9m、短辺6.0mで、長辺を北西方向に向ける。封土はほとんど流失し、地山の基底部を残すのみである。南側の一部に幅約1.2mの周溝が検出された。その周溝の南肩部で壺棺墓が検出された。墓は土師器壺形上器(504)を垂直に置いたものである。504はほぼ完形に復元される。復元口径約19cm、胴部最大径31.2cm、復元高37.3cm。口縁部はS字状を呈し、胴部は球状で底は丸底である。胴部器壁は4mmと薄い。調整技法は口縁部外面は横ナデ、頭部外面は刷毛目のち横ナデ、胴部外面は刷毛目、頭部内面は刷毛目、胴部内面はヘラ削りである。胎土は1~3mmの白色砂粒を多く含み、黄褐色を呈する。505の高杯は504と併出したもので、天地逆にして蓋として使用されたと推定される。これらの土器は5世紀前半頃のものと推定される¹²⁾。他に周辺から弥生土器数片が出土したが下層遺構からの混入である。

SM8 (図53・54、図版49) 古墳SM8は、SM7の西北西約50mの丘陵西肩部にある。円墳で、南北径8.5m、高さは東側で80cm、西側で1.1m。墳丘は地山を成形したのち、厚さ7~13cmの粘質土を水平に積み上げたもので、現状で4層が検出された。表皮の下はただちに墳丘盛土で、上から燈褐色土、赤褐色土、赤褐色土、黒褐色土となり、その下が燈褐色粘質土

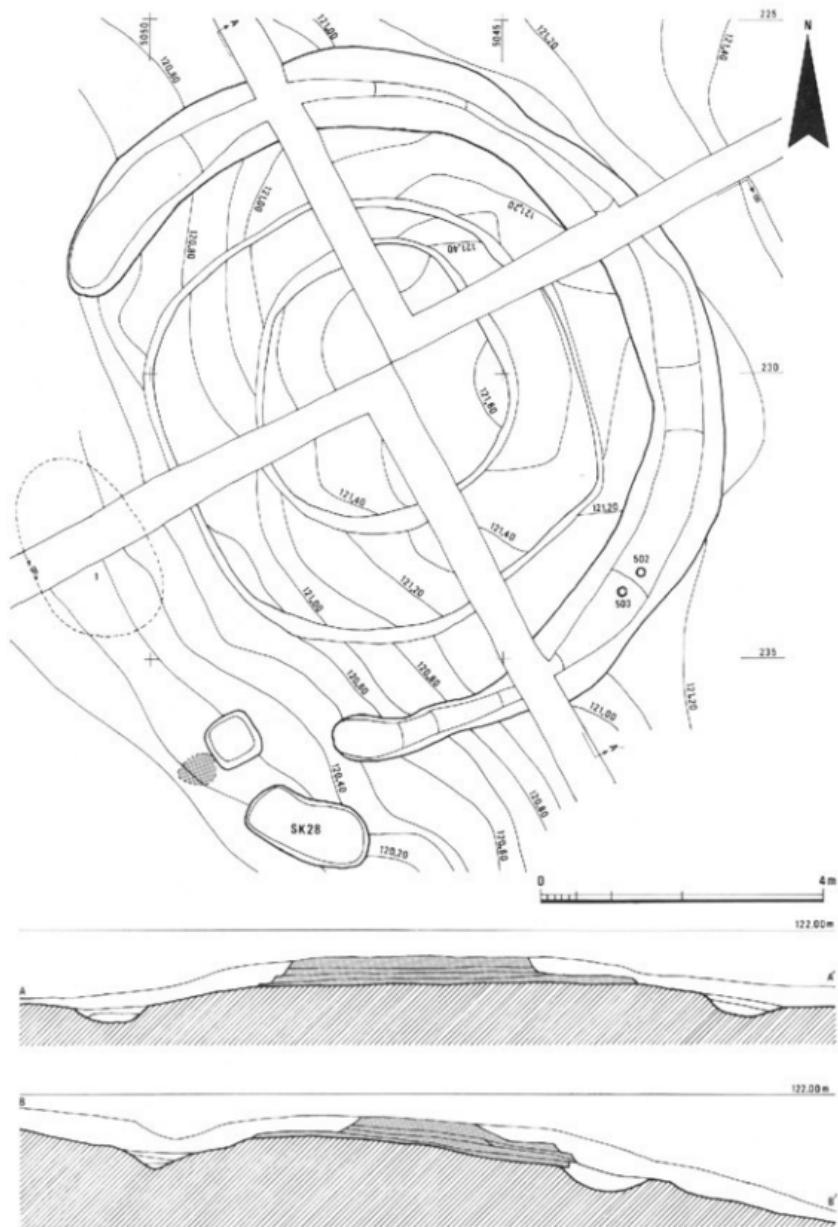


図53 古墳SM 8 (1:80)

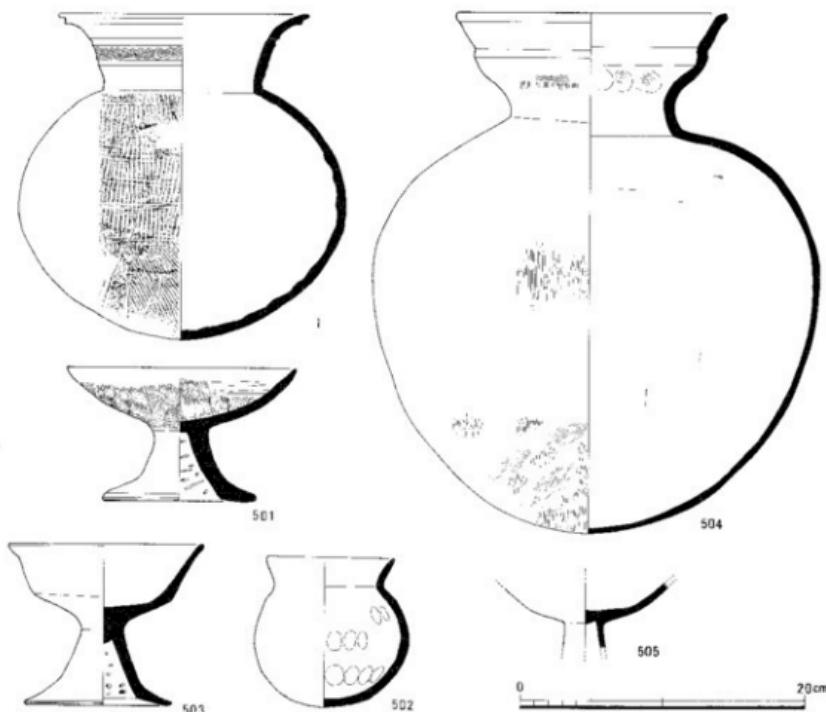


図54 古墳SM2・SM7・SM8出土遺物 (1:4) (501はSM2, 504・505はSM7, 他はSM8)

の地山である。盛上の厚さは現状で約40cmである。墳丘は現状で段がついているが、これは盛上の流失のため本来のものではないと思われる。埋葬施設はすでに流失しているが、木棺直葬と推定される。周囲に幅1.0~1.3m、深さ約25cmの周溝があげてあるが、西側は削り取られて現存しない。南東周溝の底から土師器壺(502)・高杯(503)が並んで出土した。また西側墳裾部で須恵器(1)が2×3m程の範囲に散乱して出土した。南周溝の外側付近に2箇所の上坑と1箇所の焼土面が検出されたが、出土遺物はなく、古墳との関係は不明である。

502(図版51下)は土師器壺のほぼ完形個体である。復元口径約9cm、胴部最大径11.0cm、器高10.7cm。頭部はく字状を呈し、胴部は球形で丸底である。外面全面と口縁部内面はヘラ磨き調査、胴部内面は指頭圧痕が顕著である。外面に丹彩の痕跡がある。胎土は1~4mmの白色砂粒を多く含み、黄褐色を呈する。503(図版52上)は高杯のほぼ完形個体である。杯部は下半部で屈曲し、端部でもわずかに屈曲する。脚筒部は八字状を呈し、裾部は水平ぎみに拡がる。外面全面と杯部内面はヘラ磨き、脚部内面は左横方向のヘラ削り調査である。胎土は1~4

mmの白色砂粒を多く含み、黄褐色を呈する。I（図版51上）は須恵器窓である。全体の3分の1程の破片だが、一応完形に復元しうる。復元口径約17.5cm、復元胴部最大径約23cm、復元高約23.5cm。口縁部は外湾し、外面に各1条の突帯と凹線をめぐらす。頸部外面にも2条の凹線がめぐり、凹線間に6条の櫛書き波状文がある。胴部は少し扁平な球形で、丸底を呈する。調整技法は口頸部内外面が横ナデ。ただし頸部内向中央は指で仕上げる。胴部外面の上3分の2は縱方向の平行叩きのうち約1.5cmおきに数条の沈線を乱雜に施す。下3分の1から底部にかけては、上よりやや細かい平行叩き目を斜め方向に交錯して施す。胴部内面上半は指で粗く仕上げ、同下半は未調整で凹凸が著しい。胎土は0.5~1.5mm程の白色砂粒を少數含み、灰褐色を呈する。大阪府陶色古窯址群のTK216型式⁽³⁾に平行すると思われる。上記以外にも、北東区墳丘上面から鉄製刀子のほぼ完形個体が出土した。これは中心主体に伴う可能性がある。また、北東区周溝及び南西区から器種不明の須恵器片、北西区から奈良時代の須恵器杯身、墳丘周辺から弥生土器コンテナ1箱分が出た。後二者は明らかな混入品である。本墳の築造時期はIの須恵器の年代すなわちTK216型式の時期、絶対年代では5世紀後半頃と考えられる。

3 その他の遺構

調査区南西の丘陵南西斜面に2棟の壠立柱建物SB86・SB89、1箇所の段状遺構SS56がある。これらからは勝間田焼が出土したので、鎌倉時代の遺構と考えられる。調査区南端の丘陵北斜面に白鳳時代の土塙墓SG45（図版53）があり、内部から須恵器杯蓋（図版54上）1個、同杯身2個（同中・下）が出土した。調整区南辺の丘陵北斜面から西斜面にかけて落し穴状遺構10箇所が検出された。ST46・ST48・ST50・ST51・ST53・ST57・ST58・ST62・ST68・ST203がこれであるが、出土遺物は皆無のため時期は不明。

注

- (1) 小郷利幸『正善庵遺跡』（津山市埋蔵文化財発掘調査報告第14集）東一宮土地区画整理組合・津山市教育委員会 1992年
- (2) 口縁部の特徴からみて、岡山県南部土師器編年の亀川上層式より新しく、川入・大溝上層式より古いと思われる。（柳瀬昭彦・江見正己・中野雅美『川入・上東』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16 1977年）
- (3) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年

III 結 語

弥生土器の編年 本遺跡から出土した弥生土器は、コンテナ約160箱である。これらはすべて弥生時代後期に属する。本書ではこれをI~IV期に細別した。

I期 墓穴住居S H169・S H39、貯蔵穴S C34・S C78出土土器などを標式とする。壺は口縁端部が肥厚し、外面に数条の凹線文をめぐらす。肩は大きく張り、胴部最大径は上位にある。壺も口縁部外側に数条の凹線文をめぐらすものが多い。高杯は脚部が細長く、杯部と脚部を連続形技法で成形する。

II期 墓穴住居S H141・S H74、貯蔵穴S C36、窓棺墓S G224・S G231・S G237・S G240・S G66、木棺墓S G232、造構S X219出土土器などを標式とする。壺は口縁端部を単に肥厚させるだけのものと、端部を上方に拡張させるものとが相半ばする。口縁部外側には数条の凹線文をめぐらすものが多いが、少数櫛描沈線が施されるものもある。胴部最大径は中央ないし中央よりやや上位にある。鉢は大形で口縁端部を上方に拡張するものとしないもの、外面に凹線文があるものとないものがある。高杯は杯部が大きく外反し、中程で屈曲するものが主体である。杯部と脚部は分割成形技法で成形されるものが多い。器台は大形で上端部が上方に拡張する。

III期 貯蔵穴S C98・S C42出土土器などを標式とする。壺は二重口縁で外面は装飾を施さないものが大部分だが、少数沈線を有するものがある。胴部最大径は中央付近にある。底は明瞭な平底を呈する。鉢は二重口縁で、丸底ぎみの平底のものと、明瞭な平底のものがある。高杯は、杯部の中程で屈曲し、大きく外反するものと、小さい杯部の端部が直立するものの二種類がある。いずれも脚筒部と脚部との間に明瞭な屈曲部を有さない。

IV期 貯蔵穴S C114・S C10・S C15出土十器などを標式とする。壺は二重口縁のものが多く、大形品には口縁が大きく外反し、頸部と肩部の境に突唇を付するものがある。壺も二重口縁のものが主体である。胴部最大径は中央付近にあり、底は平底にまじって、丸底ぎみの平底のものがある。高杯はIII期と同じく二種類があるが、いずれも脚部が屈曲する。器台は鼓形器台で、くびれ部幅が広い。

以上の十器編年は、津山市大田十二社遺跡弥生土器編年¹¹にほぼ対応する。すなわち、I期が十二社1式、II期が十二社2式、III期が十二社3式、IV期が十二社4式にそれぞれほぼ平行する。ただし、十二社2式の壺・甕が櫛描き平行沈線文を盛行させるのに対し、本遺跡ではそれが少数である。また、十二社4式の壺・甕の成形に叩き技法が出現するのに対し、本遺跡ではその技法は全くみられない。よって、I期が後期前葉、II期が後期前半、III期が後期後半、IV期が後期後葉に比定されよう。

弥生時代集落の変遷 本遺跡で弥生時代遺跡の出現するのは、後期前葉（Ⅰ期）である。

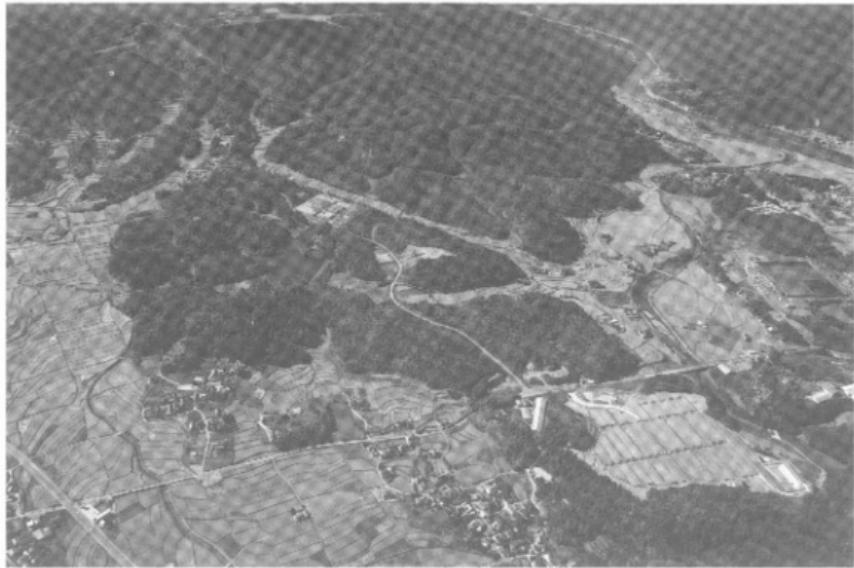
丘陵上から東裾部にかけて、4棟の堅穴住居（SH1146・SH159・SH169・SH39）が築かれる。高床倉庫は丘陵北端にSB127がある。西斜面のSB101もこの時期の可能性がある。貯蔵穴は南群のSC35、SC37、SC34、SC78、北群のSC238がある。SH39とSC35などとが重複するので、この時期はさらに細分されよう。後期前半（Ⅱ期）には、4棟の堅穴住居（SH124・SH141・SH29・SH74）がある。貯蔵穴は北群のSC239、SC100、南群のSC36、SC38、SC81がこの時期である。なお、北群のSC97、SC105、南群のSC83もⅠないしⅡ期に属する。また、北東斜面の木棺墓、甕棺墓群のほとんどがⅡ期とみられる。後期後半（Ⅲ期）になると遺構数は減少する。堅穴住居SH41と貯蔵穴SC98・SC42が知られるのみである。後期後葉（Ⅳ期）には、堅穴住居1棟（SH33）と貯蔵穴北群のSC114・SC113・SC10・SC15・SC96がある。また、SH33に近接して土墳墓SG32があり、それに西接するSG31もこの時期と思われる。

古墳群の時期と性格 8基の古墳のうち、時期の判明するのはSM2・SM7・SM8の3基のみである。このうち、SM2・SM8は5世紀後半頃、SM7は5世紀前半頃に比定される。SM6も遙離して出土した須恵器を重視すれば5世紀後半以降となる。他については不明だが、おそらく大幅な時期差はないと推定される。さて、本遺跡から望める平地は、北東の金井・福力・中原などからなる旧大崎村の小盆地のみであること、SM4～SM7の4基が北東方向を意識して、丘陵東肩部に築かれていることから、本古墳群の被葬者の墓盤はその大崎地区の盆地と思われる。盆地周辺の丘陵上には、前期から後期にかけての小古墳群が濃密に分布している。これはこの地区が古墳時代を通じて、一貫して農業生産の基礎単位であったことを示すであろう。とすれば、本古墳群は大崎地区の小首長の世代毎の奥津城であろうか。おそらくそうではあるまい。大は全長32mの前方後円墳から、小は7m程の円・方墳まで、古墳間の隔差が著しいこと、築造時期が近接しているらしいことからみて、本古墳群は5世紀頃の小集団の共同墓地とみるべきだろう。SM1はその集団の首長、SM2以下はその集団を構成する家族の家族長、SM3はその中でもやや有力な家族長とみられる。墳形や立地からしてSM1の優位性は明らかであり、対外的に小集団を代表するのはSM1の被葬者のみであろう。にもかかわらず、共同墓地としての性格を有していることからみて、彼は集団に対する専制的権力を保持していないと思われる。小集団の権力の源泉は、いくつかの家族長の連合にあり、首長の地位は対外的に集団を代表する限りにおいてのみ保持されたのではなかろうか。

注

- (1) 中山後紀『大田十二社遺跡』（津山市埋蔵文化財発掘調査報告10集）津市教育委員会
1981年

図 版



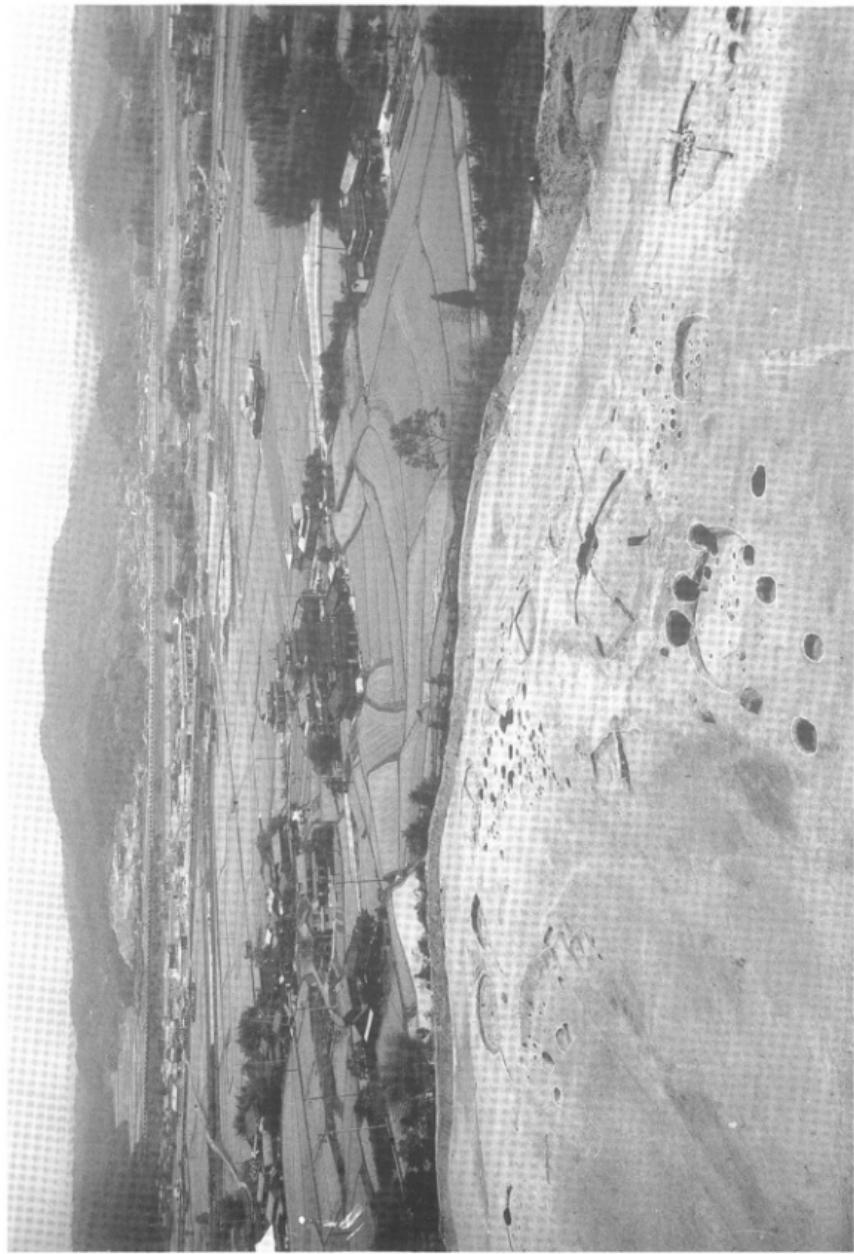
上　遺跡周辺空中写真（発掘前、北から）

下　遺跡周辺空中写真（発掘後、南から）

図版2

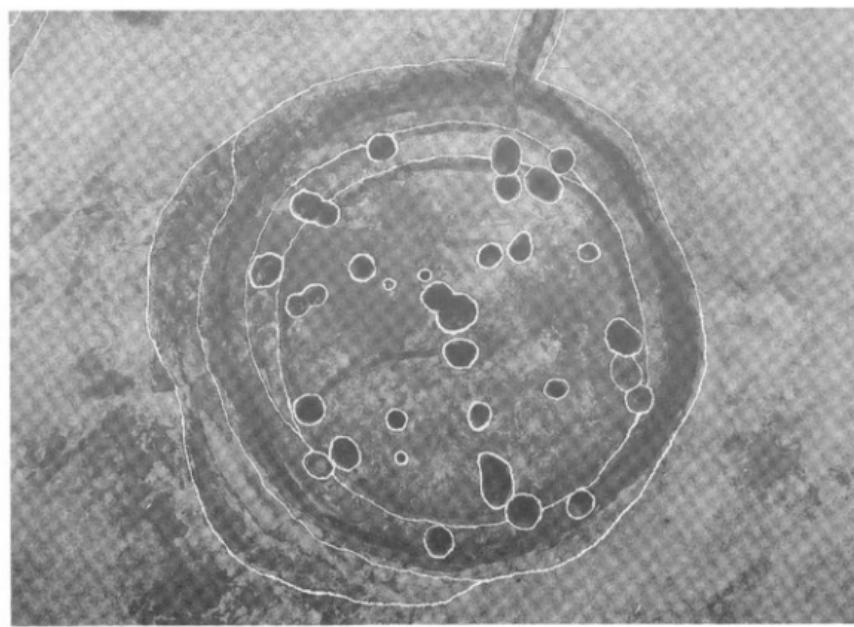
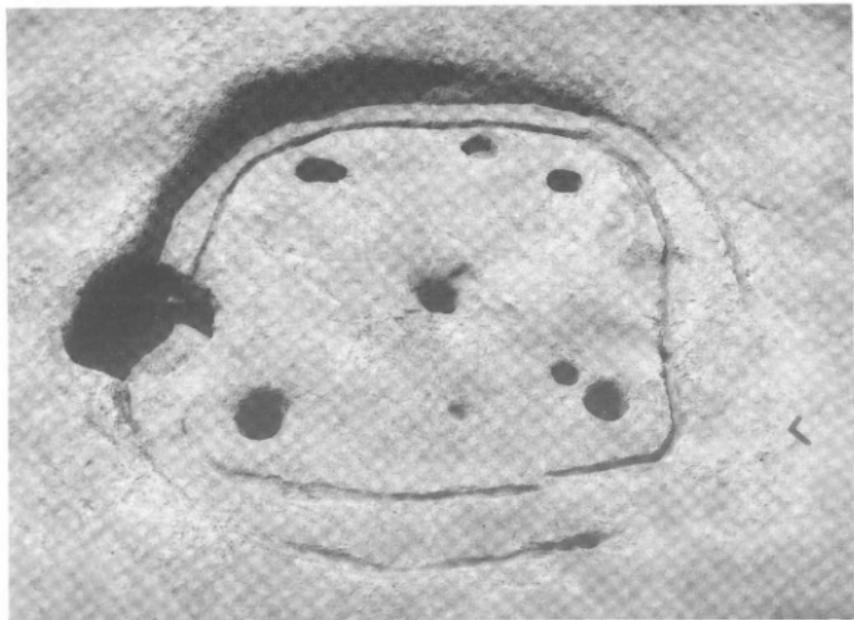


通路空中写真（上が北）



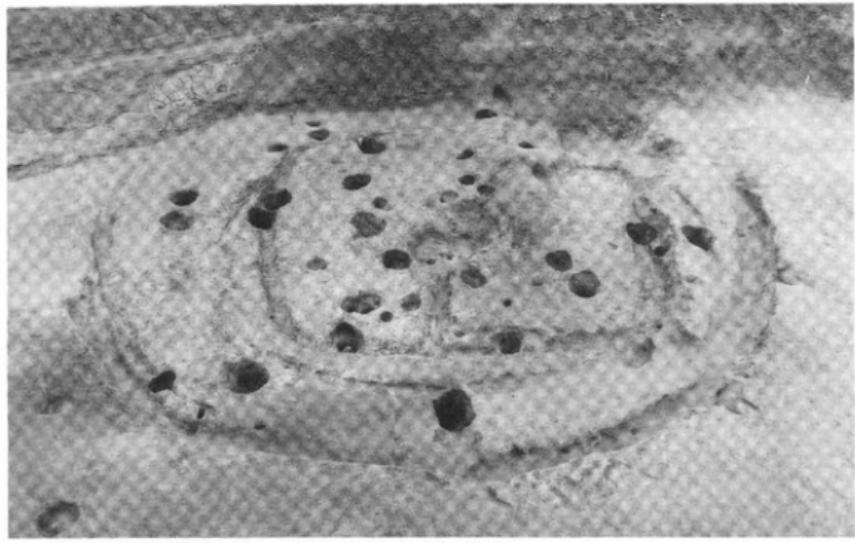
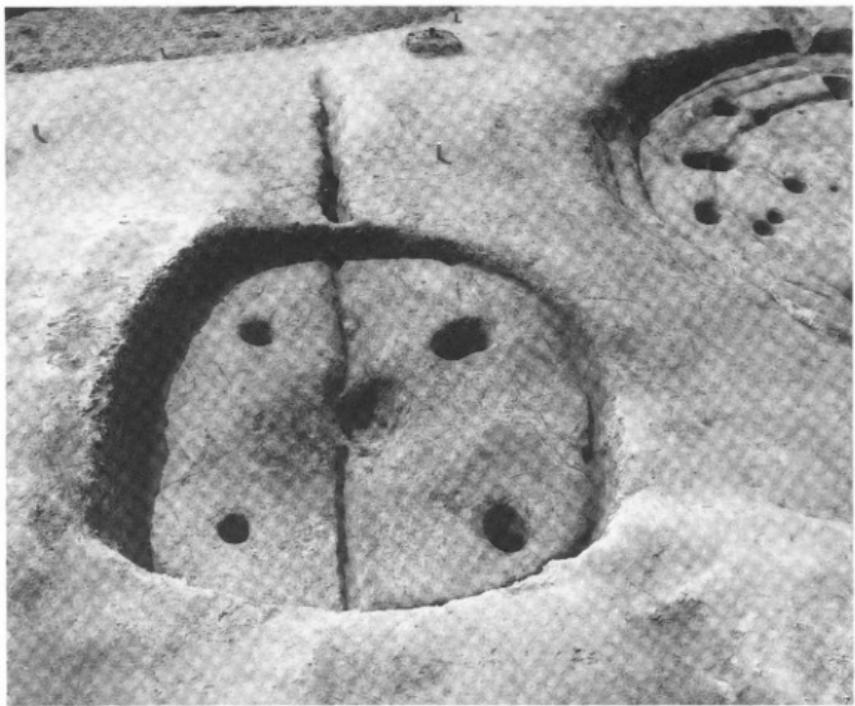
道標から北東方向を望む

図版 4



上 堅穴住居 SH124 (北東から)

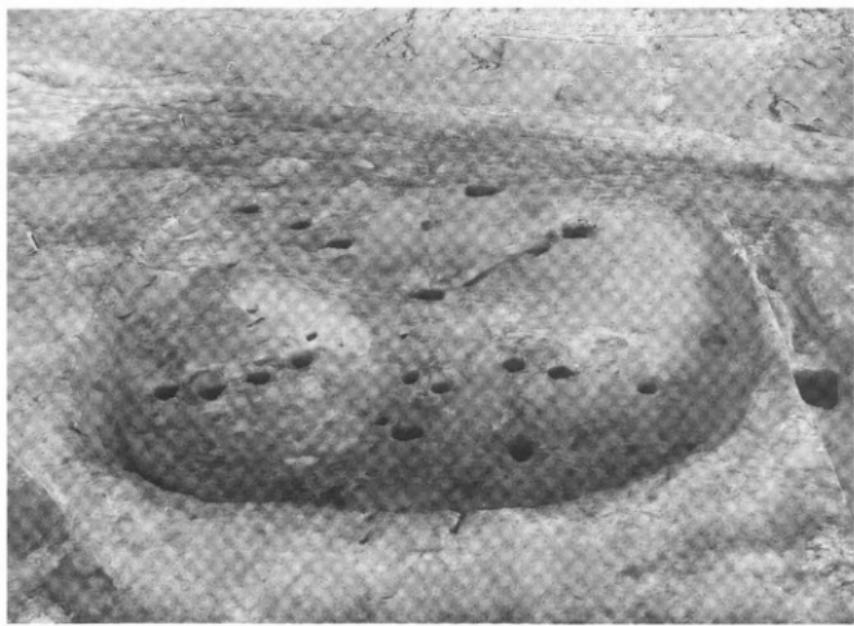
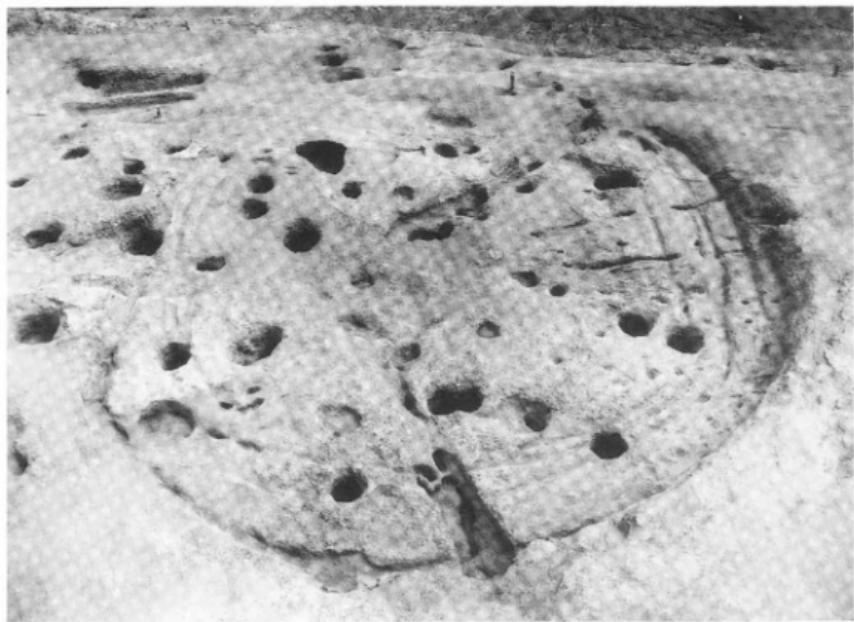
下 堅穴住居 SH141 (東から)



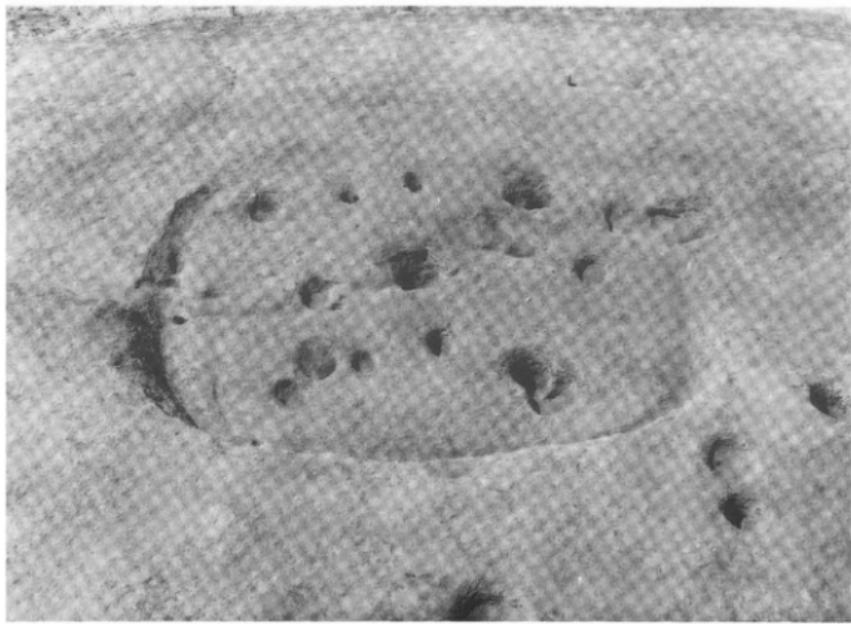
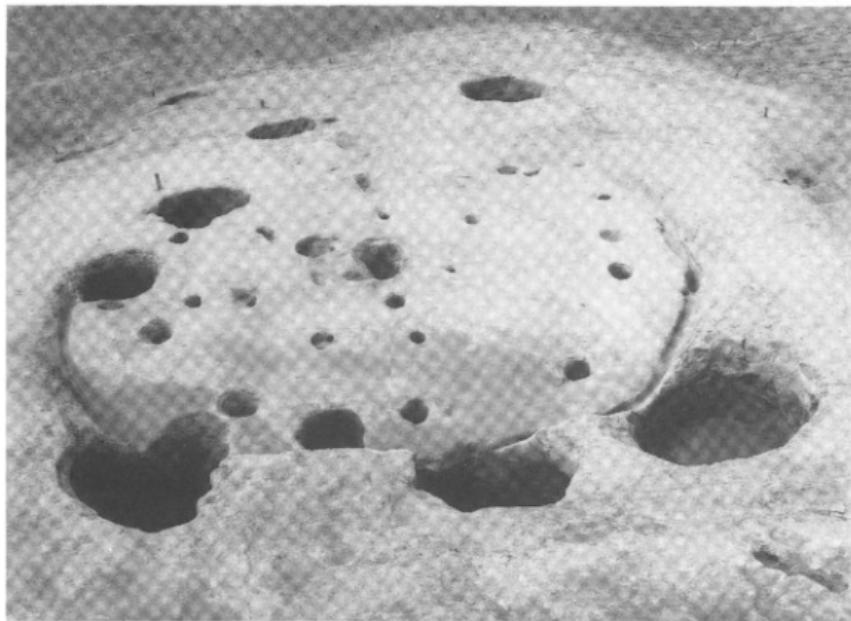
上 壁穴住居 S H146 (東から)

下 壁穴住居 S H169 (西から)

図版 6

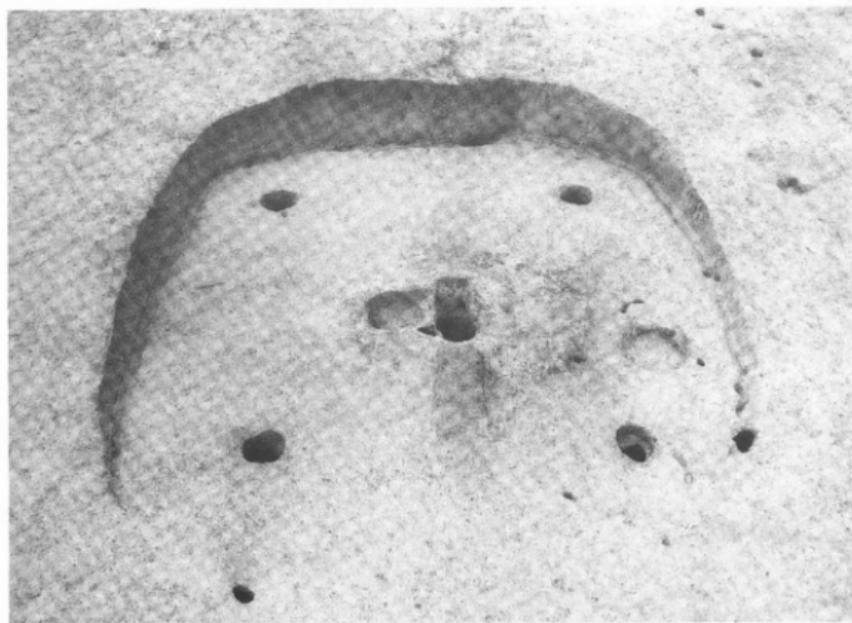


上 桧穴住居 S H33 (西から) 下 桧穴住居 S H41 (西から)



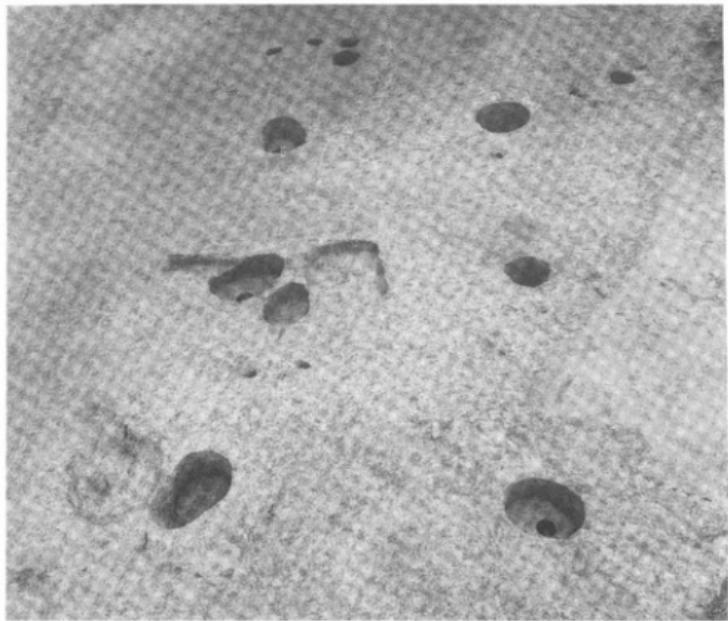
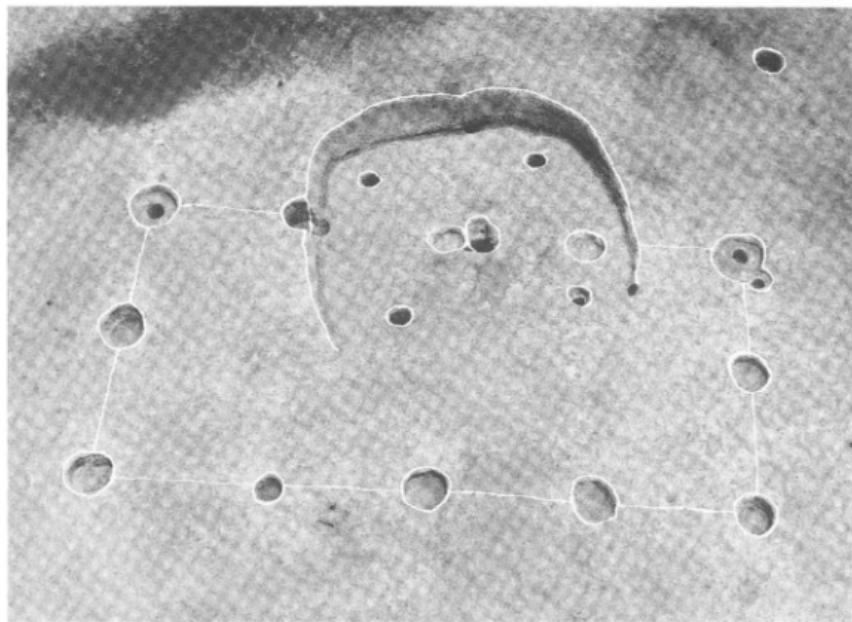
上 壁穴住居 S H39 (東から) 下 壁穴住居 S H29 (北東から)

図版 8



上 堅穴住居 SH159 (空中から)

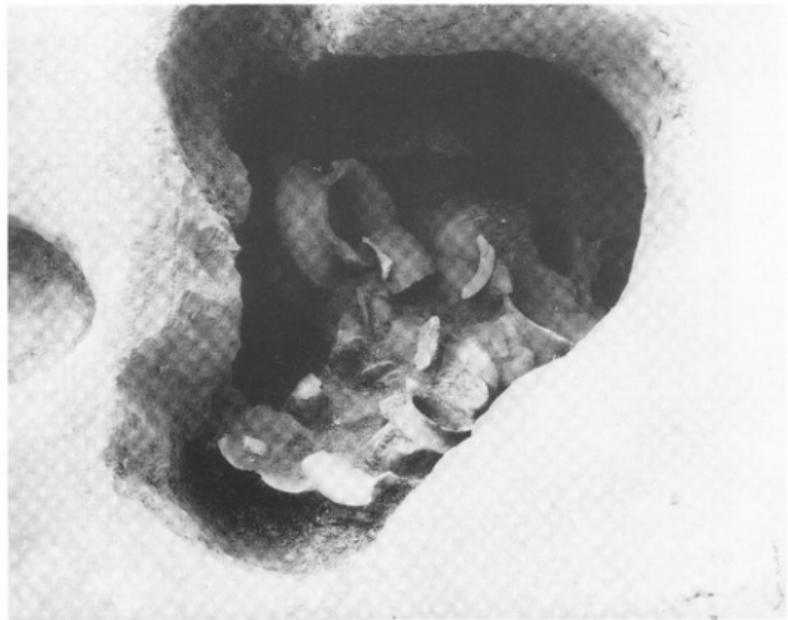
下 堅穴住居 SH74 (南西から)



上 堅穴住居 S H74・掘立柱建物 S B101 (南西から)

下 掘立柱建物 S B127 (西から)

図版10



上 貯藏穴北群全景（南から） 下 貯藏穴SC 114遺物出土状況